

# 石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要12

●  
[於紅ヶ谷地区・竹田地区]

2002年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

# 石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要12



[お べ に が た に た け だ  
於紅ヶ谷地区・竹田地区]

2002年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会



# 序

石見銀山遺跡は、その最盛期に生産された銀が、海外に多く輸出され、世界経済にも影響を与えた鉱山の遺跡といわれます。また、国内においては灰吹法伝来という精錬技術の先駆的な役割を果たしたことから、日本鉱業技術発祥の地とも称されます。

現地に足を踏み入れますと、採掘や製錬の跡から生活の跡、取り巻いている山城、物流の根幹となった街道、面影を伝える伝統的な町並み、景観を残す港湾など、中世から近世の銀山の全容を残す遺跡とわかります。

このような遺跡の重要性に注目され、国の文化財保護審議会で、世界遺産に登録されることが適当と思われる物件の一つに選定されました。

また、遺跡保護の手だてとした国指定地の範囲拡大に際しては、土地所有の方々のご承諾を頂き、同和鉱業株式会社をはじめとする関係各位のご協力を得て、平成14年3月19日に告示されました。遺跡を保全する上で心強く思いますとともに、謹んで敬意を表するものです。

遺跡を後世に伝えていくためには、保全に努めることはもとより、管理活用の方途も重要でありますし、遺跡の価値を顕在化するために、調査研究も継続して行われることが必要と考えます。

今回刊行いたしましたこの調査報告は、平成11～13年度に実施した調査に係るもので、調査に際しましてご協力いただきました関係各位に衷心より厚く御礼申し上げ、本書が今後の遺跡解明や整備活用などに資すれば幸いに存じます。

平成14年3月

島根県大田市教育委員会

教育長 松本陽三

# 例 言

1. 本書は、鳥根県大田市大森町に所在する史跡石見銀山遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は国庫補助事業として大田市教育委員会が事業主体となり、鳥根県教育委員会と共同で実施した。
3. 本書の内容は、平成11～13年度の調査成果のうち、於紅ヶ谷地区（平成13年度）、竹田地区（平成11～13年度）についての概要をまとめたものである。
4. 調査体制は下記のとおりである。

〔石見銀山遺跡発掘調査委員会〕

田中 琢（前奈良国立文化財研究所所長） 田中圭一（群馬女子大学教授）  
田中義昭（元鳥根大学教授） 脇田晴子（滋賀県立大学教授）  
藤岡大拙（鳥根県立女子短期大学学長）  
小寺八郎（同和鉱業(株)取締役管理本部副本部長 平成11年度）  
澤田谷和（同和鉱業(株)総務・法務部門部長 平成12年度）  
畠本晴隆（同和鉱業(株)コーポレートスタッフ総務部門部長 平成12～13年度）  
渡辺哲雄（同和鉱業(株)コーポレートスタッフ総務部門部長 平成13年度）  
熊谷國彦（鳥根県大田市長） 安田増憲（鳥根県温泉津町長）  
池亀 貴（鳥根県仁摩町長）

山下嘉三（鳥根県教育委員会教育次長 平成11年度）  
井上勝博（鳥根県教育委員会教育次長 平成12～13年度）

〔事務局〕

鳥根県大田市教育委員会 文化振興室

〔調査員〕

大田市教育委員会 大國晴雄・遠藤浩巳・中田健一  
鳥根県教育委員会 目次謙一・松尾充晶（平成11年度）  
鳥谷芳雄・守岡正司（平成12～13年度）

〔調査補助〕坂根健悦・今岡司郎

〔遺物整理〕中川英子・高村玲子・涌井葉子・太田洋子・湯川 登・岩谷和樹・山崎明夫  
松井紀充・石橋直子・原 美樹

〔調査指導〕

文化庁記念物課  
独立行政法人奈良文化財研究所  
鳥根県教育庁文化財課  
鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター

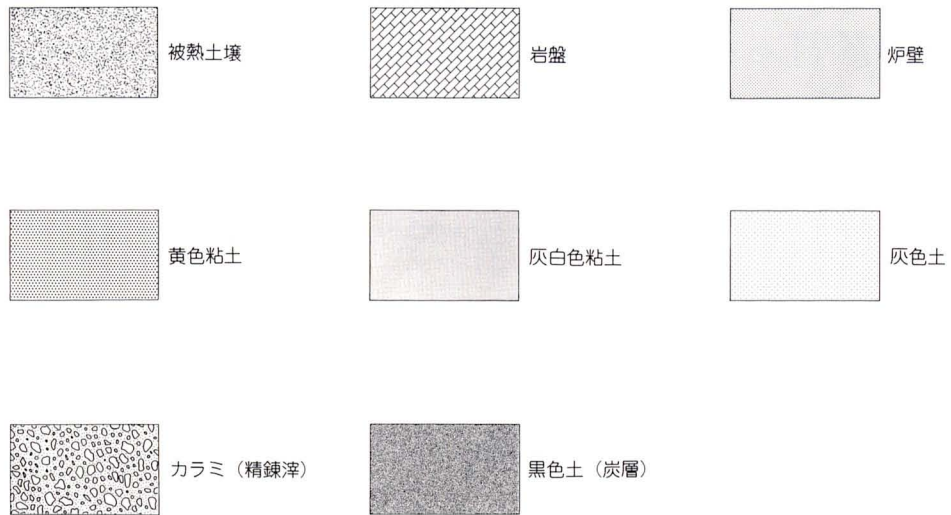
5. 下記の方々から多くのご教示、ご指導を頂いた。記して謝意を表すものである。（敬称略・五十音順）  
池田善文・内田俊秀・岡 泰正・小野正敏・河瀬正利・川副麻理子・小池伸彦・小泉和子・高田 潤  
玉井哲雄・鳥越俊行・仲野義文・中村唯史・藤原友子・細見啓三・村上 勇・村上伸之  
村上 隆・山崎美和
6. 於紅ヶ谷地区の調査（平成13年度）は鳥谷、中田、竹田地区の調査は、松尾（平成11年度）守岡（平成12～13年度）が中心となって行った。
7. 挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。またレベル高は海拔高を示す。
8. 第1図・第2図は国土交通省国土地理院発行の地形図を縮小編集し、一部加筆して使用した。
9. 本文中に使用した略号は下記のとおりである。  
SB－建物跡 SD－溝跡 SK－土坑 SX－炉跡、特殊遺構
10. 本書の執筆は第1～3章を中田、第4～5章を守岡が担当し、編集は調査員が共同で行った。
11. 出土資料及び実測図・写真などは大田市教育委員会で保管している。



# 凡例

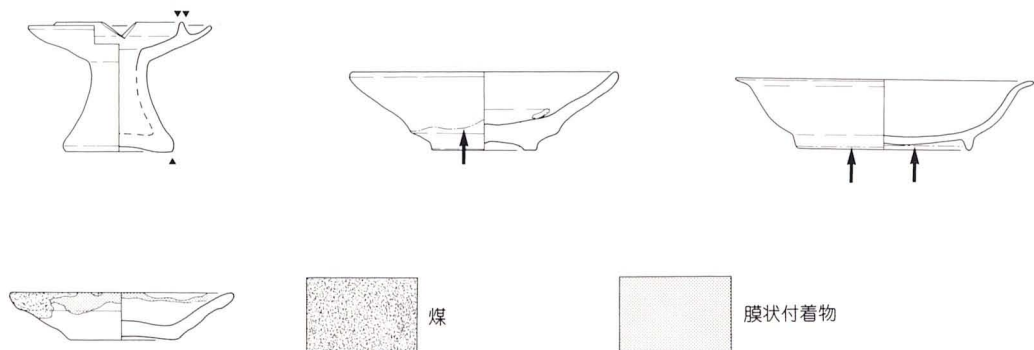
1. 遺構・遺物図版中における表現は下記の基準で使用している。  
これ以外のものについては、個別に図中に示した。

## 〔遺構〕



## 〔遺物〕

- ・ 図中の▼印あるいは一点鎖線（図中↑箇所）は施釉範囲の境界を示す。



2. 本書の文中「ズリ」とは、選鉱工程にて除去される化学的変化に起因しない目的鉱物以外の石をいう。「ユリカス」とは、比重選鉱により除去された砂粒をいう。

# 本文目次

第1章	位置と環境	1
第2章	遺跡の概要	3
第3章	於紅ヶ谷地区の調査	10
第1節	調査の経過	10
第2節	調査の概要	12
第3節	出土遺物	12
第4章	竹田地区の調査	
第1節	竹田地区の概要	16
第2節	竹田地区調査の経過	17
第3節	平成11年度の調査	18
第4節	平成12年度の調査	18
第5節	平成13年度の調査	22
第6節	遺構と遺物	22
第5章	まとめと課題	
第1節	竹田地区の遺構	55
第2節	出土遺物	55
第3節	竹田地区調査のまとめと課題	60



# 挿図目次

第1図	石見銀山遺跡位置図 (S = 1/150,000) .....	1
第2図	石見銀山遺跡分布図 (S = 1/25,000) .....	5
第3図	石銀藤田・於紅ヶ谷・竹田地区調査区配置図 (S = 1/1,500) .....	9
第4図	於紅ヶ谷地区遺構配置図 (S = 1/250) .....	11
第5図	1-2トレンチ土層図 (S = 1/60) .....	13
第6図	水路平面図・土層図 (S = 1/30) .....	13
第7図	於紅ヶ谷地区遺物実測図 (S = 1/3・1/2) .....	14
第8図	竹田地区周辺の石造物実測図 (S = 1/10) .....	16
第9図	竹田地区トレンチ・調査区配置図 (S = 1/1,000) .....	19
第10図	竹田地区Ⅰ区遺構配置図 (S = 1/300) .....	20
第11図	竹田地区Ⅰ区土層図 (S = 1/60) .....	21
第12図	竹田地区Ⅰ区遺構実測図① (S = 1/30) .....	23
第13図	竹田地区Ⅰ区遺構実測図② (S = 1/40) .....	25
第14図	竹田地区Ⅰ区遺構実測図③ (S = 1/30) .....	27
第15図	竹田地区Ⅰ区遺構実測図④ (S = 1/30・1/60) .....	29
第16図	竹田地区Ⅰ区遺構実測図⑤ (S = 1/60) .....	30
第17図	竹田地区Ⅰ区遺構実測図⑥ (S = 1/30) .....	31
第18図	竹田地区Ⅱ区遺構配置図 (S = 1/60) .....	31
第19図	竹田地区Ⅲ区遺構配置図 (S = 1/80) .....	32
第20図	竹田地区Ⅲ区土層図 (S = 1/80) .....	33
第21図	竹田地区出土遺物実測図① (S = 1/3) .....	35
第22図	竹田地区出土遺物実測図② (S = 1/3) .....	36
第23図	竹田地区出土遺物実測図③ (S = 1/3) .....	37
第24図	竹田地区出土遺物実測図④ (S = 1/3) .....	39
第25図	竹田地区出土遺物実測図⑤ (S = 1/3) .....	40
第26図	竹田地区出土遺物実測図⑥ (S = 1/2) .....	41
第27図	竹田地区出土遺物実測図⑦ (S = 1/3) .....	42
第28図	竹田地区出土遺物実測図⑧ (S = 1/2) .....	44
第29図	竹田地区出土遺物実測図⑨ (S = 1/2) .....	45
第30図	竹田地区石製品実測図① (S = 1/6) .....	46
第31図	竹田地区石製品実測図② (S = 1/6) .....	47
第32図	竹田地区碁石・円盤状土製品実測図 (S = 1/2) .....	47
第33図	石見銀山遺跡製錬関連土製品実測図① (S = 1/4) .....	56
第34図	石見銀山遺跡製錬関連土製品実測図② (S = 1/4) .....	57
第35図	石見銀山遺跡計量器関係遺物実測図 (S = 1/2) .....	58

# 表目次

表1	竹田地区ズリ計測表①(重量による度数分布)	13
表2	於紅ヶ谷地区出土遺物観察表	15
表3	竹田地区ズリ計測表②(形状による度数分布)	15
表4	竹田地区ズリ計測表③(重量と形状の相関)	15
表5	石銀地区年代別石造物集成表	17
表6	竹田地区出土遺物観察表(陶磁器)	49~52
表7	竹田地区出土遺物観察表(金属・土・ガラス製品、製錬関連)	52~53
表8	竹田地区石製品観察表	54
表9	石見銀山遺跡基石・円盤状土製品集計表	54
表10	石見銀山遺跡製錬関連土製品観察表	61
表11	竹田地区遺物集計表	61
表12	石見銀山遺跡計量器関係遺物観察表	62
表13	竹田地区石造物一覧表	62

# 本文写真目次

写真1	上空から見た仙ノ山	2	写真2	栃畑谷下層確認トレンチ	3
-----	-----------	---	-----	-------------	---

# 写真図版目次

PL. 1	: No49問歩全景(南から) 立石検出状況(東から)
PL. 2	: 岩盤加工遺構(南西から) 同上(南東から)
PL. 3	: No49問歩工具痕(西から) 1-2トレンチ土層(西から)
PL. 4	: 岩盤加工遺構周辺(南東から) 水路内遺物出土状況(南東から)
PL. 5	: I区SW区第1面地山面検出状況(北西から) I区NW区第1面検出状況(南から)
PL. 6	: I区SE区SK01検出状況(南から) I区SW区SK04検出状況(東から)
PL. 7	: I区NW区SK15ユリカス堆積状況(南から) I区NW区SK15内鉛検出状況(南から)
PL. 8	: I区SE区SK01・SK10ズリ堆積状況(東から) I区NW区SX09検出状況(北から)
PL. 9	: I区NW区SX13・SX14検出状況(南から) I区NW区西壁土層堆積状況(東から)
PL. 10	: I区NW区SX12検出状況(西から) I区NW区SX13検出状況(西から)
PL. 11	: I区NW区第3面上鉄製品検出状況(西から) II区トレンチ土層堆積状況(北西から)
PL. 12	: I区第3トレンチ遺構検出状況全景(北から) I区第3トレンチSK13検出状況(西から)
PL. 13	: III区トレンチ全景(北から) III区トレンチ西側遺構検出状況(北東から)
PL. 14	: III区トレンチ南側遺構検出状況(北から) III区トレンチ東側遺構面検出状況(西から)
PL. 15	: 出土遺物①
PL. 16	: 出土遺物②
PL. 17	: 出土遺物③
PL. 18	: 出土遺物④
PL. 19	: 出土遺物⑤
PL. 20	: 出土遺物⑥



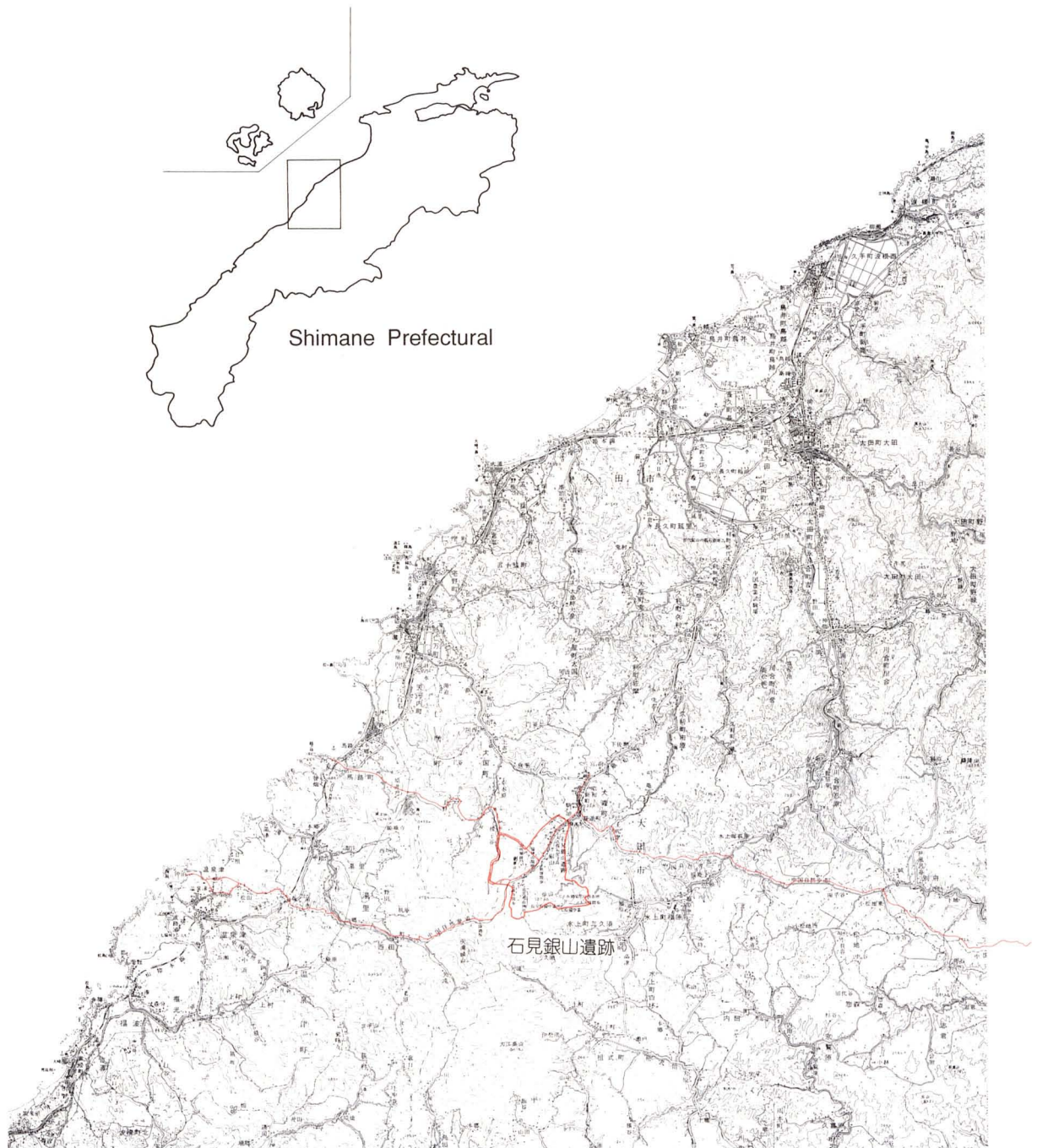
# 第1章 位置と環境

島根県は東西に長く、日本海に面して600kmに及ぶ海岸線を有している。旧国では出雲、石見と島嶼の隠岐の3国からなり、石見銀山は「石見国」の東側いわゆる「石東」といわれる地域に位置している。

出雲では、斐伊川をはじめとする河川によって、ややまとまりのある沖積平野が形成されて

いる。これに比して石見では、江の川や周布川等の河口近くに平野は認められるが、海岸に至る山地帯によって沖積平野は広大には広がっていない。海岸部に近い山塊群に象徴されることにより、「石海」や「石美」あるいは石群に石見の語源があるともいわれている。

山陽と山陰を隔てる中国山地の山並みから派



第1図 石見銀山遺跡位置図 (S = 1/150,000)

生した山地帯には、石見南部特有の高原地帯がひろがり、断魚溪や千丈溪といった瀑布線によって急激な高低差を見せる。加えて三瓶山（標高1126m）や大江高山（標高888m）などといった火山が分布し、山地帯とその間を縫う河川によって形成された小規模な可耕地や小集落が多く点在している。銀山の面影を伝える大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区も、こうした狭長な河岸段丘上に形成されている。



写真1 上空から見た仙ノ山

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高538m）は、大江高山から北へ4km、日本海から直線距離にして8kmの地点に位置する。大江高山は大山火山帯に属し、前期更新世に活動した火山といわれ、溶岩ドームのまとまりからなっている。仙ノ山はこの大江高山火山岩類の分布域にあり、角礫化火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を鉍脈の母岩とする。鉍脈には鉍染鉍床型の福石鉍床、鉍脈鉍床型である永久鉍床、及びマンガン鉍床という三つの鉍床があることが知られている。

福石鉍床の鉍石鉍物としては自然銀、菱鉄鉍を主体として、黄銅鉍などの含銅硫化鉍物をほとんど含まないとされる。また永久鉍床の鉍石鉍物は黄銅鉍、黄鉄鉍を主体とし、輝銀鉍、自然銀などが含まれる。

石見銀山遺跡はこうした自然地理によって形成されたものであり、周辺の歴史においても地形的な要因から石見独特ともいえるような特色を有している。以下に石見銀山周辺の歴史的な環境を概観してみたい。

縄文・弥生時代では、石東では発掘調査によ

る資料が乏しかったが、近年の調査によって次第にその様相が明らかとなってきた。仁摩町古屋敷遺跡は、潮川の河岸に形成された遺跡で、縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物が土坑中から一括出土し、貴重な資料となった。潮川沿いには他に弥生時代の円形杭列が検出された川向遺跡が知られる。大田市鳥井南遺跡は日本海を望む丘陵上に展開した遺跡で、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡が多数検出されている。

9、10世紀代の遺跡では、緑釉陶器が出土した仁摩町白石上屋敷遺跡や円面硯の出土した大田市八石遺跡が注目される。これらの遺跡は、中世前期の貿易陶磁をも出土していることに加えて、河口に近い河岸という立地から、中世海上交通の存在を予測させるものである。

こうした海岸部の遺跡の他に、仙ノ山から南西方向へ約1kmの地点に位置する白坏遺跡では古墳時代の住居跡の他に、奈良平安期の建物跡や木簡が多数出土している。

平安末期には、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な荘園が成立していることが知られており、その後、中世には石見銀山周辺に多くの荘園、国衙領が成立する。南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見の守護となるが、応永・文明の乱の後に石見守護職を没収される。しかし大内盛見は邇摩郡を分郡として与えられ、この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれることとなった。永正（1504～1521）段階に至ると大内義興が石見一円の守護権を取り戻し、大内氏の支配下のもとに石見銀山の本格的な開発が行われたといわれている。

戦国期には大内氏と尼子氏、そして毛利氏との間で銀山領有をめぐる争奪が行われ、その結果多数の城館が周辺に遺されている。

江戸期に入ると安濃郡と邇摩郡、邑智郡は石見銀山領となって直轄支配され、明治維新後には一時大森県が置かれた後に浜田県となり、明治9（1876）年には出雲、隠岐、石見からなる鳥根県が設置された。



## 第2章 遺跡の概要

### 第1節 石見銀山史抄

#### (1) 発見から灰吹法の導入

石見銀山は、延慶2(1309)年に大内氏によって発見されたという伝承が残るが、これを裏付ける遺構遺物は今のところ確認されていない。

しかし近年、大森町内の発掘調査によって、古代の須恵器が知られるようになった。須恵器の製作年代は概ね9世紀頃と考えられ、古代には既に銀山周辺において人の足跡が認められる。

『石見銀山旧記』(以下、「旧記」)では発見から開発当初の様子を、「生銀を湧し」「山下山上皆皓々然として冬山の日白山の雪を踏むがごとく」と記し、その後「此時迄は地を掘り間歩を開くことを知らざりし故上鉉の鎖を取り尽くし」と自然銀採取を記載している。

この当初の発見伝承と、16世紀前半に博多商人の神屋寿禎らが行う本格的な開発との対比から、神屋らによる開発を、再開発や再発見と表現することが一般的となっている。

神屋寿禎の開発は、出雲鷲銅山の山師三島清右衛門とともに金堀(穿通子)の吉田与三右衛門、吉田藤右衛門、於紅孫右衛門らによって、大永6(1526)年に始めたと「旧記」は伝える。

銀山山内の発掘調査では、16世紀の様相を示す遺物や遺構が知られてきている。栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ内のS D02より出土した遺物がそれである。



写真2 栃畑谷下層確認トレンチ

遺物の時期は数点を除いて15世紀後半から16世紀中葉までの範囲におさまるものであるが一点、14世紀後半から15世紀初頭の年代観が与えられる中国製青磁瓶の破片も出土している。

石見銀山の歴史において大きな画期となった灰吹法の伝来は、天文2(1533)年といわれる。「旧記」ではこのことについて、「天文二年大内復銀山を取返して ~略~ 此年寿亭博多より宗丹桂寿と云ものを伴い来り八月五日相談し鏈銀と石と相雜ものを鏈と云、を吹溶し、銀を成す事を仕出せり、是銀山銀吹の始り也」とある。『おべに孫右衛門えんき 一名 銀山旧記』(以下、「おべにえんき」)では、「白銀吹き初め候事、天文二年八月十五日九州博多より慶寿と申禪門参られ吹申候」という。

灰吹法の伝来元である朝鮮半島ではそれ以前に、銀産統制のもと民間で日本鉛を使った灰吹法による銀鉱石の製錬が行われており、その禁を犯した朝鮮人が処罰されたという。(『李朝実録』)

先述の博多の商人神屋寿禎は、大内氏の庇護の元で半島との交易を通じて技術の導入を試みたとみられる。いずれにしても、灰吹法の導入により石見銀山の産銀が飛躍的に伸張していくこととなった。

その例として、同じく『李朝実録』では、1538年、「倭人は銀だけを持ち他のものは持ってこない」という記載をはじめ、1542年「倭国で銀を造り始めて十年にもならないのに倭銀が我が国に流布し、既に賤物となっている」ことや銀8万両の貿易を日本国王使僧安心が朝鮮に求めている記事を伝える。

中国においても、スペイン船、ポルトガル船によってもたらされる南米のポトシ銀山産の銀が流入する前に、福建のジャンクによって日本の銀が買い付けられたといわれている。

また、1552年フランス=コザビエルがロド

リゲス神父に当てた書簡には「カスチリア人はこの島を銀の島と呼んでいる」と紹介しており、日本の産銀の増大が知られる記事である。

## (2) 争奪戦と徳川の掌握

石見銀山の争奪戦をめぐっては、これまで「旧記」の記載によるところが大きく、以下にその概略を述べる。

享禄4(1531)年小笠原が支配。天文2(1533)年大内が奪回。天文6(1537)年に尼子晴久が銀山を攻略。天文8(1539)年に大内義隆が奪回。天文9(1540)年に小笠原が奪うが、実のところ享禄4(1531)年から永禄3(1560)年まで小笠原が支配。その後毛利が銀山を取り、永禄4(1561)年に尼子が再び奪う。

また、「旧記」によるものではないが、弘治2(1556)年に毛利の銀山掌握、永禄元(1558)年尼子による銀山奪取、永禄5(1562)年毛利による奪回、という説が定着している。

この通説について、一次史料だけでなく二次的な史料も傍証として、先に挙げた「おべにえんき」の信憑性の高さを説いたうえで、明快に整理を行っている論考<sup>(註1)</sup>もある。

内容として、享禄4(1531)年、小笠原長徳が銀山周辺で軍事活動。天文2(1533)年灰吹法の開始、両大工(於紅を打果した吉田与三右衛門、吉田籐左衛門の二人)は山口にて「御判」をうけ、官名を与えられる。与三右衛門が大蔵丞、又三郎(籐左衛門)は采女丞。

天文6(1537)年の尼子による銀山攻略、天文8(1539)年の大内奪回はなかったもので、天文9(1540)年の小笠原による奪取も、尼子による銀山攻撃である。この年はいわゆる安芸の吉田郡山合戦といわれる毛利攻めの年であって、敗軍により大蔵丞のみが大工となる。

その後、尼子の銀山領有は謀反による大内自害に乗じた弘治2(1556)年から永禄5(1562)年まで、ということである。

ところで毛利氏は温泉津を直轄地として、銀山を「温泉銀山」「銀山温泉津」と称した。ま

た、幕府と朝廷に料所として寄進、朝廷に対して毎年上納を続けていたという。詳細な生産高は不明であるが、「銀山納所高辻」(『毛利家文書』)によれば、毛利氏直納分として1年間で都合3万3千貫あまりあったという。

本能寺の変の後、秀吉は毛利と和議を結び、その後文禄元(1592)年、慶長元(1596)年、の朝鮮侵略に際して石見銀で大量の石州御公用銀を造り、その戦費としたといわれている。

そして、関ヶ原の戦いの後、石見銀山は徳川氏の管轄に置かれることとなり、荷分制と甲州流といわれる鉱山技術によって鉱山経営に長けた大久保長安を中心とした銀の増産が行われることとなった。

発掘調査によって確認されたこの時期の遺構遺物は以下の通りである。

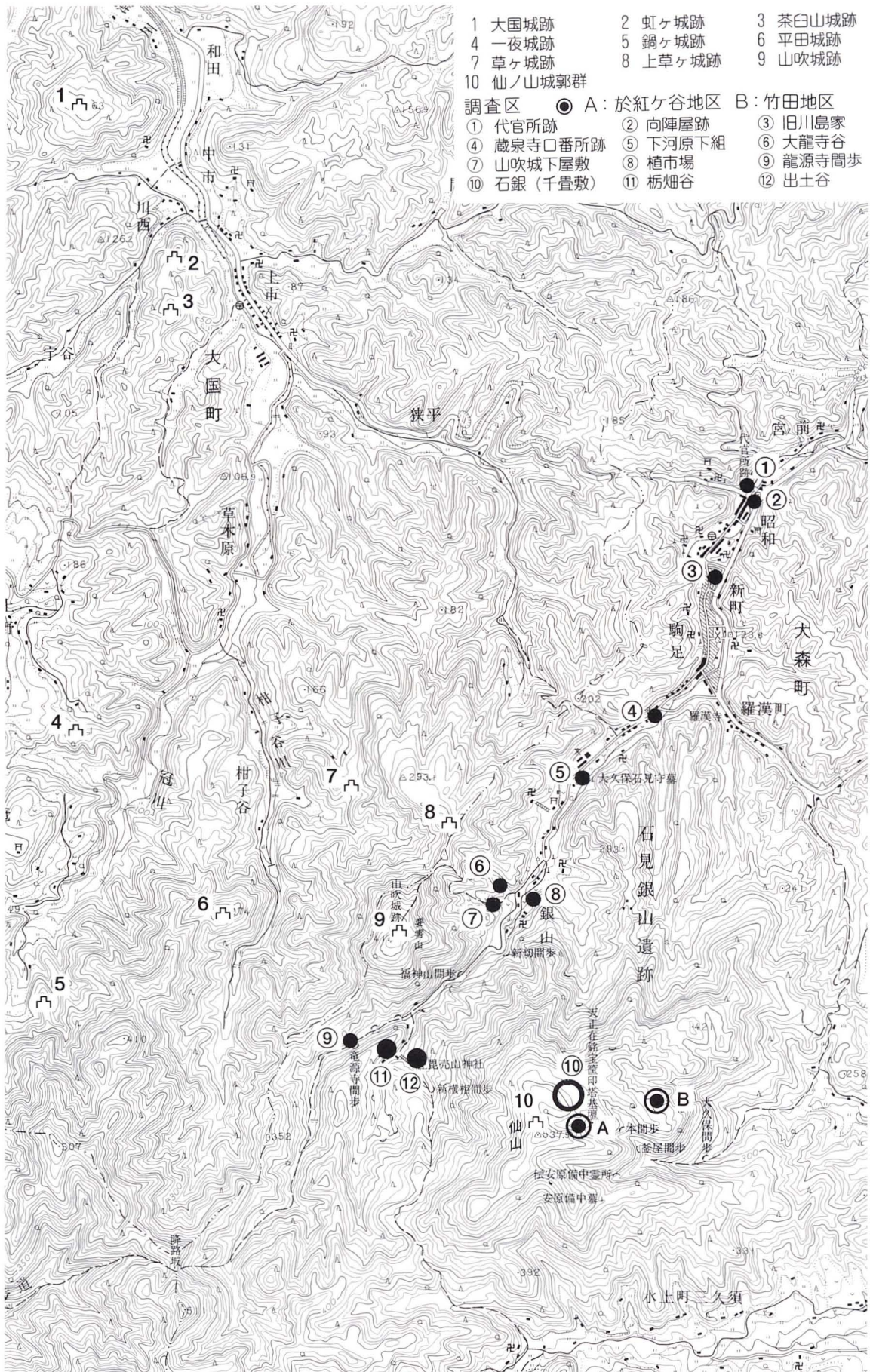
平成元年度調査の蔵泉寺口番所跡のII区において表土から30~50cmのところに向かう石列が検出された。北東~南西方向に伸びる石列は、銀山を囲んだ柵列と推定されている。

遺物は16世紀中頃から19世紀代と幅広く、整地層中のもが多い。同じく平成元年度調査の植(上)市場地区では戦国から明治までの3つの遺構面を確認、陶磁器の組成などから「生産よりも消費が中心となった商人の「町」に関連する遺跡」と推定されている。

また、平成2年度に調査が行われた大龍寺谷地区では、17世紀前半が中心ではあるが、16世紀第3四半期の遺物が出土している。II区では鑿と要石の出土から鉱夫が住んだ建物跡と推定されている。また、建物の規模や性格については不明な点が多いが、掘立柱建物跡という構造から鉱山労働者の住居と工房という性格を兼ね備えていたとも推測されている。

平成4年度に行われた山吹城下屋敷地区の調査は、6カ所のトレンチによるもので、字限図から、現存の高さ10mの長大な石垣及びその西側平坦地を毛利氏の休役所と推定、第2トレンチにて確認したところ、礎石を2つ確認。16世紀末から17世紀前半の遺物より、戦国期の休





第2図 石見銀山遺跡分布図 (S = 1/25,000)



役所か、江戸時代大久保長安の奉行所と推定されている。また第5トレンチで炉跡2基を検出している。遺物は鑿、分銅があり、17世紀初頭前後から17世紀前半という年代観が陶磁器から与えられている。

### (3) 江戸期の石見銀山

銀山は慶長から寛永期に最盛期を迎える。なかでも山師安原備中が開発した釜屋間歩は毎年3千600貫の銀を産したという。

この時期を表象する発掘調査の成果は以下のとおりである。

平成元年度調査の向陣屋跡では1.5×3.5mのトレンチを2カ所設定、掘り下げをおこなっている。土層観察によって明褐色粘土質土が堅く締まることから、向陣屋に関連する遺構面と考えられている。また、多数出土したいぶし瓦のうち、「本瓦葺の軒瓦」が含まれていたことを根拠に、江戸時代の建物が存在していた可能性が指摘されている。

また、平成2年度に調査された蔵泉寺口番所跡では、16世紀後半から19世紀前半の遺物が出土。16世紀第4四半期～17世紀前半の遺物から、番所が江戸時代に入り整地・構築されたことを裏付けると評価されている。

平成3年度に調査された下川原下組地区は、石銀地区の調査を除けば最も広く調査された例である。遺構は礎石立てによる間口の狭い建物跡で、炉跡などを伴い近世初頭の銀の精錬所とみられ、下川原吹屋跡とされた。また、からみの科学分析から、マンガンを多量に含有するものがあることが判明、造滓剤としてマンガンが使用されていたことが確認されている。

寛永期以降になると次第に坑道が深くなり、湧水処理に経費がかかるようになる。延宝年間(1673～1680年)になると産銀量は年間約4百貫に減り、幕末の安政6年には年間30貫と記録にある。

江戸期を通じて奉行・代官・預りは59人で、石見銀山附御料約4万8千石の統治と銀山の管

理をおこなっている。

寛政元年、大火の記録が残るが、平成2年度調査の旧河島家敷地内の遺構は、寛政の大火以前における江戸時代初頭の建物に関連するものとされている。

「河島家」南側の空地で行われたこの調査では、表土から50cmで遺構面を確認、井戸跡、石組みの柱穴状遺構、石列を検出した。

また平成5年から調査が開始された石銀千畳敷地区、平成8年から調査の石銀藤田地区など16世紀末から17世紀前半の鉱山の様子が明らかになりつつある。

### (4) 近代の鉱山開発

明治維新後、石見銀山は太政官布告により地元に払い下げられ小規模な経営が続けられたが、明治5年(1872)の浜田沖地震で坑道はほとんど水没し、全山休山状態となった。

明治19年合名会社藤田組が1鉱区の借区権を買取り、翌20年には全鉱区を買取り、仙ノ山南の銀山部(本谷鉱区)で採掘が開始された。この時から大森鉱山となり、鉱山事務所を銀山部におき、24年からは邇摩町柑子谷の永久部(永久鉱区)に製錬所が建設された。28年には清水谷に収銀湿式法による新製錬所が建設され操業を始めたが、翌29年に良鉱が得られなかったことなどにより休止することになった。開発の中心は永久部となり、同35年には発電所を建設、電動式ポンプによる揚水で再び活況を呈した。

主要産品は銅で、日清・日露戦争の軍需景気に乗り隆盛をみた明治後期から大正初期には、柑子谷は一大鉱山町に発展した。大正6年(1917)の大森鉱山の従業員は約700名であったと記録されている。しかし第一次世界大戦後の反動景気により銅価が下落、その上安価な外国産銅におされ、ついに大正12年(1923)6月に休山に追い込まれた。

昭和16年(1941)国の援助で再開発をおこなったが、同18年山陰地方を襲った大水害により、柑子谷は地形が変わるほど土砂が堆積し、

坑道も水没して再開発は断念され、現在に至っている。

平成9年度から調査されている出土谷地区では、おもに18世紀後半～19世紀半ば頃の製錬施設を伴う建物跡を検出し、周辺の広い範囲で数度の地形改変が行われたことが判明した。

平成10年度から調査されている栃畑谷地区では、明治期の製錬関係の建物跡を検出。16世紀から近世、近代に至るまで、盛り土のみでなく、削平によっても整地が行われていることが判明した。

このように、石見銀山は、大森町に遺跡が集中しているが、他にも、周辺の仁摩町、温泉津町などを含めた広い範囲に遺跡が分布している。広義の石見銀山遺跡は、こうした周辺の地域を含めて総称する。

さて、石見銀山遺跡を構成する要素は、大きく三つに区分される。一つが生産拠点と見られる銀山地区、二つ目に石見銀山や銀山御料に関する行政、通商の機能を有していた大森地区、および周辺に点在する石見銀山に密接に関わる関連地区である。銀山地区を中心に、人々の生活や銀山の統治に係わる様々な遺跡から構成される。遺跡の年代は、中世から近代まで約400年に及び、重層性、複合性をもつ遺跡の集合体であることが石見銀山遺跡の特徴のひとつとなっている。

## 第2節 発掘調査の目的と結果

石見銀山遺跡における発掘調査が開始されたのは前回の石見銀山遺跡総合整備計画策定事業に伴って、昭和58年度の蔵泉寺口番所跡推定地と代官所南地区の調査からであった。調査の目的としては「拠点地点での遺構確認と保存・整備の資料を得る」と報告にあるように、トレンチによる調査であった。

調査の結果、代官所南地区で自然石積みと切石の石列等を検出、近世初頭から幕末に至る肥前陶磁、地元産陶器が出土した。現存する代官所長屋門とほぼ平行な位置関係にあることと、

天保12(1841)年の代官所絵図から代官所に関連する建物跡と考えられた。この調査によって、石見銀山には確実に比較的良好に遺構が残存していることが予想された。

昭和58年以降、発掘調査は以降一時中断したが、昭和62年に町並みが重要伝統的建造物群保存地区に選定され、次いで遺跡整備と活用事業に伴って調査が行われるようになった。

昭和63年度には初めて山内における採掘地に近い「龍源寺間歩遺跡」で調査が行われた。龍源寺間歩の坑口東側の平坦地(I区)では、第1遺構面で建物跡2を確認、下層遺構面では建物跡1が確認された。第1遺構面では建物内にピットや「炉跡状の土坑」を検出。下層遺構面に至る厚さ40～50cmと報告されている整地土中には陶磁器類・寛永通宝等が出土した。

下層遺構面では炉状の集石遺構と18世紀代の陶磁器が出土、他に暗渠状の排水施設と、岩盤を穿った溜枡状遺構とピットが検出された。

坑口西側の平坦地(II区)では、第1遺構面で建物跡1、第2遺構面で建物跡1、第3遺構面では岩盤加工遺構が検出されている。時代はそれぞれ近代、江戸時代、及び戦国期の可能性、が指摘されるにいたった。

その後、平成元年度～5年度は、銀山地区と大森地区でも、集落が現存している谷部の調査が中心に行われ、先述のように、中世末から近世を中心とした遺構を検出し、成果を積み重ねてきた。

調査の画期となる仙ノ山山頂近くでの発掘調査は平成5年度から開始された。平成5～7年度に調査された石銀千畳敷地区では、谷中央の道跡を挟む形で建物跡2棟を確認。建物内に炉跡や選鉱施設とみられる土坑等を検出し、精錬に関する建物(吹屋)と推定。さらに下層には戦国期に遡る遺構の存在を明らかにした。

こうした調査結果と、石銀千畳敷地区では遺物相から、近世前期頃までをピークとしており、近世後半代や近代の地形改変が認められないことから、非常に良好な状態で銀生産の実態に迫



りうる成果が予想される。

石銀地区千畳敷地区の調査成果を契機として、平成8年度からは島根県教育委員会と大田市教育委員会との合同調査となり、発掘調査委員会が組織される。

平成8年度から石銀藤田地区の調査を開始、翌平成9年度には下層確認トレンチの戦国期の遺構面から鉄鍋が出土。科学的調査の結果、灰吹きに使用されたことが明らかとなった。石銀藤田地区の調査は平成10年度まで継続され、採掘から精錬までを行っていた状況や、遺構面が最も多いところで9面あることを確認。また、谷の中央に水路を伴った道が整備され、建物が連続して立ち並ぶ状況が判明した。

発掘調査委員会では、仙ノ山一体の鉾山遺跡としての解明を進めるため、石銀地区以外の操業の拠点となったいくつかの地区のうち、特に戦国期から開発が始まったといわれる出土谷地区、栃畑谷地区などで調査を行う必要性が指摘された。これをうけて谷部に位置している出土谷地区は平成9年度から、栃畑谷地区は平成10年度から調査に着手された。

併せて、仙ノ山山頂付近の調査も継続して行われ、平成10年度から於紅ヶ谷地区、平成11年度から竹田地区の調査が継続して行われている。

今回報告する於紅ヶ谷地区・竹田地区は、こうした経過によって調査に至ったものである。

### 第3節 石銀地区の概要

於紅ヶ谷地区・竹田地区が位置している場所は、標高450m以上の仙ノ山山頂に近い高所で、付近一帯を「石銀」と総称されることがある。

発掘調査地区名の決定は、基本的に小字名を採用し、先の石銀千畳敷南向山は「石銀千畳敷地区」のように「地区」を付けて略称とした。

「於紅ヶ谷」の字名は仙ノ山の山頂でも南東付近にみられるが、頻度は少ない。「於紅ヶ谷地区」とした今回の調査区北側に「於紅ヶ谷」が認められることから調査区名とした。

竹田地区は、仙ノ山山頂平坦地群とは地形的

に様相が少し異なる。谷地形を主にする石銀地区に対して、竹田地区は、尾根の削平と造成が東方向に広がっている。

平坦地群が比較的まとまっていることから「竹田地区」とした。

さて、石銀の発掘調査にいたる経緯は前節でふれたとおりである。さらに調査結果から推定された成果と、付随する石造物調査、併せて文献史料に関して次に詳述しておく。

仙ノ山山頂の平坦地群の石造物は、以下のような特徴が明らかとなっている。建物跡が連続した部分を見渡せる丘陵上や藤田地区の西側平坦面上には多くの墓石が点在し、一部まとまった場所が存在することから墓地として意識されていたと思われる。

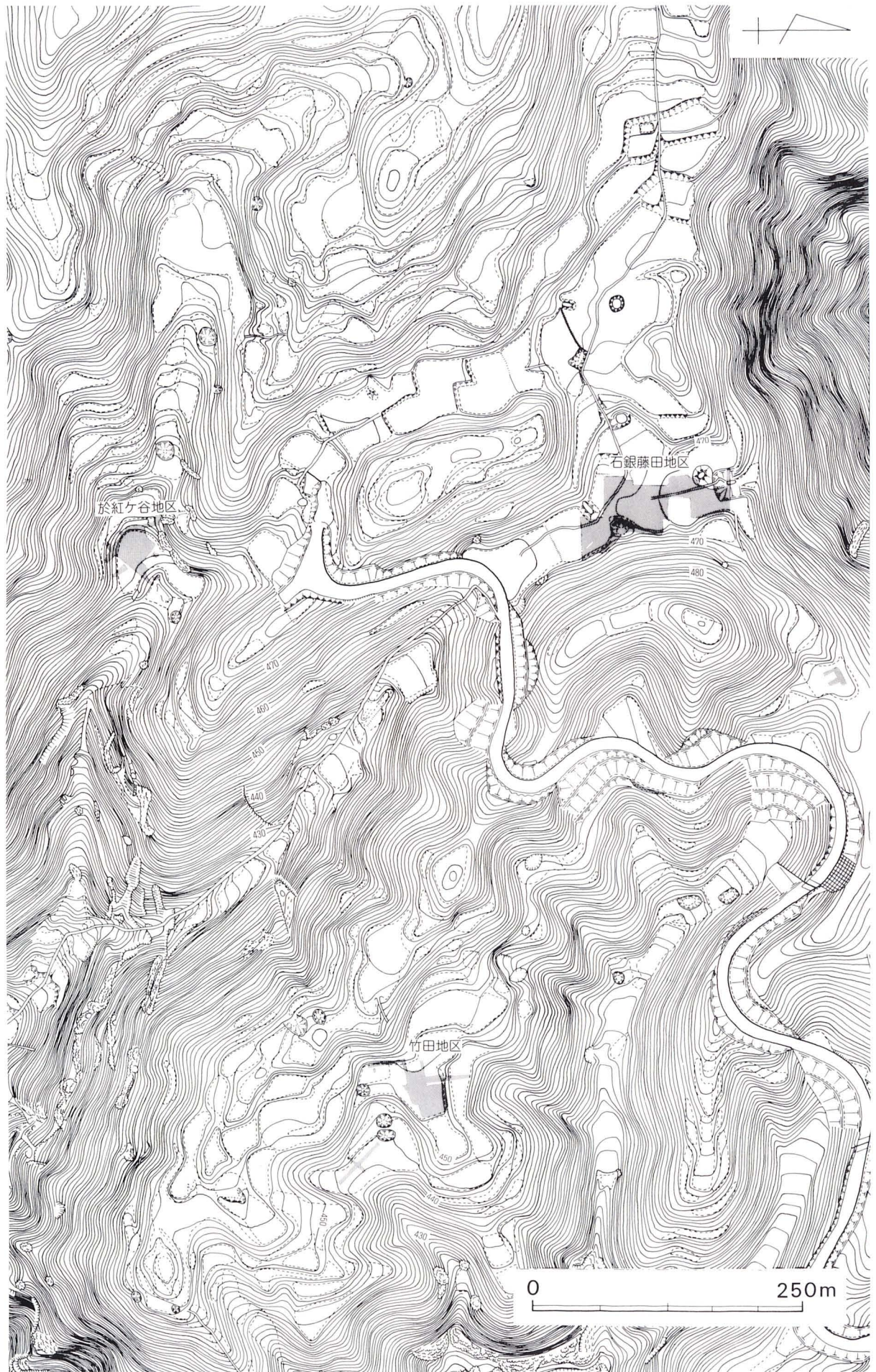
周辺の石造物調査の結果、古くは慶長年間(1596～1615)、新しいものでは天明(1781～1789)がある。銘文によると「逆修塔」や仙ノ山に登山した時に供養塔を作るという記載があり、すぐに墓石の年号が町の存続年代とは限らないが発掘成果と傾向は同じである。

(表5 石銀地区年代別石造物集成表)

また、文献史料からは、以下のように捉えられている。文献史料に石銀の名が登場するのは天正9年(1581)で、「石見銀山納所高注文」(『毛利家文書』)に「代八十貫いし金口役」とあり、慶長5年(1600)「石見国諸役銀請納書写」(『吉岡家文書』)には「参百五拾枚定石金ノ酒役年中分」とある。万延2年(1861)高野山の僧が配札のために大森を訪れた際に持っていた過去帳を城上神社宮司の上野氏が書き写した「高野山浄心院往古旦家過去帳姓名録」(『上野家文書』)には文禄、慶長から元禄年間の日付けや姓名とともに、「石金」「石金本谷」「石金ノヒラ」「石金小池ノ段」などと記載されている。

「正徳四年甲午覚万覚書」(1714)の間歩改めには「石銀三十口内休山二十二口」とあり、操業していたのは八口であったといわれる。





第3図 石銀藤田・於紅ヶ谷・竹田地区調査区配置図 (S = 1/1,500)



## 第3章 於紅ヶ谷地区の調査

### 第1節 調査の経過

平成10年から平成12年までの発掘調査の概要は、既に『石見銀山遺跡発掘調査概要11』に記述してある。今回報告する事項は平成13年度の調査概要であるが、経緯を含めて調査の目的をここで記しておきたい。

調査区の調査前現況は竹林で、それを除くと約20m四方の平坦面が現れ、平坦面上にいくつかのマウンド状の高まりが観察された。また、円形や長楕円形をした深さ約1mの窪みなどが確認されていた。

平成10年度の調査は、トレンチを中心に掘り下げを行った。トレンチの設定箇所は、座標軸に沿って2×4mの規模で調査区中央に配置。これは道が谷の中央を通過して、建物配置の基準となっていることを想定したものである。

掘り下げの結果、表土直下から部分的に表土上面に至る層位で石列を検出。道の遺構と判断して石列を土手状に残した状態で、さらに下層を掘り下げ。その結果、表土下約50cmのところ、目の細かなユリカス様の土層を確認、それを除去し、黄褐色～茶褐色粘質土を検出。

このトレンチの他にも、①4.5m四方、②7×2m、③2.5×2mのトレンチ三つを設定し掘り下げた。

①トレンチでは、約2m間隔で北東から南西方向に並ぶ礎石を3つ検出し、建物跡があることを確認した。遺物は概ね16世紀末から17世紀初頭の陶磁器が中心であったが、上層では19世紀代以降のものや、17世紀中頃の年代を示すものも採取された。

平成11年度は、建物跡に合致するように調査区を設定、面的に掘り下げ、建物跡の内容を明らかにすることを目的として調査を実施。北東方向を主軸として南西方向に対して10m×10mの調査区を設定。前年度設定のトレンチの軸線を土層観察用の畦として残し掘り下げた。

前年度検出の石列は、径4m、高さ1m程のマウンド状に形成された廃棄土の縁辺に位置していた石と考えられた。幾つかある廃棄土の縁辺には、幅約1m程の固く締まった部分が検出され廃棄土を縫うように道が形成されたと判断した。

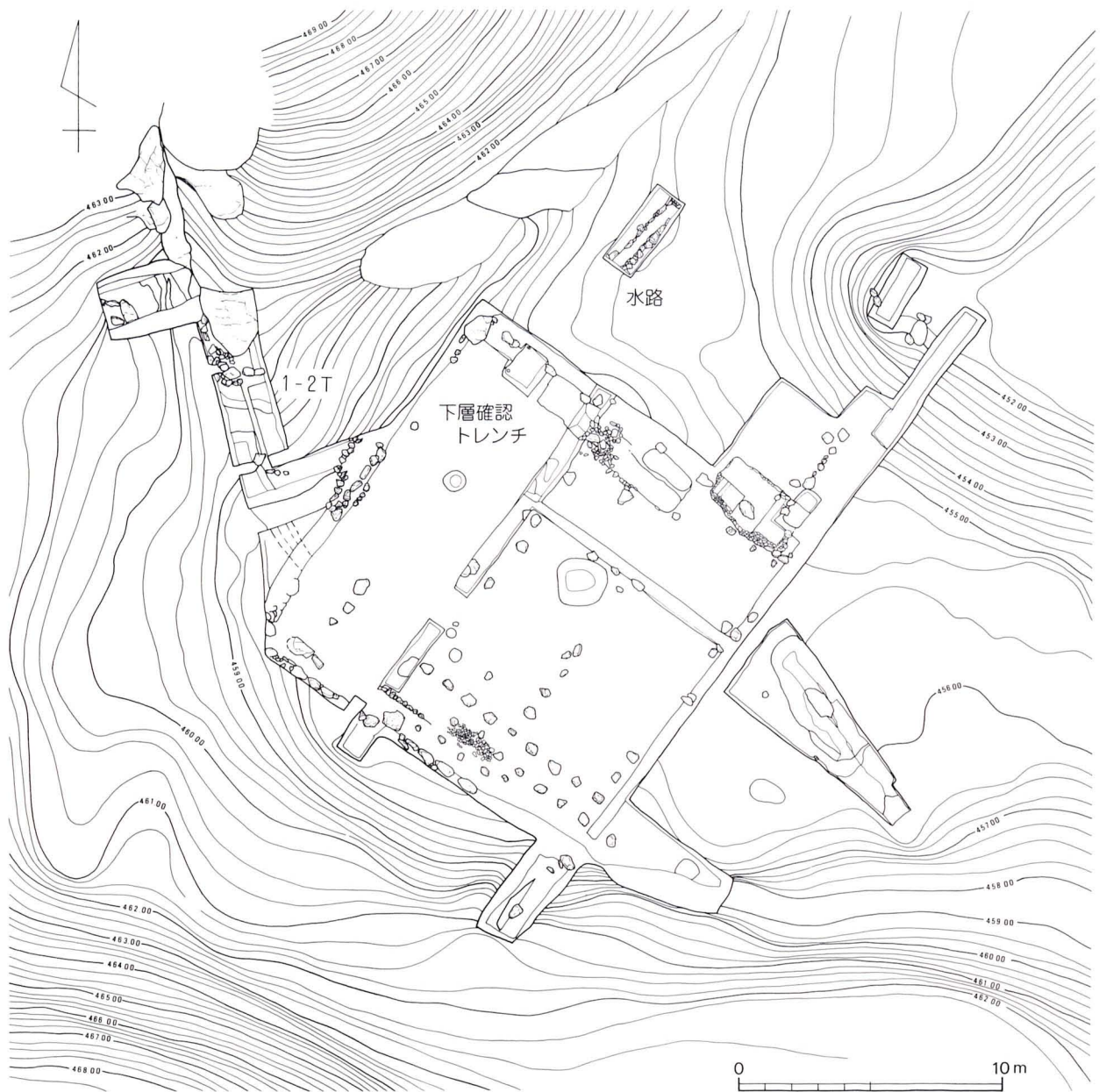
礎石と考えられていた石は土間面よりも浮いた状態のものがあったり、1m程の転石であることが確認された。しかしながら、南西側には半間間隔で並ぶ三列の礎石列が検出された。土間面には炭化物の集中する箇所、また粒子の非常に細かい黄色粘土が堆積する場所の他、拳大の礫が集中し、周辺に炭片が散乱する箇所等を確認した。他に平成11年度の調査では、調査区端を1m幅で、南西方向に5m、北東方向に3m拡張し、平坦面の構築方法などを確かめようとした。

平成12年度の調査は、当初、次の計画で着手された。

- ①前年の調査区内の東、西両端に50～70cm幅のトレンチを設定、このトレンチを二つとも掘り下げ、併せて土層断面の検討を行い土間面の状況を解明する。
- ②建物奥側の東西を、それぞれ約2m四方で拡張して、3列の礎石の範囲を確認する。
- ③調査区近辺に位置している二つの間歩の前のトレンチによって掘り下げ、間歩の採掘された時期を把握する。

調査の結果、平坦面は数度の小規模な盛り土を行っており、礎石建物跡も時期差があることを確認した。No.267では、一度採掘され、埋まっていた鉄脈に対して再び掘り返すという「再採掘」を行った跡と判明した。

三つのトレンチを設定したNo.49間歩では、第1トレンチで採掘跡を残す岩盤を検出。第2トレンチで、幅約1m深さ2m程の溝状遺構を検出。掘り下げの過程で数度にわたって造成と



第4図 於紅ヶ谷地区遺構配置図 (S = 1/250)

思われる堅緻な面を検出した。第1トレンチと第2トレンチとを結ぶ1-2トレンチでは、間歩の開口部に向かって、いくつかの整地面が形成されており、堆積土や遺構が重複関係にあるとみられた。その後、平坦面全体の理解を進めるため、調査区の西側への再拡張、一部遺構の掘り下げ、遺構精査、など調査を継続した。

調査の結果、土間面の遺構として北側では、ユリカスを埋土とする素掘りの楕円形土坑1、石積み施設1、並列するユリカス埋土の長方形プランの遺構2を検出した。

## 第2節 調査の概要

平成13年度の調査目的は、前年に課題となった1-2トレンチの掘り下げを行うと同時に2トレンチの南西方向を掘り下げ、採掘と建物跡の関連を追究すること。石垣の北東部分にトレンチを設定するとともに、石集中部分の精査、掘り下げを行い、平坦面の性格をより明らかにする。の2点である。

調査の結果、以下のようなことが解明された。

一つに、1-2トレンチでは、溝状に岩盤を穿たれた跡が検出され、露頭掘と判断された。この露頭掘を埋め尽くすようにして、幾度かの



土砂の堆積が明瞭に確認された。

建物跡と採掘の関連については、以下のように捉えられた。平坦面西側が埋められていて、建物跡に建て替えによる新旧の時期差があること。建物の南側斜面と西側斜面に立石の土留めが施されていること。土留めの石を埋めるようにして、1-2トレンチからつながる溝状遺構が新しい建物跡に付随していること。が判明した。

石集中部分の精査では、掘り下げたトレンチ内部から岩盤を穿ち、木を立てた遺構が検出された。石垣北東部分のトレンチでは石組みの溝を検出し、平坦面の区画の一端をうかがうことができた。

この結果を受けて、次の調査方針が検討され、下層の状況を観察するために岩盤加工の遺構面について調査を継続して実施し、再度判断されることとなった。

したがって、平成14年度も調査が行われる予定であり、今次の報告は、現時点での調査成果である。

平成13年度の調査による概略は、遺構を以下に、遺物は次節に記しておきたい。

### (1) 1-2トレンチ

北壁の土層図を第5図に示した。トレンチの壁面に崩落の危険性があったため、上層は図面作成後に除去を行った。

前年度に掘り下げた黄茶褐色土の下にはレキの混じる暗褐色土が認められた。暗褐色土の岩盤側には無造作に積まれたと見られる石積みがあり、この石積みによって、ズリの崩落を防いでいたものと判断された。

石積みとズりをあわせて除去し、さらに掘り下げると、トレンチ南側で良く締まった暗褐色を呈する面があり、岩盤側では黄色粘土を検出した。サブトレンチを設定し、黄色粘土を掘り下げたところ、岩盤を幅50cm程度の溝状に穿った跡が検出された。溝状遺構はその壁面に工具の痕跡が残り、露頭掘の跡と判断された。黄色

粘土はその露頭掘り跡に水性堆積したものであることや、岩盤の南側上場に60cm~1m程の石が置かれていたことを確認した。

遺物は、上層で中国陶磁器、胎土目の唐津などがある。土層第8層から、第7図1が出土した。

### (2) 下層確認トレンチ

石集中部分に対して、石の除去と掘り下げを行ったところ、石の集中する箇所の下位からユリカスの厚い堆積が検出された。北側の調査区壁面の土層観察とあわせて、1.5mの方形区画について、掘り下げを行ったところ、約1.5m下がったところで岩盤加工の遺構を確認した。西側の岩盤はほぼ垂直に切り出され、1.5m下がったところで平らな面を造作。さらに穴を穿って木を立てていた。

遺物は下層から瀬戸美濃の破片が1点、南西側の土層断面下層から、第7図6が出土した。

### (3) トレンチ内水路

下層確認トレンチから北東方向へ4mの地点から、幅1.3m長さ3.5mのトレンチを設定、掘り下げたところ、地表面から30cm~50cmの深さで石積み2列を検出した。

二つの石積みの間隔は概ね30cmを測り、サブトレンチで掘り下げたところ、締まりの悪い土が堆積しており、石積み水路と判断した。

水路の埋土は粒子の細かい砂状の土が主で、掘形からの深さ40cmを測る。水路中からの遺物として、図示したもので第7図14~16などで、他に素焼きの皿2点がある。

## 第3節 出土遺物

第7図1~5、9、12、19、23は、1-2トレンチ内の遺物である。いずれも上層もしくはズリからの出土で、2~4、9は肥前系陶器の皿、うち3は貝目である。19は大鉢で、18世紀代に降る。6は下層確認トレンチ内、土層断面からの出土で岸岳系唐津<sup>(注2)</sup>、ほぼ完形。藁灰釉

で、器高4.2cm、底径3.7cmを測る。17は高台畳  
付けまで施釉の中国製青磁である。<sup>(注3)</sup>

10～12は青花。13は肥前系磁器。18は陶器の  
鉢。ズリ山中の遺物で、濃茶褐色の胎土であ  
る。8は肥前系陶器で、石積施設の北東土間面  
からの出土。7は西側側拡張部分の土層断面か  
らの出土で、瀬戸美濃。

陶磁器以外の出土遺物は20～23に示した。

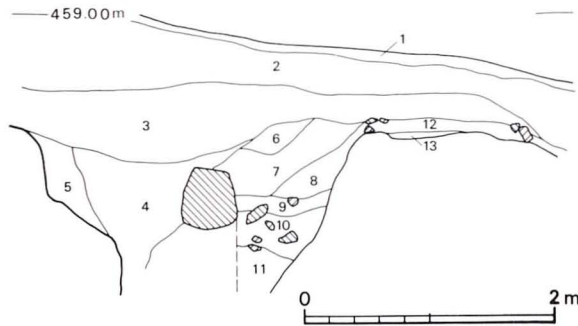
金属製品は用途が断定されにくいものの、  
20は鑿の可能性はある。

(注1)

原慶三「尼子氏の石見国進出をめぐる一石見銀山、吉  
川・小笠原氏との関係を中心に」『山陰史談29』2000

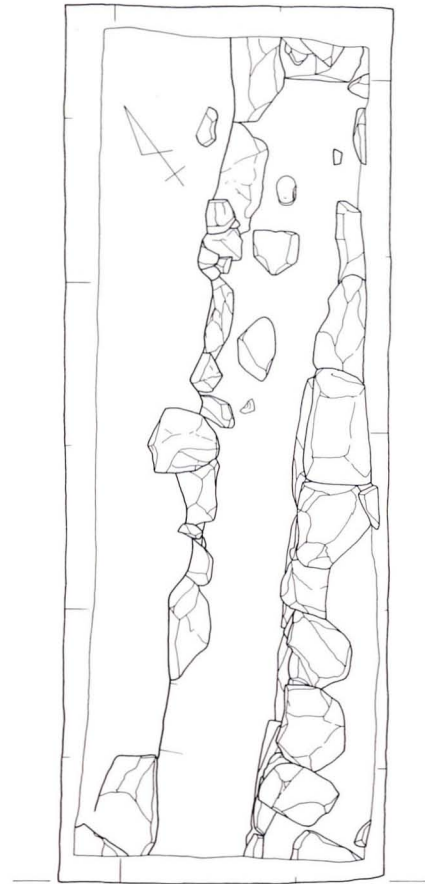
(注2、3)

佐賀県立九州陶磁文化館、藤原友子氏、川副麻理子氏のご  
教示による。



- 1 ズリ混じり表土
- 2 茶褐色土 (やや細かい)
- 3 暗茶褐色土 (レキが混じる)
- 4 黄色粘土 (水性堆積)
- 5 黄茶色粘土 (水性堆積)
- 6 暗灰褐色土 (レキまばらに混じる)
- 7 赤白色土 (よく締まる、白色の粒子を含む)
- 8 暗茶褐色土 (遺物混入)
- 9 灰茶色粘質土 (炭化物混入)
- 10 灰黒色土 (固く締まる、マンガン沈着)
- 11 暗灰色粘土 (よく締まる)
- 12 暗褐色土 (よく締まる、ユリカス含む)
- 13 黒茶色土 (固く締まる)

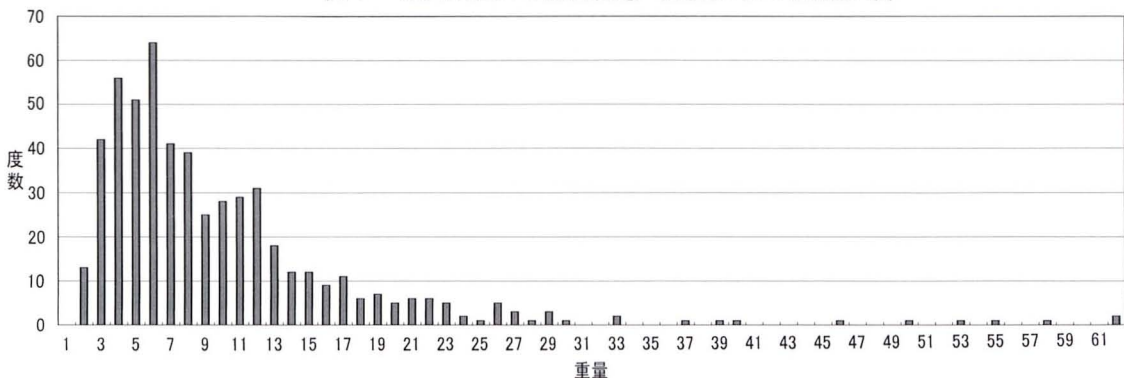
第5図 1-2トレンチ土層図 (S=1/60)

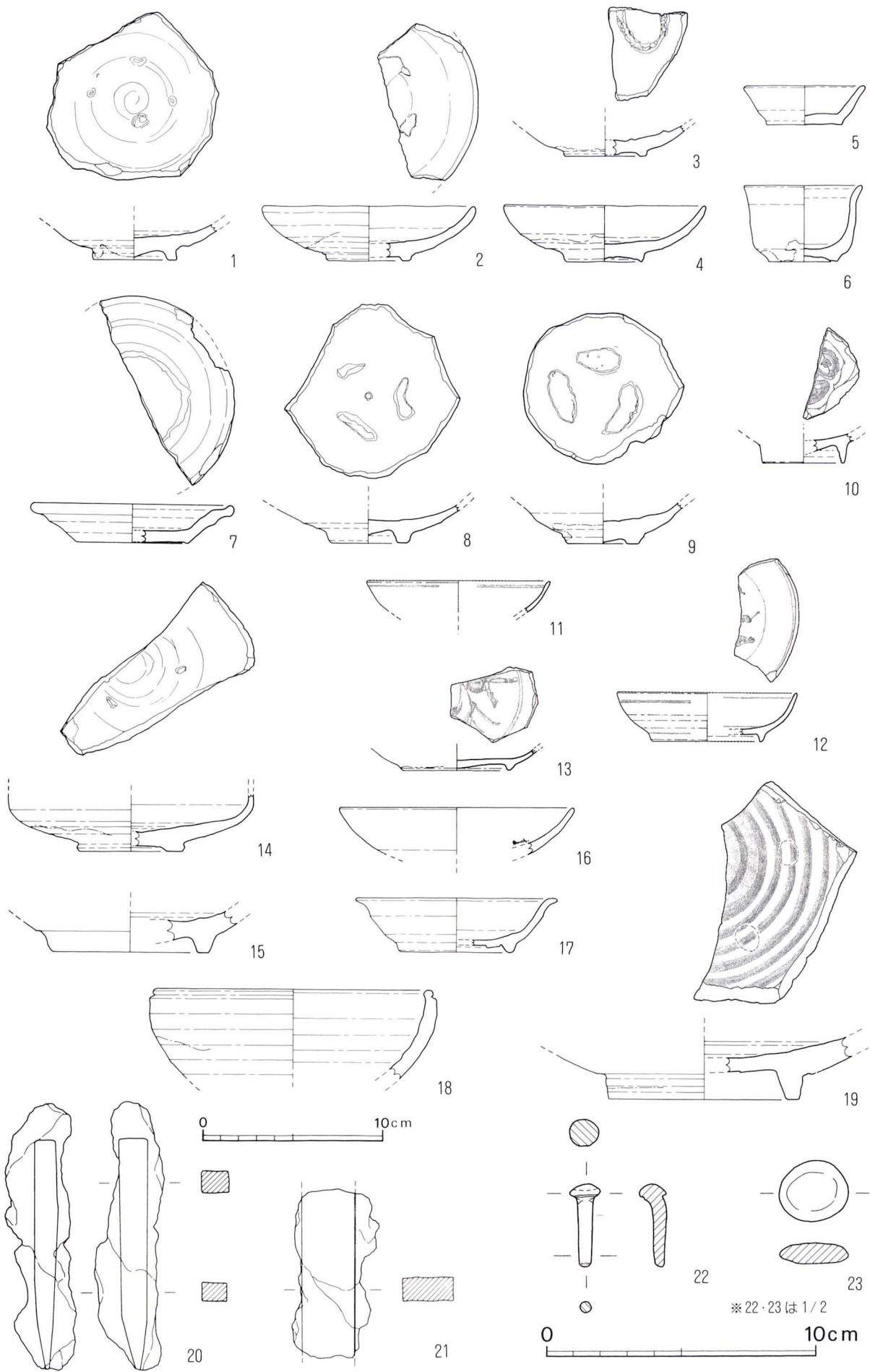


- 1 暗茶褐色土
- 2 茶褐色土 (レキを多く含む、粒子は細かい)
- 3 赤茶色粘質土 (目の細かい土にブロック状の白色粒子を混入)
- 4 黄褐色土 (粒子細かい)
- 5 灰黄色粘質土 (粒子細かい)
- 6 茶灰色土 (やや締まる、粒子細かい)

第6図 水路平面図・土層図 (S=1/30)

表1 竹田地区ズリ計測表① (重量による度数分布)





第7図 於紅ヶ谷地区遺物実測図 (S = 1/3 · 1/2)



表2 於紅ヶ谷地区出土遺物観察表

挿図番号	実測番号	出土地点	種別	器種	法量 (cm)			色調	成形・調整・文様	備考	
					口径	器高	底径				
1	20	1~2トレンチ8層中	肥前系陶器	灰釉皿			4.6	胎土：淡肌色 釉：緑灰色	内面胎土目・糸切り		
2	1	1トレンチ上層	肥前系陶器	灰釉皿	(11.6)	(11.6)	(4.4)	胎土：淡橙色 釉：緑灰色	胎土目・割り高台	反転復元	
3	12	1~2トレンチ東 ズリ山	肥前系陶器	灰釉皿			(4.4)	胎土：赤褐色 釉：濃緑色	貝目重ね積み痕	反転復元	
4	23	1~2トレンチセク ション上層	肥前系陶器	灰釉皿	(11.1)	3.1	(4.2)	胎土：淡橙色 釉：緑灰色		反転復元	
5	5	2トレンチ中層	土師器	小碗	(6.6)	2.2	4.1	淡肌色	左周り糸切り・内面 底部朱色付着		
6	6	北西間歩下層	肥前系陶器	薬灰釉ぐい 飲み	6.4	4.2	3.7	胎土：淡白色 釉：乳白色	ちりめん高台	1580~1594	
7	2	西拡張区~石垣斜 面へセクション内	瀬戸・美濃	灰釉皿	(10.8)	2.1	(6.2)	胎土：淡肌色 釉：黄灰色	見込釉剥・胎土目	反転復元 折縁反皿	
8	3	石積施設東検出面	肥前系陶器	薬灰釉皿			4.1	胎土：赤褐色 釉：灰白色	胎土目・底部三日月 高台	17C前~中	
9	19	1~2トレンチ上層 セクション中	肥前系陶器	灰釉皿			3.9	胎土：淡黄色 釉：緑灰色	三日月高台・内面砂 目・畳付糸切り	1600末~1700初	
10	9	H13拡張下層	青花	碗			(4.5)	濃青色		反転復元	
11	18	平坦面C3杭付近	青花	皿	(10.2)			胎土：明白色 釉：透明釉	(内)2条(外)1条	反転復元	
12	15	1~2トレンチ中層	青花	皿	(9.9)	2.7	(6.0)	胎土：淡白色	内・外面2条線・砂目	反転復元	
13	14	平坦面C3杭付近	肥前系磁器	皿			(5.9)	胎土：白灰色	内面：草花・2条線	反転復元	
14	11	水路	肥前系陶器	薬灰釉皿	(5.7)			胎土：淡黄色	胎土目・土見せ高台	反転復元	
15	22	水路中No1	肥前系陶器	灰釉大皿			(8.6)	胎土：明橙色			
16	21	水路中No3	肥前系磁器	皿	(12.9)			胎土：白色 釉：透明釉	2条の染付		
17	8	中央石列下層土地	中国青磁	皿	(10.8)	3.0	(6.0)	胎土：淡白色	もみがら付着・高台 畳付まで施釉	反転復元	
18	4	ズリ中(作業中)	肥前系陶器	灰釉鉢	(15.2)			胎土：濃茶褐色 釉：緑白色		反転復元	
19	13	1~2トレンチ東 ズリ山	肥前系陶器	大鉢			(10.4)	胎土：赤褐色	内面白土化粧刷毛目 文様	反転復元 1780~1860年代	
挿図番号	実測番号	出土地点	種別	器種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	1辺 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g?)	備考
20	3	C2-C-262	鉄製品	ノミ状工具	12.5	1.5	1.2				
21	2	B3-6-75	鉄製品	用途不明	9.4	3×1.3					板状
22	27	南東礎石整地層	ガラス製品	簪	3.1						直径1cm 棒状直径0.5cm
23	16	1~2トレンチ中層	石製品	碁石			0.7			6.9	直径2.6cm

表3 竹田地区ズリ計測表② (形状による度数分布)

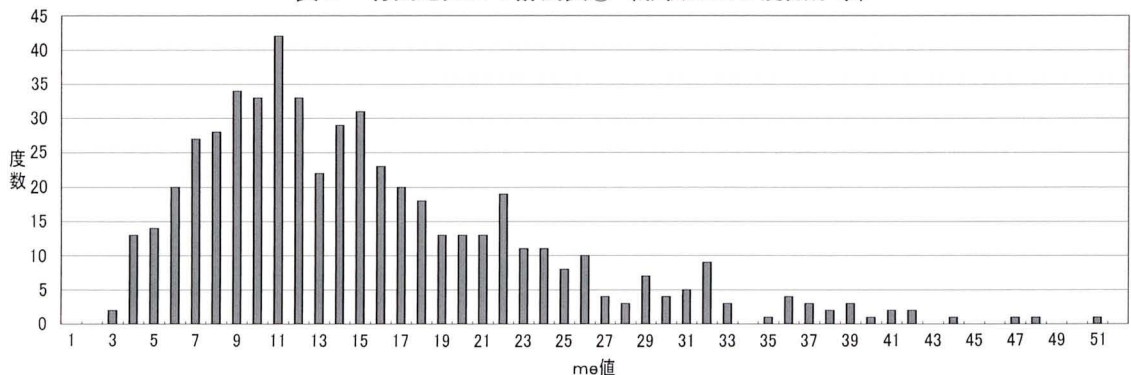
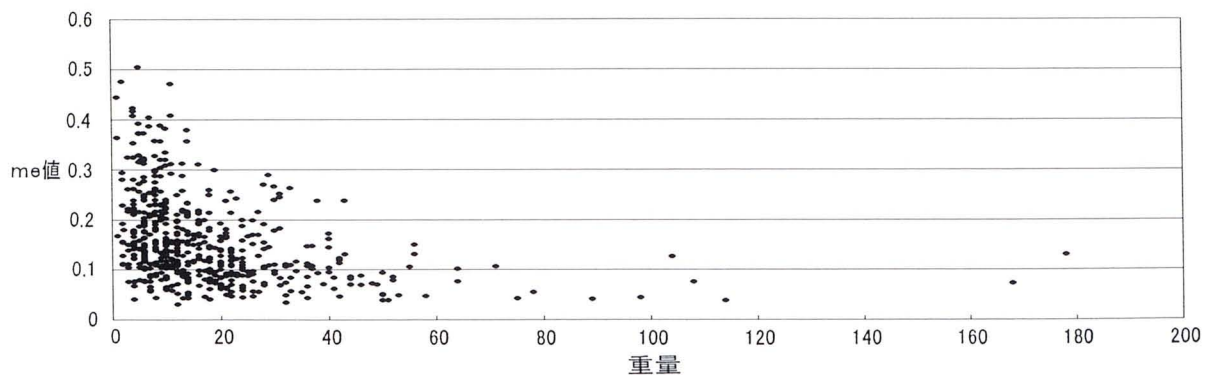


表4 竹田地区ズリ計測表③ (重量と形状の相関)



# 第4章 竹田地区の調査

## 第1節 竹田地区の概要

### (1) 調査前の状況

発掘調査した場所は島根県大田市大森町イ1616-2の字藤田東向山である。周辺の小字名としては「横目平」「三ツ折平南向山」「横目平南向山」「竹田下モノ切南向山」「又尋津り西向山」がある。現状では把握できないが、北側の谷からⅢ区の北東端を通過し、尾根を越し、本谷に通じる道が切図に記載されている。

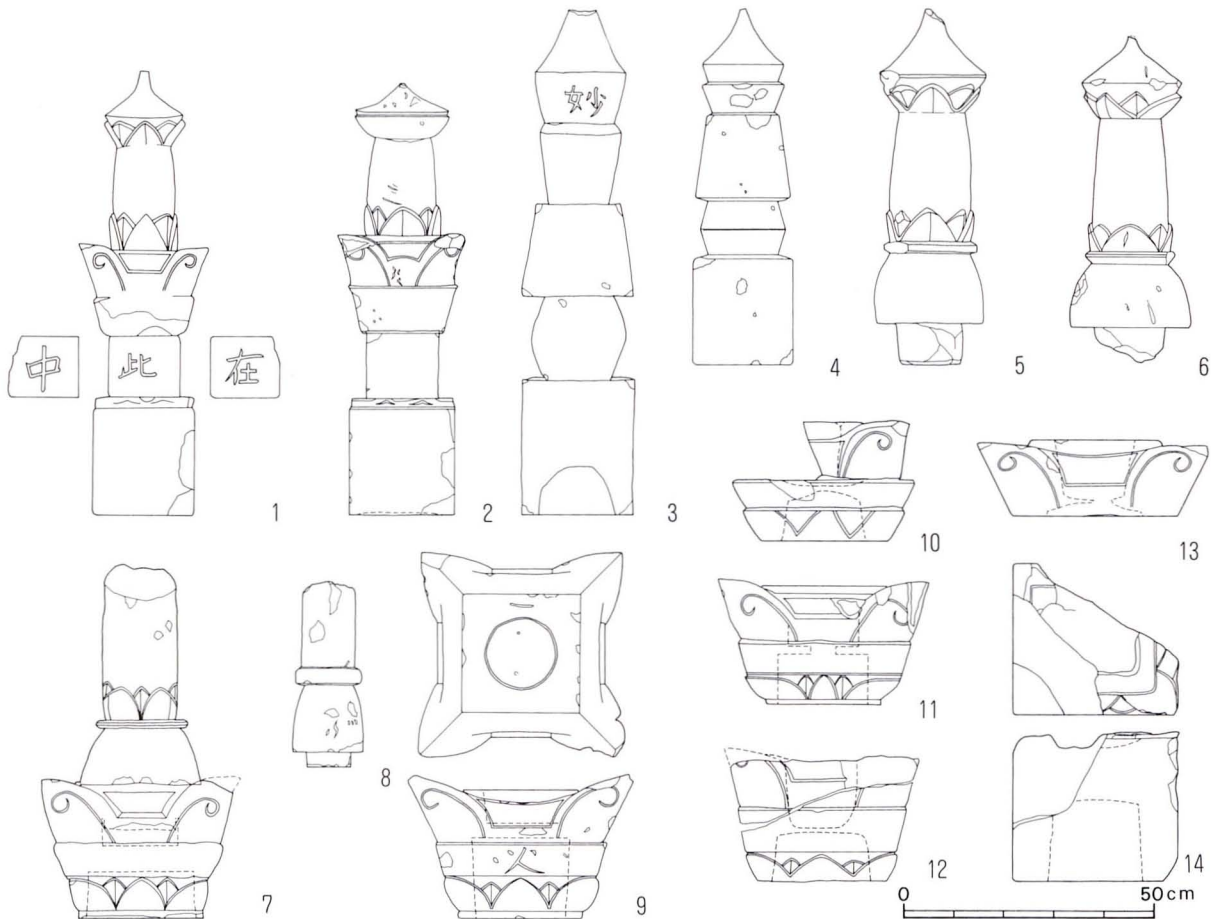
調査前の状況は昭和20年代に植林された杉が径40cm程に成長している他、竹に覆われていた。表面観察では採掘の跡として、Ⅰ区南端からⅢ区にかけては立坑が並び（18～20番間歩）、東側に延長した斜面にも間歩（281・282番間歩）がある。また、Ⅱ区の北側の斜面下・谷部に

も採掘跡（21・59番間歩）がある。竹田地区の南側は急な斜面になり、岩盤が露出し、露頭掘りの跡がある。Ⅰ区西端には井戸跡と考えられる石組みが残っている。

### (2) 周辺の石造物

平成8年度から平成10年度の発掘調査と石造物調査の連携と相互検討の結果、石造物に記載されている年号と発掘調査で検出された遺構とは年代が離れていないことが分かった。

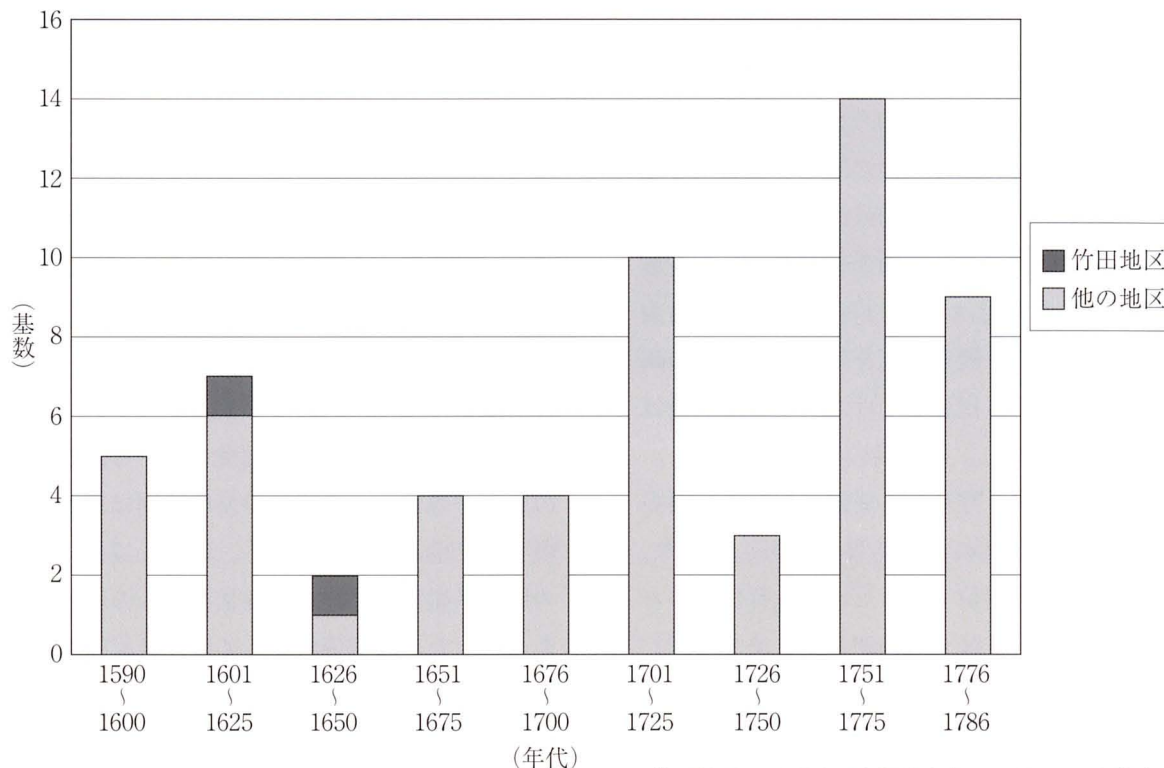
竹田地区においては平成10年度に分布調査や銘文調査が行われて、「墓Ⅰ東上」「墓Ⅰ東下」として報告されているが、平成11年度に発掘調査に伴い実測調査を行った。墓Ⅰ東上群は尾根上及びその周辺平坦地に位置する。



第8図 竹田地区周辺の石造物実測図 (S = 1/10)



表5 石銀地区年代別石造物集成表



『石見銀山遺跡総合調査報告書 第3冊』1999より作成

尾根上には墓と考えられる小盛土があるが、径や高さなど規格性は少ない。墓Ⅰ東下群は竹田Ⅰ区の尾根東端及び斜面に位置し、石造物がまとまっている。以下概略を報告する。

1、2は一石宝篋印塔で、上方に反花座を持ったほぼ方形の基礎に、幅の狭い方形の塔身、大きな隅飾りや蕨手の巻き上げをもつ笠、刻みがない九輪部をもつ。1の相輪は宝珠の下と最下部に請花を造り出すが、2は宝珠に溝があり、宝珠下には請花がない。3、4は一石五輪塔で、3は縦長の地輪、扁平な水輪、やや大きい風輪をもつ。4は中央に線が入る水輪、逆台形の風輪をもち、全体に直線的である。5～13は組合せ宝篋印塔である。5～7の相輪は下部に請花があり、ほぼ同じ規模であるが、8は請花がなく、規模も小さい。7、10～13の笠は隅飾りに蕨手の巻き上げをもち、下部に蓮弁を表した請花を持っている。10は段級と隅飾りの境で割れている。14の基礎はほぼ方形で、上方に反花座をもつ。内部は大きく抉られている。表面に銘文が施されている。紀年銘は4が寛永十(1633)年、14が慶長七(1602)年である。

## 第2節 竹田地区調査の経過

竹田地区は石銀藤田地区と尾根続きの大規模なテラス群で、付近に露頭掘りの跡が集中することや墓の形態が古いことなどから銀山開発初期段階の遺構が存在すると予測された。

さらに、尾根を削平して平坦地が形成されており、石銀地区とは違った平坦地利用が考えられることから調査候補地となり、平成11年5月12日に開催された第8回委員会で調査計画が了承された。

平成11年度は平坦地を広範囲に伐採し、もっとも広い平坦地(Ⅰ区)にトレンチ(約110m<sup>2</sup>)を設定し、遺構遺物の確認を行った。11月11日の第9回委員会で指導を受け、引き続き調査を行うこととなった。

平成12年度は5月10日に開催された第10回委員会にて調査計画が了承され、6月15日から昨年度のトレンチを拡張する方法で平坦面の調査を実施した。7月27～29日に千葉大学玉井哲雄教授により建築史的な見地から指導を受けた。8月7・8日に田中義昭委員、奈良国立文化財

研究所（当時）小池伸彦主任研究官に遺構・遺物の、9月27日に奈良国立文化財研究所（当時）村上隆主任研究官、岡山大学高田潤教授により科学的見地から、10月16～18日には有田町立歴史民俗資料館村上伸之氏から肥前系陶磁器について指導を得た。10月25日には田中義昭委員、鳥根県埋蔵文化財調査センター松本岩雄課長より指導を受けた。11月2日に第11回委員会が開催され、調査状況を報告し、今後の調査の方向について指導を受けた。現地説明会は11月11日に開催し、約50名の参加があった。

平成13年度は5月9日に開催された第12回委員会で平成12年度の調査結果を報告した上で、今年度の調査計画が了承された。5月15日から調査を開始し、I区下層確認トレンチで確認していた方形炉跡の周辺の掘り下げと新たな平坦地の内容確認を実施し、11月8日開催の第13回委員会で調査指導を受けた。現地説明会は11月18日に開催し、50名の参加があった。現地調査は12月20日に終了した。

調査中の8月1日には田中義昭委員、鳥根県埋蔵文化財調査センター松本岩雄調査第1課長11月2日には田中義昭委員、奈良文化財研究所小池伸彦主任研究官、鳥根県教育庁文化財課足立克己主幹、鳥根県埋蔵文化財調査センター間野大丞文化財保護主事に現地指導を受けた。また、科学的見地から12月25日には奈良文化財研究所村上隆主任研究官から現地指導を受けた。

竹田地区は約1万7千 $m^2$ あり、大小さまざまな平坦地が約300存在する。今年度までに調査した実面積はI区は約340.5 $m^2$ （内3 T31.5 $m^2$ ）、II区は12 $m^2$ 、III区は70 $m^2$ 、計422.5 $m^2$ で、複数の遺構面が存在する。

### 第3節 平成11年度の調査

竹田地区で一番広い平坦地をI区、一段低く北側に位置する平坦地をII区とし、トレンチを設定した。I区では表土下20cmで基盤層を確認し、広範囲に地山を削って、平坦地を形成して

いることが確認された。

I区北側は盛土によって、平坦面が広げられており、造成土中からは肥前系陶器や青花などが出土し、平坦地の利用がそのころまでさかのぼる可能性が推定される。発掘委員会でも調査の継続が了承されたので、トレンチを面的に拡張し、さらに、I区からII区にまたがる立ち割り調査を行った。

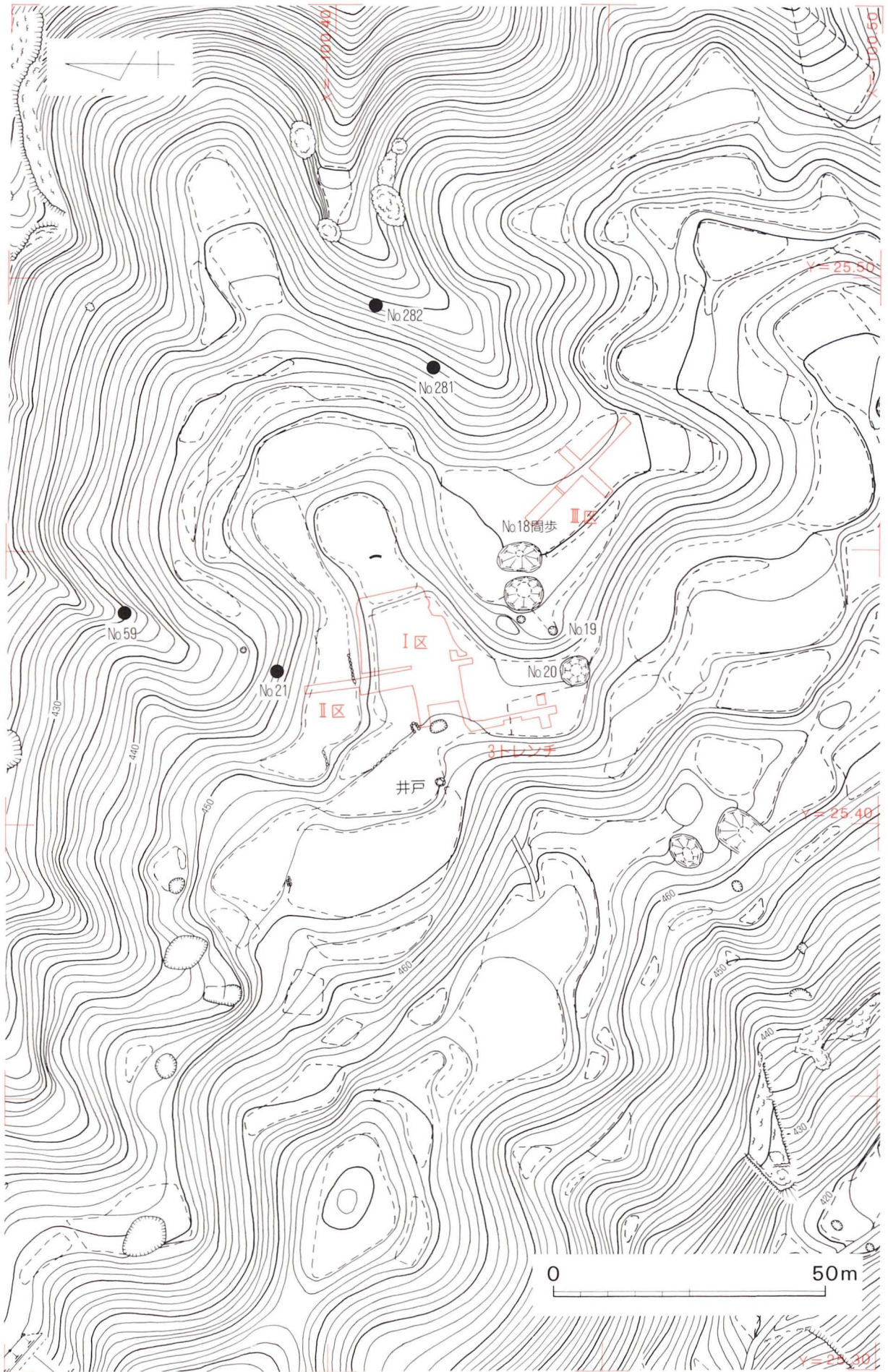
### 第4節 平成12年度の調査

I区ではさらに調査の面積を増やし、平坦地の状況を確認し、平坦地の使用時期は17世紀中頃まで肥前系陶磁器が多く、僅かに17世紀後半の肥前系陶磁器が存在し、18世紀のものは確認できなかった。表採資料としては19世紀以降の石見焼が存在した。

検出した遺構としては1～9cmのズリの堆積した土坑、ユリカスが堆積した土坑、炉跡、炭化物の集中する場所、熱を受けた場所を確認した。出土品としては陶磁器（中国製青磁碗、青花碗・皿、肥前系陶器碗・皿・播鉢、肥前系陶器碗・皿、備前播鉢・壺）、羽口、炉壁、カラミ、鉄釘、碁石、石臼、要石、鉛塊、青銅製品（小柄、分銅、キセル）、などがある。さらに、平坦地の造成年代を確認するため設定した下層確認トレンチでは、粘土により45×55cmの方形に成形され、内部に黒色土が堆積した炉跡を確認した。黄色粘土は3つ重なっていた。狭いトレンチであるが、この遺構面を覆う土には肥前陶磁器を含まず、中国製青花皿や美濃皿しか確認されておらず、炉跡の時期は16世紀末以前と考えられた。発掘調査と連携して実施している科学分析の結果、方形炉跡からは鉛・銀が検出され骨片も伴うことから灰吹炉の可能性が高いことが判明した。

II区では、3つの遺構面を確認した。最上層の第1面は17世紀中頃の肥前陶磁器を含み、I区と同様の18世紀の遺物は出土していない。第2面は肥前系陶器を含まず、I区第2面以前と考えられる。





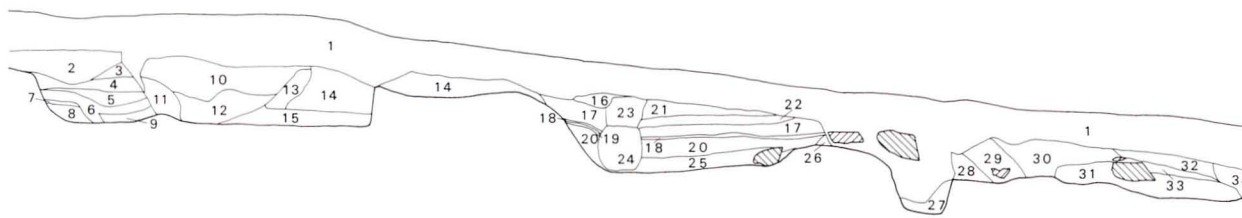
第9図 竹田地区トレンチ・調査区配置図 (S=1/1,000)



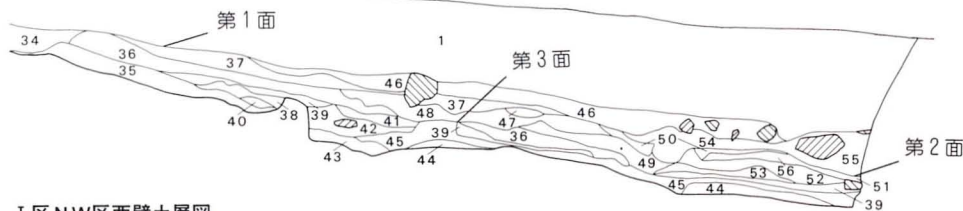
第10図 竹田地区I区遺構配置図 (S=1/300)



— 451.4 m



— 450.2 m



### I 区NW区西壁土層図

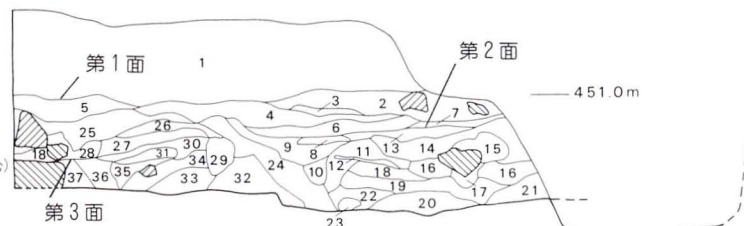
- |                                |                                |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 暗茶褐色粘質土 (表土、締まり悪い)           | 29 灰黄褐色粘質土 (炭化物含む)             |
| 2 黄灰色粘質土 (均質)                  | 30 黄色粘土 (炭化物少し含む)              |
| 3 橙色砂質土 (黒色砂質多く含む)             | 31 暗茶褐色土 (1~3cmの礫)             |
| 4 橙色粘質土 (黒色粘土含む)               | 32 茶褐色土 (1~3cmの礫)              |
| 5 黒色砂質土 (均質)                   | 33 橙色粘質土 (クサリ礫含む、上面は遺構面)       |
| 6 橙灰褐色砂質土 (均質、固い)              | 34 黄褐色粘質土 (クサリ礫、黄色粘土含む)        |
| 7 橙色粘質土 (均質)                   | 35 黒色粘質土 (均質)                  |
| 8 灰橙褐色砂質土 (均質)                 | 36 桃色粘質土 (クサリ礫多く含む)            |
| 9 黒色砂質土 (均質、固い)                | 37 暗黄褐色粘質土 (クサリ礫多く含む)          |
| 10 黄灰色粘質土 (締まり悪い)              | 38 灰色砂層 (均質)                   |
| 11 桃褐色粘質土 (クサリ礫含む、締まり悪い)       | 39 黒色粘質土 (炭)                   |
| 12 灰茶褐色砂質土 (黄色粘土含む、固い)         | 40 赤褐色粘質土 (焼土)                 |
| 13 灰黄褐色粘質土 (黒色砂粒含む)            | 41 茶褐色砂層 (均質)                  |
| 14 桃褐色砂質土 (均質、固い)              | 42 灰色砂層 (均質)                   |
| 15 黒褐色砂質土 (均質、固い)              | 43 黒色砂層 (均質)                   |
| 16 黄灰褐色粘質土                     | 44 茶褐色土 (砂礫多く含む)               |
| 17 黄灰褐色砂質土 (黄色粘土1~3cmの厚さが3層入る) | 45 黄褐色粘土 (方形卵+3面脱床粘土、クサリ礫多く含む) |
| 18 黄色粘土 (均質)                   | 46 暗黄褐色粘質土 (クサリ礫多く含む)          |
| 19 黒色粘質土 (均質)                  | 47 桃色粘土ブロック                    |
| 20 茶褐色砂質土 (均質)                 | 48 茶褐色砂質土 (クサリ礫、礫含む)           |
| 21 桃褐色砂質土 (均質)                 | 49 茶褐色土 (砂礫多く含む)               |
| 22 黄褐色土 (2~5cm礫含む)             | 50 黒色粘質土 (炭層)                  |
| 23 茶褐色砂質土                      | 51 橙色粘土                        |
| 24 黄色粘質土 (均質)                  | 52 茶褐色土 (砂礫多く含む)               |
| 25 茶褐色土 (2~5cm礫含む)             | 53 暗黄灰褐色砂質土                    |
| 26 暗桃褐色粘質土 (クサリ礫含む)            | 54 黄色粘土                        |
| 27 茶褐色砂質土 (黒色砂層土、互層状になる)       | 55 黄灰色粘質土                      |
| 28 橙色粘質土 (クサリ礫含む)              | 56 茶褐色粘質土                      |

### II 区土層図

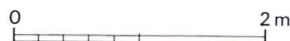
- |                               |
|-------------------------------|
| 1 暗茶褐色粘質土 (表土、締まり悪い、木の根多く含む)  |
| 2 暗茶褐色粘質土                     |
| 3 黄褐色粘質土 (白色粒子、クサリ礫少し含む)      |
| 4 暗黄褐色砂質土 (クサリ礫少し含む)          |
| 5 茶褐色砂質土 (クサリ礫少し含む)           |
| 6 淡灰褐色粘質土 (締まり悪い、ビット埋土)       |
| 7 茶褐色粘質土 (締まり悪い、クサリ礫含む)       |
| 8 暗茶褐色砂層 (固く締まる、マンガンバンドか)     |
| 9 明茶褐色粘質土 (クサリ礫多く含む)          |
| 10 明茶褐色粘質土 (クサリ礫含む)           |
| 11 暗茶褐色粘質土 (締まり悪い、ビット埋土)      |
| 12 暗黄褐色粘質土 (クサリ礫含む)           |
| 13 暗黄褐色粘土 (ブロック状)             |
| 14 暗茶褐色粘質土 (炭、黄色粘土含む)         |
| 15 明茶褐色砂質土 (クサリ礫多く含む)         |
| 16 赤褐色粘質土 (地山か)               |
| 17 暗茶褐色粘土 (ブロック状)             |
| 18 明茶褐色砂質土 (クサリ礫少し含む)         |
| 19 明灰茶褐色粘質土 (クサリ礫多く含む)        |
| 20 明灰茶褐色粘質土 (クサリ礫多く含む)        |
| 21 茶褐色粘質土 (クサリ礫多く含む)          |
| 22 明茶褐色砂質土 (小さいクサリ礫含む)        |
| 23 茶褐色砂質土 (クサリ少し含む)           |
| 24 灰茶褐色粘質土 (クサリ礫多く含む)         |
| 25 茶褐色粘質土 (締まり良好、クサリ礫あまり含まない) |
| 26 暗茶褐色粘質土 (締まり悪い)            |
| 27 黒色粘質土 (旧表土か)               |

### I 区NW区北壁土層図

- |                          |                             |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1 暗茶褐色粘質土 (表土)           | 21 茶褐色粘質土                   |
| 2 明褐色粘質土                 | 22 灰黄茶褐色砂質土                 |
| 3 黒褐色炭層                  | 23 橙色粘土 (ブロック)              |
| 4 黄色粘土 (第1遺構面)           | 24 黄褐色粘質土 (炭化物含む)           |
| 5 灰褐色粘質土 (遺構埋土)          | 25 灰茶褐色砂質土 (炭化物含む、遺構埋)      |
| 6 茶褐色土 (砂礫多く含む、ズリ含む)     | 26 橙色粘土 (炭化物含む)             |
| 7 茶褐色土 (1cm以下の礫含む)       | 27 茶褐色粘質土 (均質)              |
| 8 黄色粘土                   | 28 茶褐色砂質土 (黄色ブロック、炭化物多く含む)  |
| 9 灰褐色粘質土 (炭化物、黄褐色粒子含む)   | 29 灰褐色粘質土 (ブロック、クサリ礫、炭化物含む) |
| 10 茶褐色砂質土                | 30 明灰褐色粘質土                  |
| 11 明褐色粘質土 (クサリ礫、黄褐色粘土含む) | 31 橙色粘土 (クサリ礫多く含む)          |
| 12 橙色粘質土                 | 32 暗黄褐色砂質土 (均質)             |
| 13 暗灰褐色砂質土               | 33 暗茶褐色土 (砂礫多く含む)           |
| 14 灰褐色土 (砂礫多く含む)         | 34 暗黄褐色粘質土                  |
| 15 黄褐色粘質土                | 35 暗灰褐色粘質土 (黄色ブロック含む)       |
| 16 暗灰褐色土 (砂礫多く含む)        | 36 暗灰褐色粘質土 (炭化物、橙色粘土を含む)    |
| 17 灰褐色粘質土 (礫含む)          | 37 暗灰褐色粘質土 (炭化物、橙色粘土を多量に含む) |
| 18 1層より石垣均質1~2cm         |                             |
| 19 黄褐色粘質土 (クサリ礫含む)       |                             |
| 20 茶褐色土 (砂礫多く含む)         |                             |



- |                            |                       |
|----------------------------|-----------------------|
| 28 茶褐色砂質土 (クサリ礫少し含む)       | 47 暗褐色粘質土 (石垣の裏込)     |
| 29 暗茶褐色粘質土 (クサリ礫多く含む)      | 48 灰褐色砂質土 (クサリ礫を多く含む) |
| 30 明黄褐色砂質土 (クサリ礫少ない)       | 49 黄褐色砂質土 (クサリ礫多く含む)  |
| 31 黄褐色砂質土 (一時表土か、クサリ礫少し含む) | 50 茶褐色粘質土 (炭含む)       |
| 32 淡黄褐色粘質土 (クサリ礫状の軟らかい石含む) | 51 明桃色粘土ブロック (クサリ礫)   |
| 33 黄褐色粘質土 (ブロック状)          | 52 茶褐色粘質土 (クサリ礫多く含む)  |
| 34 黄褐色砂質土 (3~5cmクサリ礫少し含む)  |                       |
| 35 黄褐色粘質土 (クサリ礫多く含む、固く締まる) |                       |
| 36 茶褐色粘質土 (クサリ礫多く含む、固く締まる) |                       |
| 37 灰褐色粘質土 (ブロック状)          |                       |
| 38 黄褐色粘質土 (クサリ礫少し含む)       |                       |
| 39 橙色粘質土 (クサリ礫なし)          |                       |
| 40 灰褐色粘質土                  |                       |
| 41 黄褐色粘質土                  |                       |
| 42 暗灰褐色粘質土                 |                       |
| 43 暗灰茶褐色粘質土 (固く締まる、クサリ礫含む) |                       |
| 44 暗黄褐色砂質土 (クサリ礫多く含む)      |                       |
| 45 黒色粘質土 (旧表土、遺構面上表土化したもの) |                       |
| 46 暗黄褐色粘質土 (礫多く含む)         |                       |
| 53 黄褐色粘質土                  | 57 茶褐色粘質土 (クサリ礫なし)    |
| 54 暗黄褐色粘質土                 | 58 暗灰茶褐色粘質土           |
| 55 灰褐色土 (礫1cm前後、非常に固い)     | 59 暗灰褐色粘質土            |
| 56 暗茶褐色粘質土                 | 60 灰黄色粘質土 (地山?)       |



第11図 竹田地区 I 区土層図 (S=1/60)

## 第5節 平成13年度の調査

I区では下層確認トレンチで確認した方形炉跡の周辺をI区NW区として掘り下げを行い、遺構面を4面確認した。遺構面毎にユリカス堆積土坑や炉跡などを検出した。今年度は多くの製錬関連遺物が出土した。酸化マンガン鉱石や鉛片の他に、土砂をふるいにより選別した結果、微少なカラミ等も回収した。遺構としては第3面で新たに方形炉を確認し、科学分析を実施した。4面にある方形炉周辺は完全に掘り終わることはできなかった。

新たな平坦地にトレンチを設定し、Ⅲ区とした。トレンチ内からはカラミや羽口の他に被熱土壌や炭化物の分布する場所を確認し、Ⅲ区においても製錬関連作業を行っていることが判明した。

## 第6節 遺構と遺物

### (1) I区の調査

I区は北側と南側の一部が盛土により造成され、他は地山を削りだしている。北側の盛土内の調査により複数の遺構面が確認された結果、中央部から南側の地山削り出し部分は複数の遺構面が重なっていることになる。それらの遺構は浅いものがあることから後に削平を受けている可能性がある。地山部分の遺構は一部しか完掘しておらず、遺構に伴う遺物も少ない。地山部分の遺構は盛土部分のどの遺構面と同時代かという課題が存在するが、今回、詳しい検証を行っておらず、今後の課題として、今回の報告では地山部分の遺構はすべて第1面とした。

#### ① I区第1面

調査区中央から南側にかけては表土下約20cmの暗茶褐色粘質土が堆積し、その下に基盤層(地山)である明橙色粘質土があり、この基盤層に遺構が存在する。南側は暗茶褐色砂質土が幅1.7m、厚さ0.6m以上盛土され、平坦面を形成している。I区からⅡ区にかけてのトレンチよりI区の構築状況を確認できた。I区第4

面より新しい盛土は部分的にズリや砂質土など多様な土を用いて行われており、場所により厚さはまちまちである。厚さ10cmの所もあれば35cmの場所もある。しかし、第4面を構築している盛土は厚さ220cm以上あり、使用されている土も暗茶褐色、淡黄褐色、黒色等を水平に盛土している。この盛土の中に遺構面があるかどうかは狭いトレンチのため確認できていない。

第1面からはやや大きい土坑が9基、溝、ピット、要石、炭化物が散布した場所、被熱土壌、多数の石材を確認した。SK15やSK16の周辺は固く、マンガンが沈殿して硬化した跡と思われる。

#### 【SK01】

SK01は内法で南北1.35m、東西1.2m、深さ43cmを測り、SK10を切って造られている。SK10を切っている場所には幅1m、高さ40cmにわたり、15~20cmの角礫石を3~4段積み、石の隙間には土が充填されている。SK01の南壁は地山でなく盛土部分であり、何らかの遺構を切っている可能性がある。埋土は中央がやや凹んだ厚1~2cmのマンガン分が多い黒色粘質土により上下層に分けられる。上層は黒褐色土等の粒子の粗い砂層である。下層は黄もしくは赤褐色等を呈する砂質系の土で、床面は地山で粘土は貼られていない。

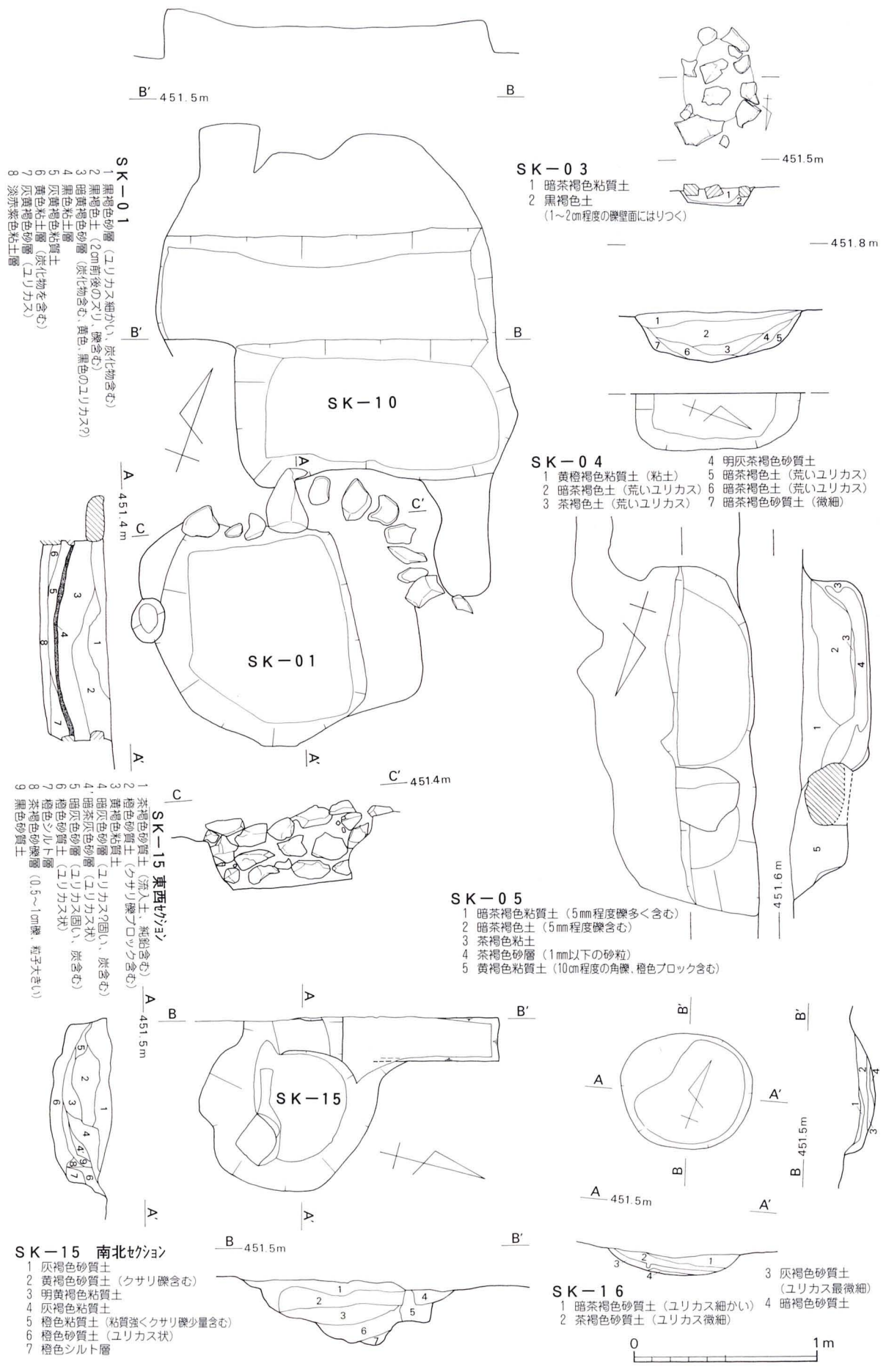
#### 【SK03】

SK03は楕円形を呈し、内法で長径43cm、短径30cm、深さ15cmを測り、床には石材を敷いている。周囲には10~25cmの扁平な石材を平らな面を上には置いている。埋土は暗茶褐色粘質土で、埋土内からは周囲と同質の石材が2個検出された。構築方法はまず、土坑を掘り、床石を置いてから周囲の石を置いている。

#### 【SK04】

SK04とSK05は調査区西端で一部検出した。SK04は南北90cm、東西30cm以上、深さ15~20cmを測る方形である。埋土は茶褐色系のユリカスであった。





第12図 竹田地区 I 区遺構実測図① (S = 1/30)

#### 【SK05】

SK05は南北1.8mを測り、東西84cm以上、深さ30~35cmの方形を呈する。北側は南側より20cm高くなり、幅34cmのやや大きい石が置かれていた。北側には石の裏込めと考えられる黄褐色粘質土があった。石から南端までの長さは1.2mの範囲には茶褐色のユリカスが堆積していた。SK05から幅20~30cm、深さ4cmの溝が南に向け伸び、途中で二手に分かれている。深さは浅く、削平されている可能性もある。埋土はSK05の上層と同じユリカスである。

#### 【SK06】

SK06は石で囲われた土坑である。平面形は長方形で、内法は長辺32cm、短辺20cm、深さ14cmを測る。短辺は石材を1個、長辺は一部石材が確認できないが2個以上を使用している。埋土は茶褐砂質土である。

#### 【SK10】

SK10はSK01により南西部を切られているが、南北2.2m、東西1.8m、深さ0.25mを測り、埋土は1~9cmのズリ<sup>(注4)</sup>である。断面は中央部がやや高くなり、壁沿いが深くなる。

#### 【SK15】

SK15は径96cm、深さ32cmを測る円形である。壁は被熱し赤褐色に変色し、固くなっている。南壁には赤褐色に変色した基盤層の塊がある。埋土は橙色砂質土、黄褐色粘質土、橙色粘質土、茶褐色砂質土である。茶褐色砂質土からは金属鉛が出土した。

#### 【SK16】

SK16は径70cm、深さ13cmの円形の土坑で、床は播鉢状を呈している。埋土はユリカスである。北側には幅20cm長さ60cmの範囲にズリが検出された。

#### 【SK18】

SK18は径75cm、深さ9cmの円形の土坑で、床は播鉢状を呈す。埋土はズリの単層である。

#### 【SK21】

SK21は未掘であるが、幅100cmを測る。SD03に切られている。埋土は灰桃色である。

#### 【SD03】

SD03はSK01の西側を南北に走り、平面形は釣り針状を呈する。断面U字形で、幅45~75cm、深さ10~17cmを測る。中からは25cmほどの石を検出している。

#### 【その他】

ピットは20~50cmと平面規模に幾つかの大きさの違いがあり、底に上面が平らな石が置かれたものもあった。

#### 【SX01~SX03】

固くなったSX01~SX03がまとまって検出された。楕円形を呈し、SX01は長径50cm、短径40cm。SX02は長径44cm、短径22cm。SX03は長径40cm、短径36cmを測る。

#### 【SX04】

北東部にはやや広い被熱土壌がある。東西2.8m、南北2.0mを測り、周囲からは発泡したカラミを多数出土した。

#### 【SX05】

中央部からは石鉢が検出された。南北28cm、東西22cm、深さ7cmの凝灰岩製の石鉢で、遺構面に埋められている。埋土は灰褐色土である。

I区の南側にも平坦面が続いているので遺構の残存状況を確認するため3Tを設定した。3Tからはユリカスの堆積した土坑SK12、SK13、SK14を確認した。これらの土坑は、ほぼ同じ主軸である。

#### 【SK12】

SK12は幅0.83m、深さ0.31mを測る。SD07により一部切られている。

#### 【SK13】

SK13とSK14はSD08で切られている。SK13は幅1.2m、深さ0.7mを測る。埋土は暗黄褐色もしくは黒褐色のユリカスであるが、上層は斜行し、下層は水平堆積していた。

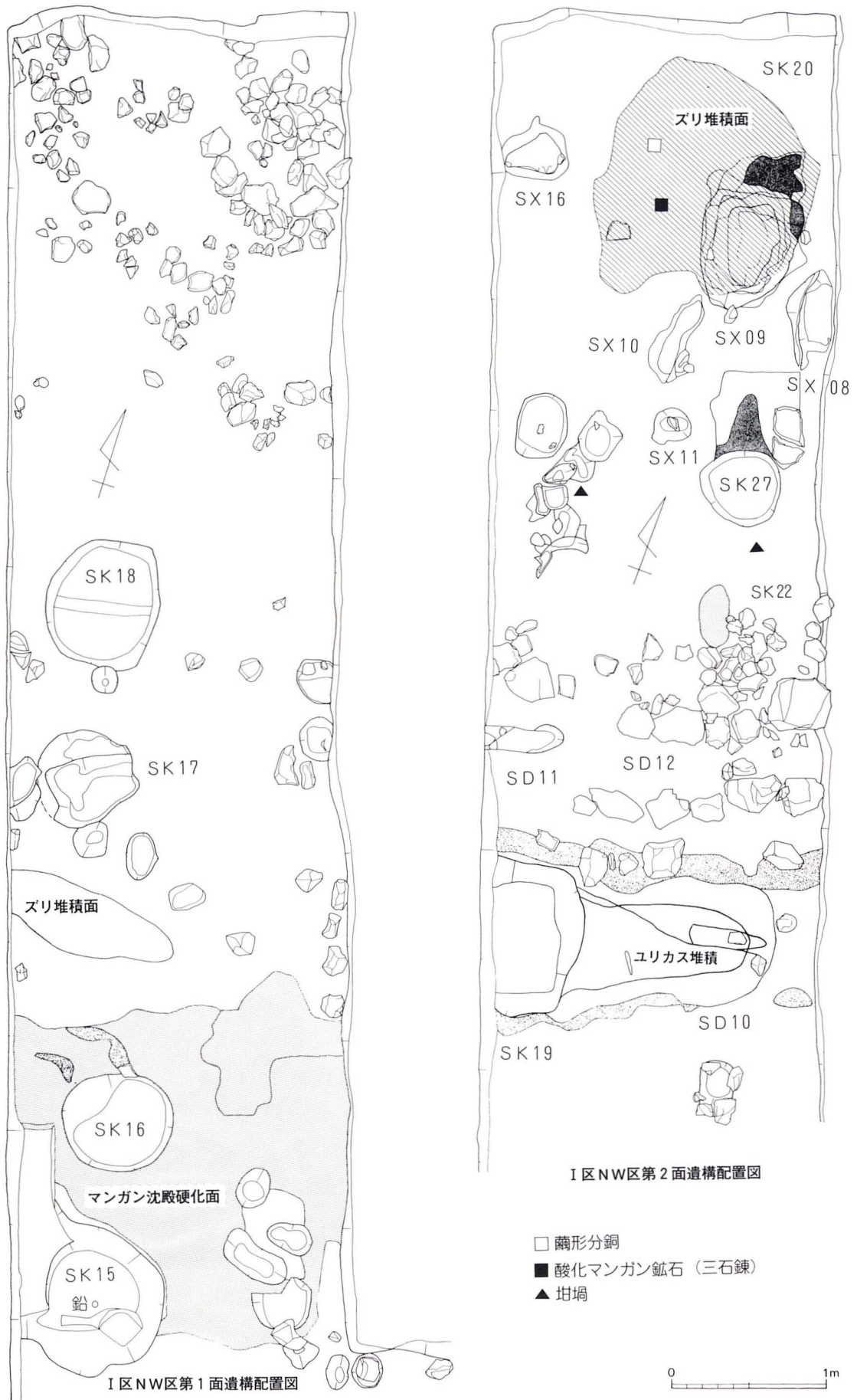
#### 【SK14】

SK14は深さ0.5mで、ユリカスが堆積していた。

#### 【SD07】

SD07は幅15~35cm、深さ12cmを測り、ユリ





第13図 竹田地区 I 区遺構実測図② (S = 1/40)

カスが堆積している。

#### 【SD08】

SD08からは竹田地区で新しい肥前系陶器(刷毛目)が出土している。埋土は茶褐色粘質土で、SK13と重なっている箇所から灰色の角礫と凝灰岩の加工された石材が確認された。

#### 【石列1】

SK12の南には石列が確認された。北側に面をそろえ、4個の石があった。石は上面が平で、90cm、厚さ5cmである。この石列はSK12の上にはない。

#### 【その他】

南側で東西に拡張した場所から、ピットと石列が確認された。下層確認を行うと黄色粘土の土間面と上面が平坦な石が検出された。

I区の20番間歩とⅢ区の18、19番間歩の延長上とトレンチの交点では土層確認の結果、茶褐色粘質土、暗赤褐色粘質土が大きく落ち込み、下層の間歩が落盤し上層の土が落ちている可能性がある。

(注4)

ズリについては約500個をサンプリングし、重さ、長さ、幅、厚さを計測した。(13、15ページ)概説すると表1は重量と度数の関係で3~8gのものが多くいことがわかる。表3は度数とme値(厚さ/(長さ×幅))の関係である。表4は重量とme値の関係である。よく似た形、重さであることがわかる。なお、ズリの中には鉄脈と考えられるものも含まれていた。

### ②I区第2面

平成11年度に実施した下層確認トレンチを広げるため中心の基準杭から北西方向のグリッド(NW区)を3×10mの範囲を掘り下げた。第1面で確認したSK15については南側半分は地山であったので掘り下げず北側の盛土部分を掘り下げた。

調査区に直交するようにSD10やSK19を検出した。それに平行するように石列を確認した。さらに、北側にはズリが堆積したSK20や炉跡ではSX09~SX11など多くの遺構を確認した。

#### 【SK20】

SK20は長径140cm、短径130cm、深さ7cmの

楕円形の播鉢状の土坑である。壁には長さ15cm、幅12cmの凝灰岩片があり、上面には金属片が付着していた。金属は水滴のようにポタポタ落ちたような状況であった。埋土は1~5cmのズリが堆積していた。ズリ内からは分銅が出土した。石に付着した金属片の科学分析の結果マンガンを多く含んでいることがわかった。

#### 【SK22】

SK22は石列の北側に位置し、明確な土坑は検出できなかったが、10~20cmの石が南北60cm、東西45cmの範囲に集積され、その中に要石があった。

#### 【SD12】

石列は2条確認でき、直線的な面は内側を向いており、石列により幅20cmの溝状を呈していた。石は南側で7個、北側で7個確認でき、13~40cmが1段積んで並んでいる。一番東側の石は上面が平で礎石とも考えられる。石列は調査を下層の調査を行っていない東側にも続いている。埋土は黄色粘土である。

#### 【SX08】

SX08は南北55cm、東西は下層確認トレンチで詳しくは不明であるが現状で30cmを測る。方形に灰黄色粘土が厚さ6cm堆積していた。

#### 【SX09】

SX08に隣接し、SX09が存在する。長径81cm、短径60cm、深さ21cmの楕円形の土坑である。北側には南北25cm、東西55cm、範囲に炭化物が堆積していた。複雑な土層で、炭化物、黄褐色粘質土、ユリカスがある。黄褐色粘質土層からは羽口も検出した。

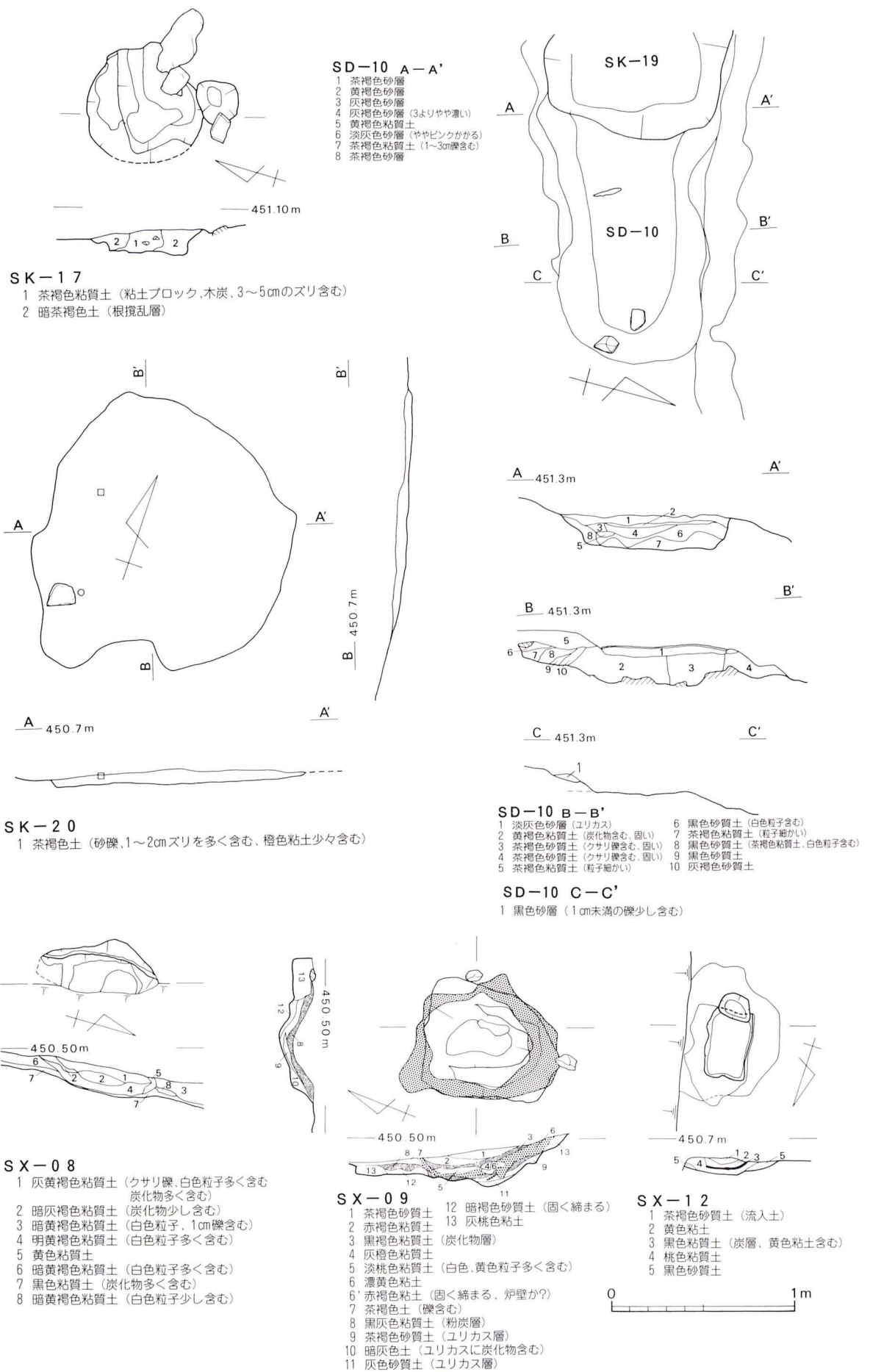
#### 【SX10】

SX10は南側がやや円形を呈し、北側に溝状の窪みが付属する。全長60cm、南側の円形部分の径は25cm、深さ8cm、溝状窪みは幅14cm、深さ6cmを測る。壁面は黒褐色になり固い。埋土は灰褐色。SX08からSX11周辺には炭化物が広がっていた。

#### 【SX11】

SX11は径24cm、深さ7cmの円形を呈する。





第14図 竹田地区 I 区遺構実測図③ (S=1/30)

壁面は固く、炭化物が付着していた。埋土は黄褐色粘質土である。

#### 【S X 1 2】

S X 16は、要石が土間面に埋め込まれている。石の周辺は幅6cmや石の下も赤褐色に変色している。

### ③ I 区第3面

第2面の整地土は桃褐色砂質土や茶褐色粘質土など場所により異なり、2面と3面は約10cmしか盛土はなかった。しかし、炭化物層を挟んでおり、これにより2面と3面を区別できた。3面は黒色土下にきれいな桃色粘質土があり、その下に2～5cmの礫が敷かれていた。桃色粘質土は「貼り床」あるいは土間を形成している土層と考えられる。桃色粘質土上からはS X 13、S X 20などの遺構を確認した。

#### 【S X 1 2】

桃色粘土で構築された方形土坑である。内法は南北33cm、東西24cm、深さ7cmを測り、内部には厚さ1cmの炭化物と黄色粘土が堆積していた。黄色粘土はきめが細かく、土間の粘土や炉の構築粘土にも使われているきれいな粘土であった。土坑の南側には径12cmの円形の窪みがあり、淡茶褐色砂質土が堆積していた。土坑の構築方法はまず、1～5cmの礫を含む灰褐色砂質土が50×70cmの範囲にあり、それを切るように34×52cmの範囲に桃色粘質土があり、その西側近くに方形の土坑を構築している。性格については不明。

#### 【S X 1 3】

S X 13は内法で南北41cm、東西36cm、深さ南側で15cm、北側で10cmを測る。埋土は炭化物層の下に砂層（ユリカス）がある。土色により黒色と灰色に分かれ、なかに、鉄器片や土師器片を含んでいる。第17層を取り除くと第21層の黒褐色の砂層があり、その上面から被熱した箇所と白色土を確認した。被熱箇所は砂質が被熱している状況であり、白色土は長径9cm、短径7cm、厚さ2cmの範囲がやや堅く、周囲の第19・

20層を取り除くと塊状を呈していた。しかし塊ではない。

#### 【S X 2 0】

S X 20は水簸されたような混じりものがない黄色粘土が円形に充満していた。柱穴のような用途ではないと考えられる。

#### 【遺物出土状況】

遺構面を覆う炭化物層から鉄製品や銭貨が出土した。無文銭はまとまって出土した。元は1列に並んでいた緡銭の可能性はあるが、出土した時点では途中で2つに分かれ、上方は上を向いて、下方は横を向いていた。下方についてはもろくなっており、強化剤（パラロイドB72）で強化して取り上げた<sup>(注5)</sup>。取上後の観察では上方で8枚以上、下方で2枚以上が確認できた。確認できた銭貨は文字がなく、リング状を呈する。

(注5)

取り上げに際しては、鳥根県埋蔵文化財調査センター林健亮氏、澤田正明氏の御協力を得た。

### ④ I 区第4面

平成11年度に実施した下層確認トレンチで検出した遺構面である。トレンチの幅が60cmほどと狭く、方形炉を検出したのみである。

#### 【S X 1 4】

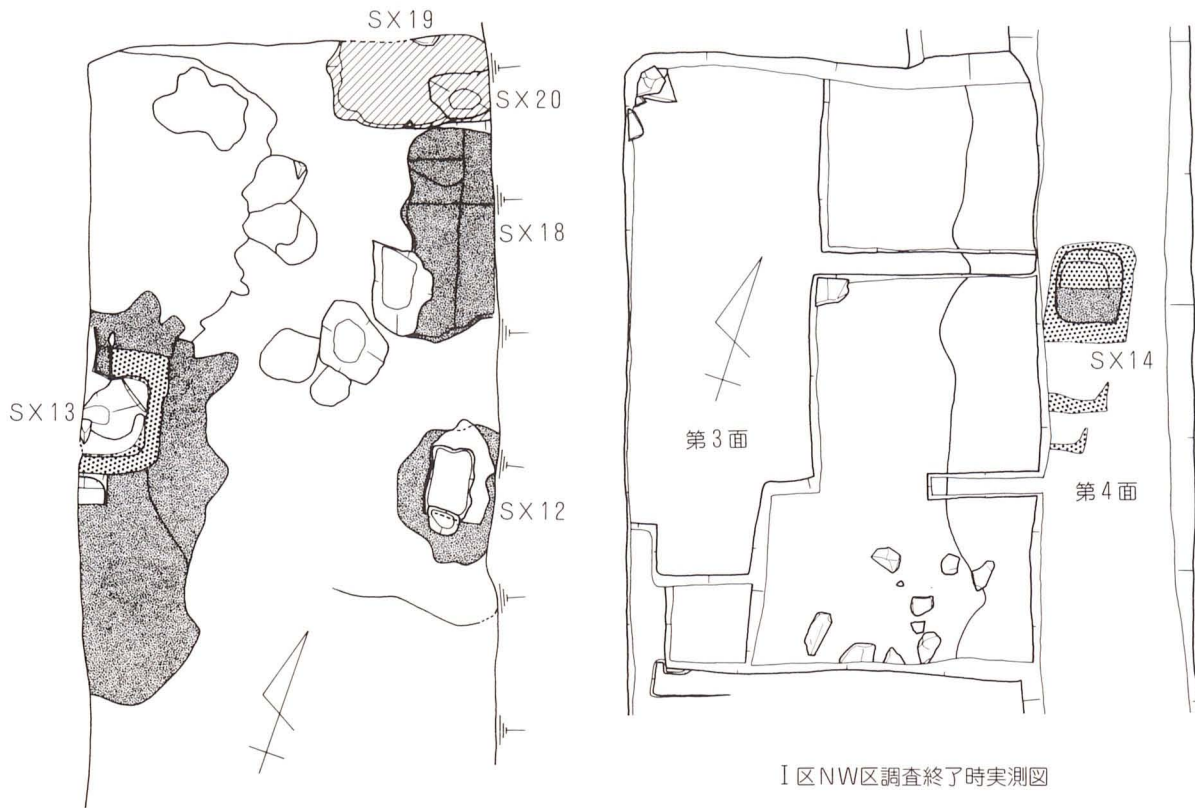
S X 14はきめ細かく混じりもののない黄色粘土で構築されている。内法は南北55cm、東西45cm、深さ10cmを測り、床面・壁面にも黄色粘土がある。北側にはズリを掘り込んでいた。内部はきめ細かい黒色粘質土が堆積し、骨片も含まれていた。S X 14に隣接して、同様の黄色粘土が鍵状に検出された。内部はS X 14と同様黒色粘質土が堆積していた。

## (2) II 区の調査

竹田II区は竹田I区の北側の比高差約3mの平坦地にある。I区から幅1.5mのトレンチを延長し、I区との関係やI区の構築方法を確認するために連続させた。遺構面は3面確認した。

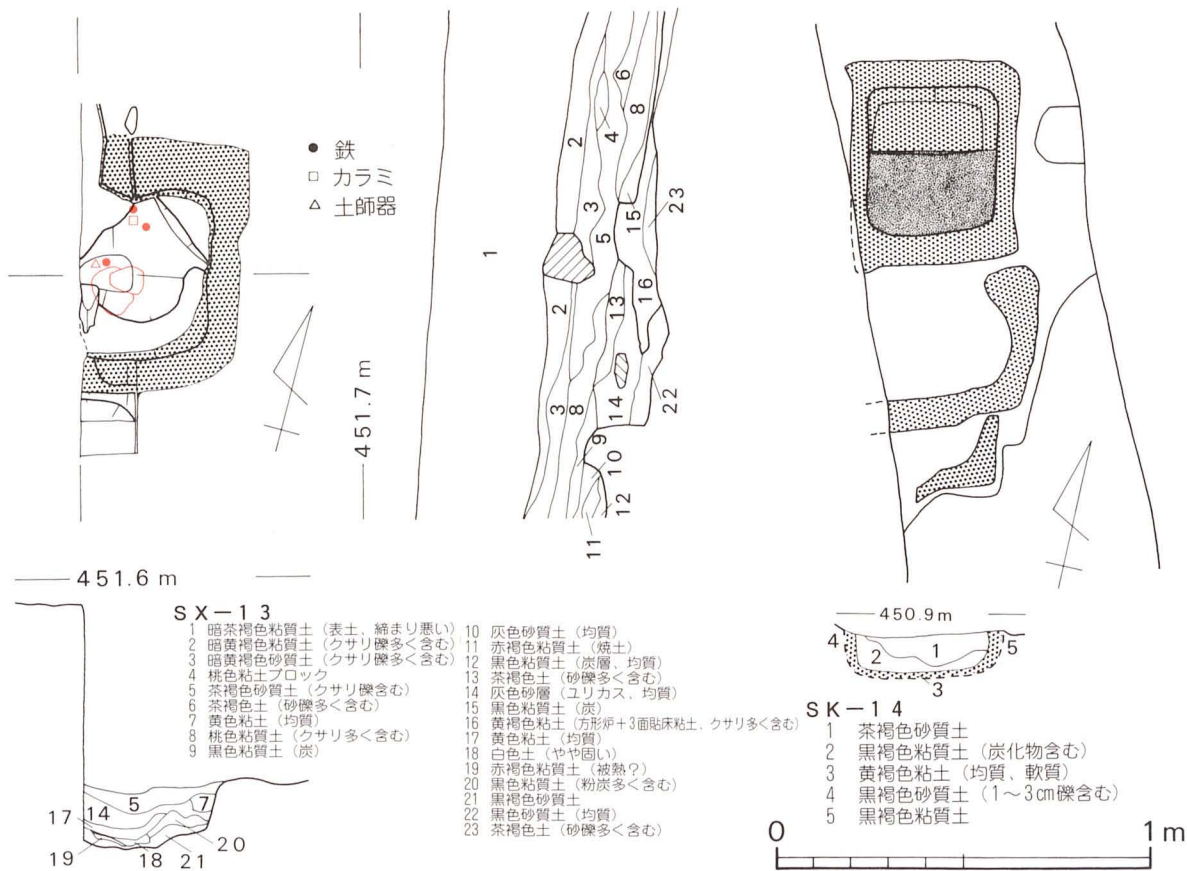
### ① II 区第1面



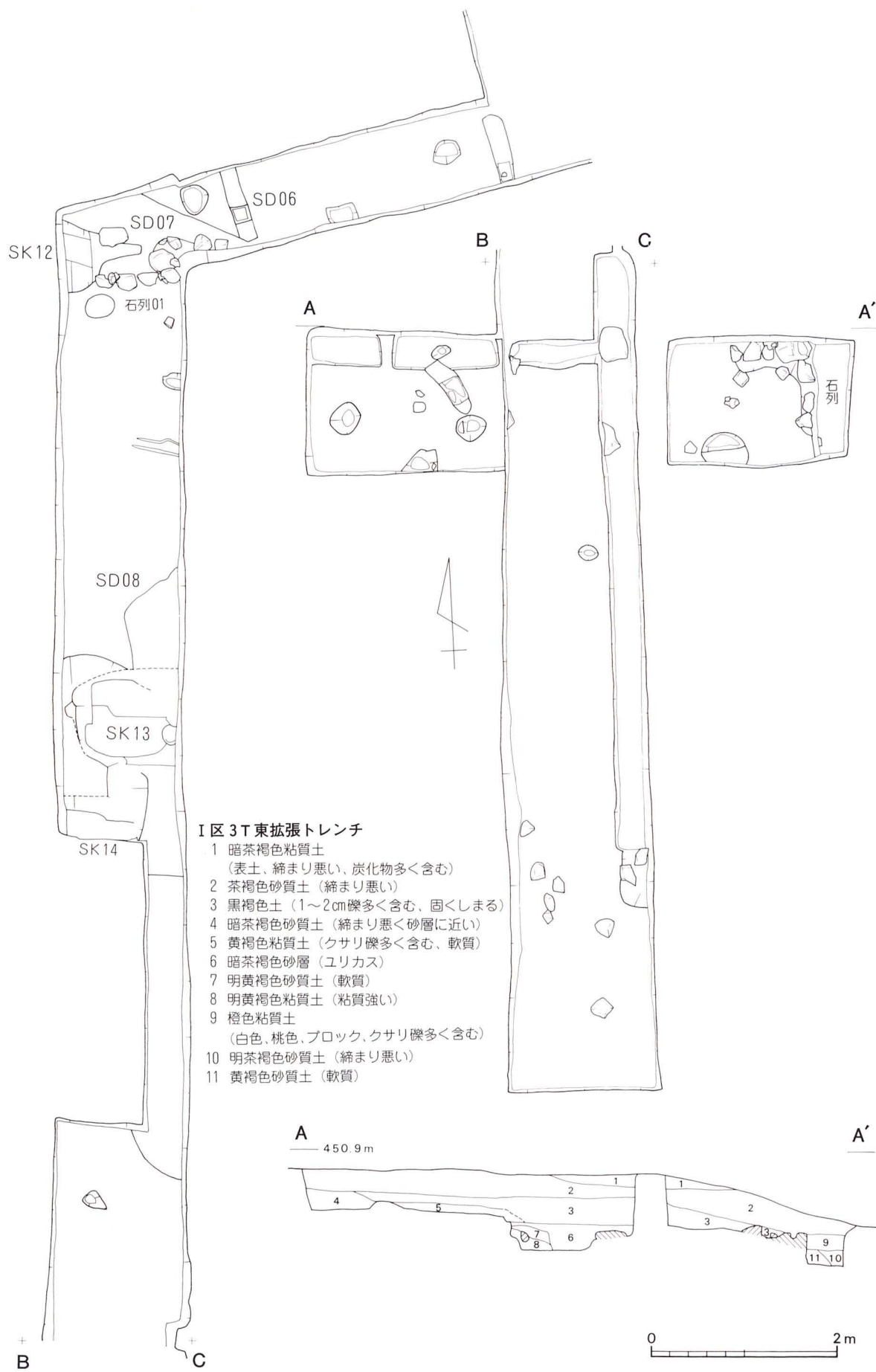


I区NW区第3面遺構配置図

I区NW区調査終了時実測図

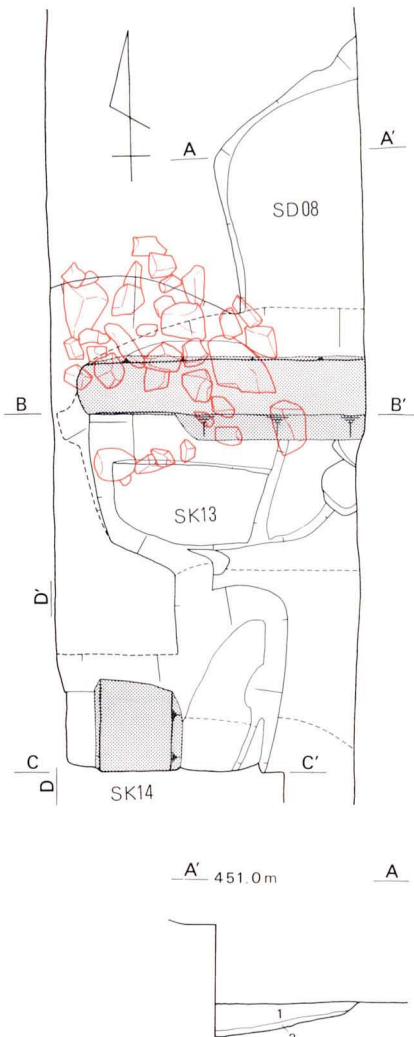


第15図 竹田地区I区遺構実測図④ (S=1/30 1/60)



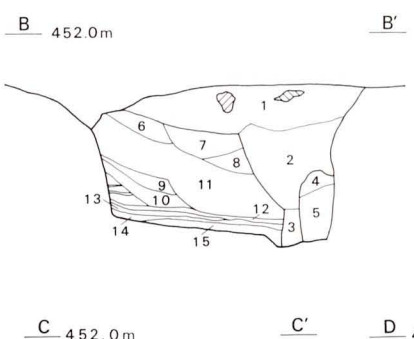
第16図 竹田地区 I区遺構実測図⑤ (S=1/60)



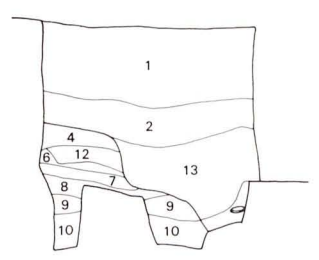


I区 3T 拡張部 SD08

- 1 茶褐色砂質土 (締まり良好、炭化物、クサリ礫少し含む)
- 2 黒褐色砂質土 (締まり良く固い、はがれるよう付着)

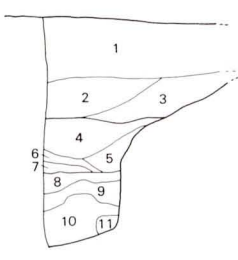


C 452.0m

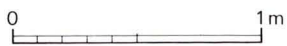


C 452.0m

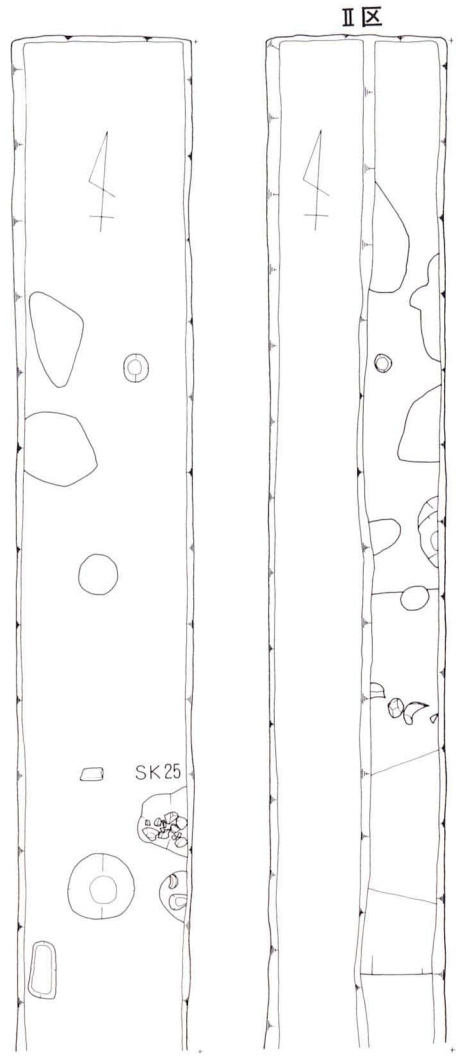
D 452.0m



3 T



第17図 竹田地区 I区 遺構実測図⑥ (S = 1/30)



第1遺構面

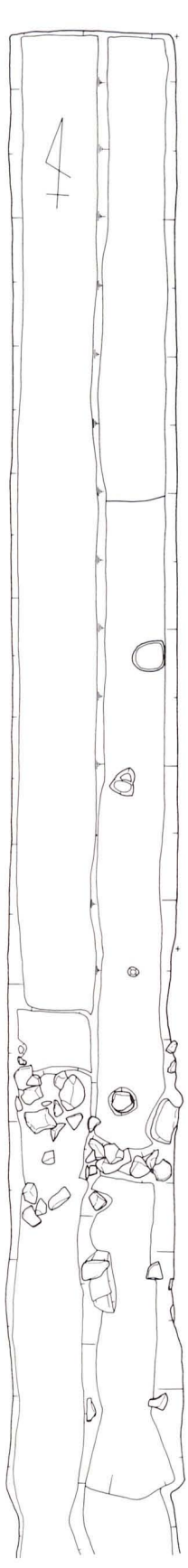
第2遺構面

I区 3T 土層図 SK13

- 1 暗茶褐色粘質土
- 2 茶褐色粘質土
- 3 茶褐色砂質土
- 4 暗黄褐色砂質土 (ユリカス)
- 5 黒褐色砂質土 (ユリカス)
- 6 茶褐色粘質土 (ほとんどシルト~粘土)
- 7 黒褐色土 (1~2cm、黄色砂礫)
- 8 茶褐色粘質土 (ほとんどシルト~粘土)
- 9 黄褐色粘質土 (均質)
- 10 黒褐色土
- 11 黒褐色粘質土・黄色粘質土・黒褐色土 (礫含む、互層)
- 12 黒褐色土 (マンガンバンド?)
- 13 黄褐色粘質土 (均質)
- 14 茶褐色土 (砂礫多く含む)
- 15 黄褐色粘質土

I区 3T 土層図 SK14・SD08

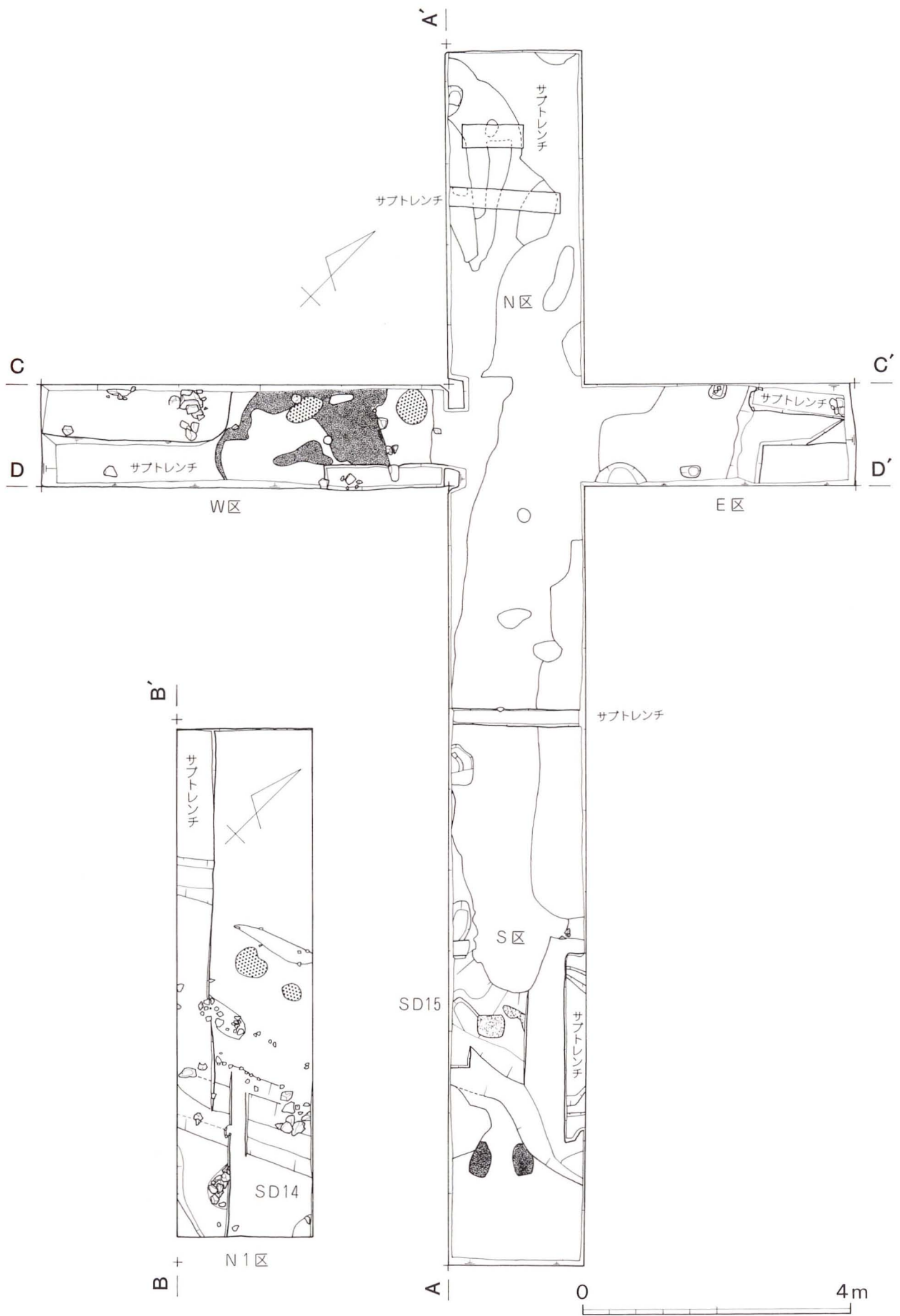
- 1 暗茶褐色粘質土 (表土)
- 2 茶褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 暗褐色粘質土
- 5 暗茶褐色粘質土 (黄味を帯白色粒子含む)
- 6 黒色粘質土
- 7 明茶褐色砂質土
- 8 黒色砂質土
- 9 暗茶褐色砂質土
- 10 黒褐色砂質土
- 11 茶褐色砂質土 (ブロック状に入る)
- 12 暗茶褐色砂質土
- 13 茶褐色粘質土



第3遺構面

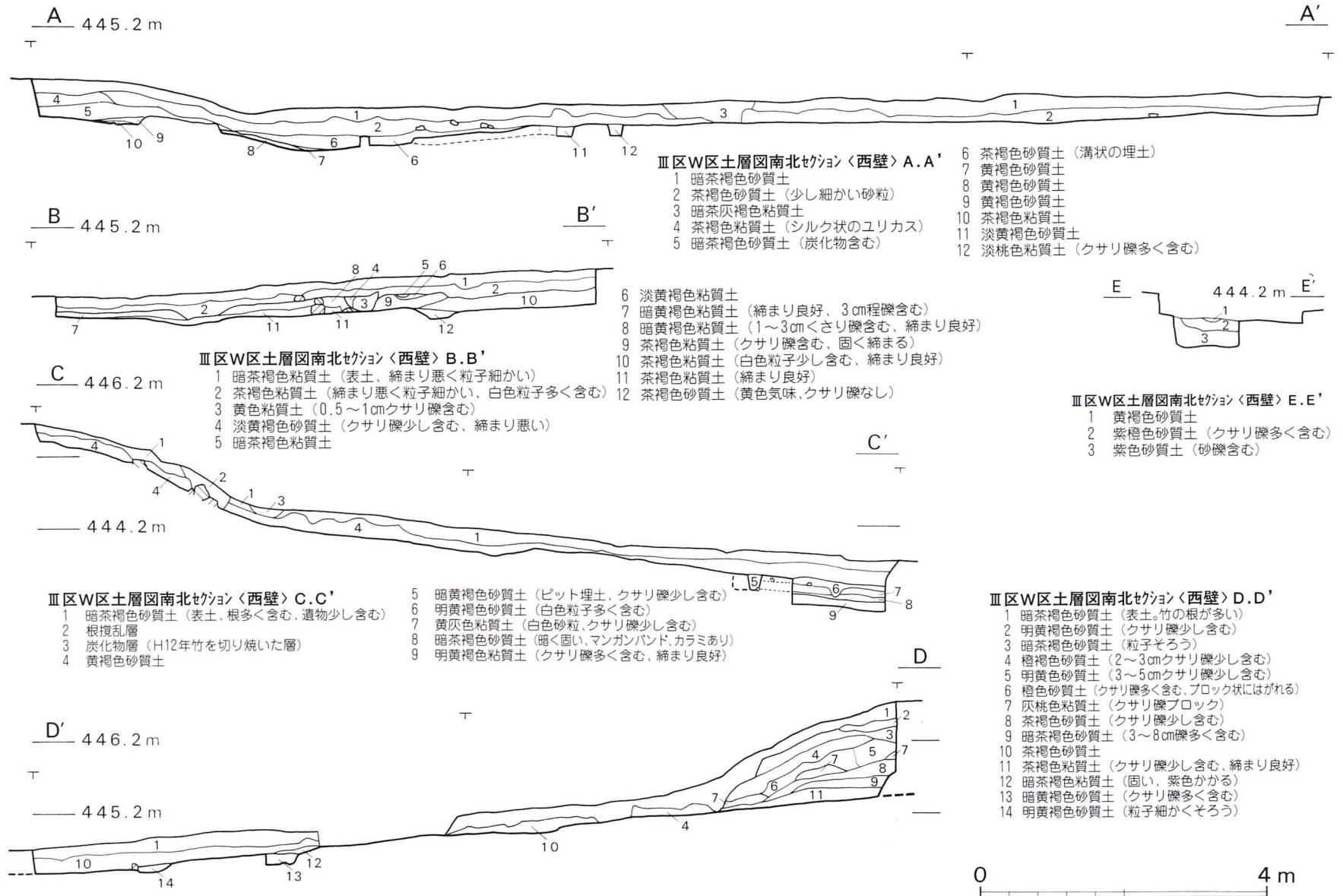


第18図 竹田地区 II区 遺構配置図 (S = 1/60)



第19図 竹田地区Ⅲ区遺構配置図 (S = 1/80)





第1面は集積遺構とピットを確認した。ピットは径30cmのものである。

#### 【SK25】

SK25は径52cm、深さ20cmの円形を呈し、中にはクサリ礫が堆積していた。壁面は固く、明茶褐色を呈している。

#### ②Ⅱ区第2面

幅60cmで下層を確認するためサブトレンチを設定した。遺構面は暗茶褐色砂上面であり、遺構面は固くなっていた。検出遺構はピットが2個、溝状遺構であった。溝は幅205cm、深さ29cmを測る。

#### ③Ⅱ区第3面

基盤層を確認するため第2面を掘り下げた。Ⅰ区と同様の黄褐色粘質土の基盤層は確認できず、淡紫色の基盤層を検出した。この基盤層は固いが、地山とは特定できない。遺構はピットが1基である。

#### (3)Ⅲ区の調査

竹田Ⅲ区は竹田Ⅰ区の南側の比高差約6mの平坦地である。トレンチは平坦地の中央に、植林を外して十字に設定した。Ⅲ区は東西12m、南北26mを測る平坦地であり、詳細に見ると、その南側を比高差60~70cm、西側で比高差120cm一段下げ、南北20m、東西7mの長方形に加工されている。その加工された平坦地の南端には東に向けて幅1.5mの溝状の窪地が存在する。

層序をみると、明黄褐色粘質土が遺構面になると観察された。しかし、盛土上に遺構面が形成されており、同一面であっても盛土の違いにより平面的な土色は部分的に異なる。遺構としてはピットや溝、被熱土壌を確認した。なお調査区が狭いためピットから建物跡を復原することは出来なかった。

W区は5~20cmほどの石を斜面から確認した。土留めのための可能性もある。一部立ち割り調査を行った結果、65cm下から遺構面を確認

した。Ⅲ区の西側の平坦地は盛土により形成されていることが分かった。下層の遺構面からは礎石の可能性のある上面が平坦な20cmの石が検出され、他に炭化物の散布が確認された。

S区は南側の平坦面との境から溝(SD15)が確認された。溝より南側には砂層(ユリカス)が堆積し、段差を生じる原因となっている。

#### (4)竹田地区の出土遺物

##### ①陶磁器

平成12、13年度に出土した陶磁器は表採した石見焼15点を含め、1718点である。しかし、平成11年度に出土した遺物については整理が終了しておらず、出土総数は増える。

以下、調査区ごとに分け説明する。

##### 【Ⅰ区第1面】

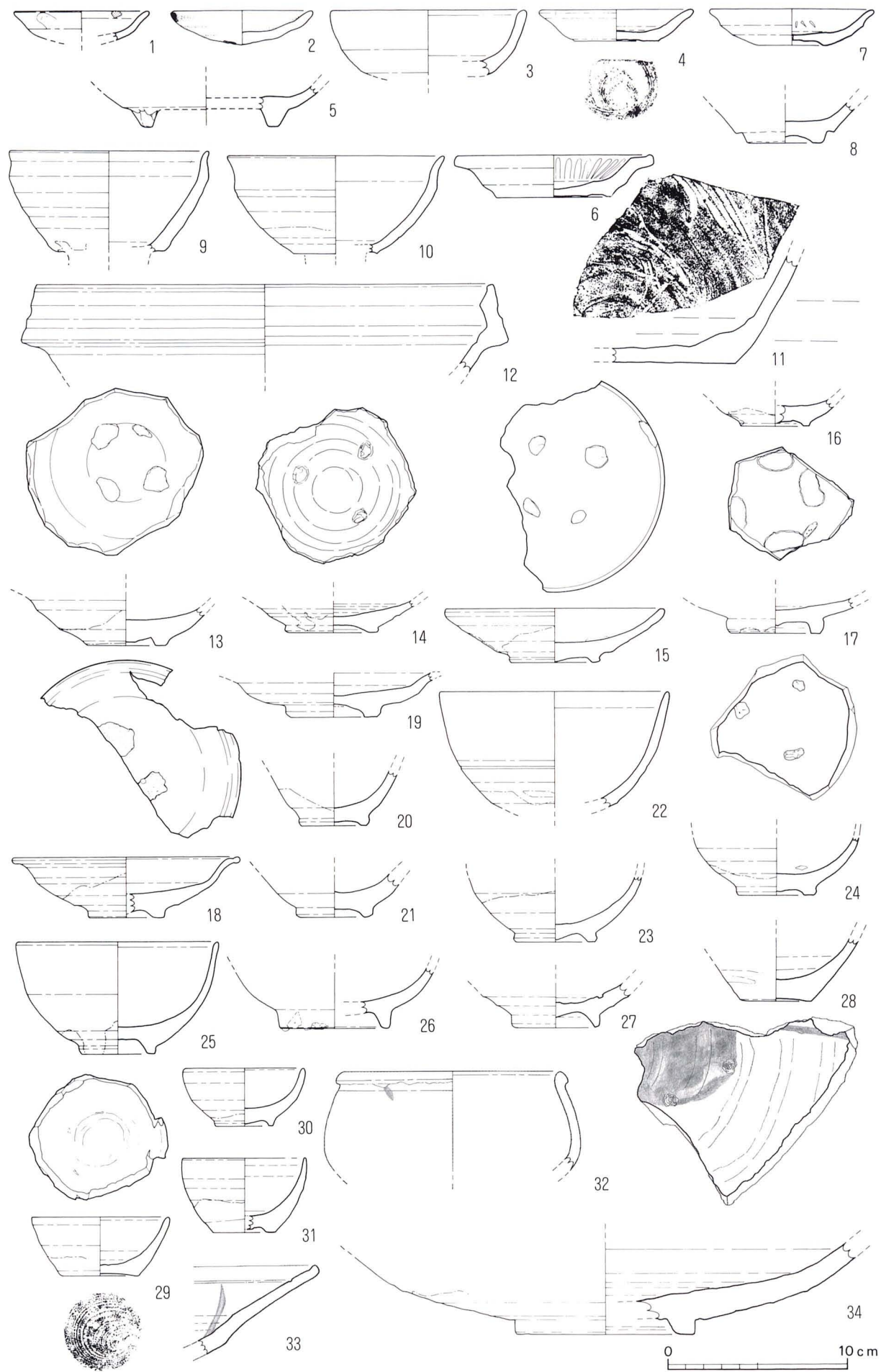
1~5は土師器である。2は浅い皿で、外面は丸みを持つ。3の器壁は厚く、口縁部端部には平坦面を持つ。

6~10は瀬戸美濃で、6~7は灰釉皿、8~10は鉄釉碗である。7の内面には刺突痕が残る。

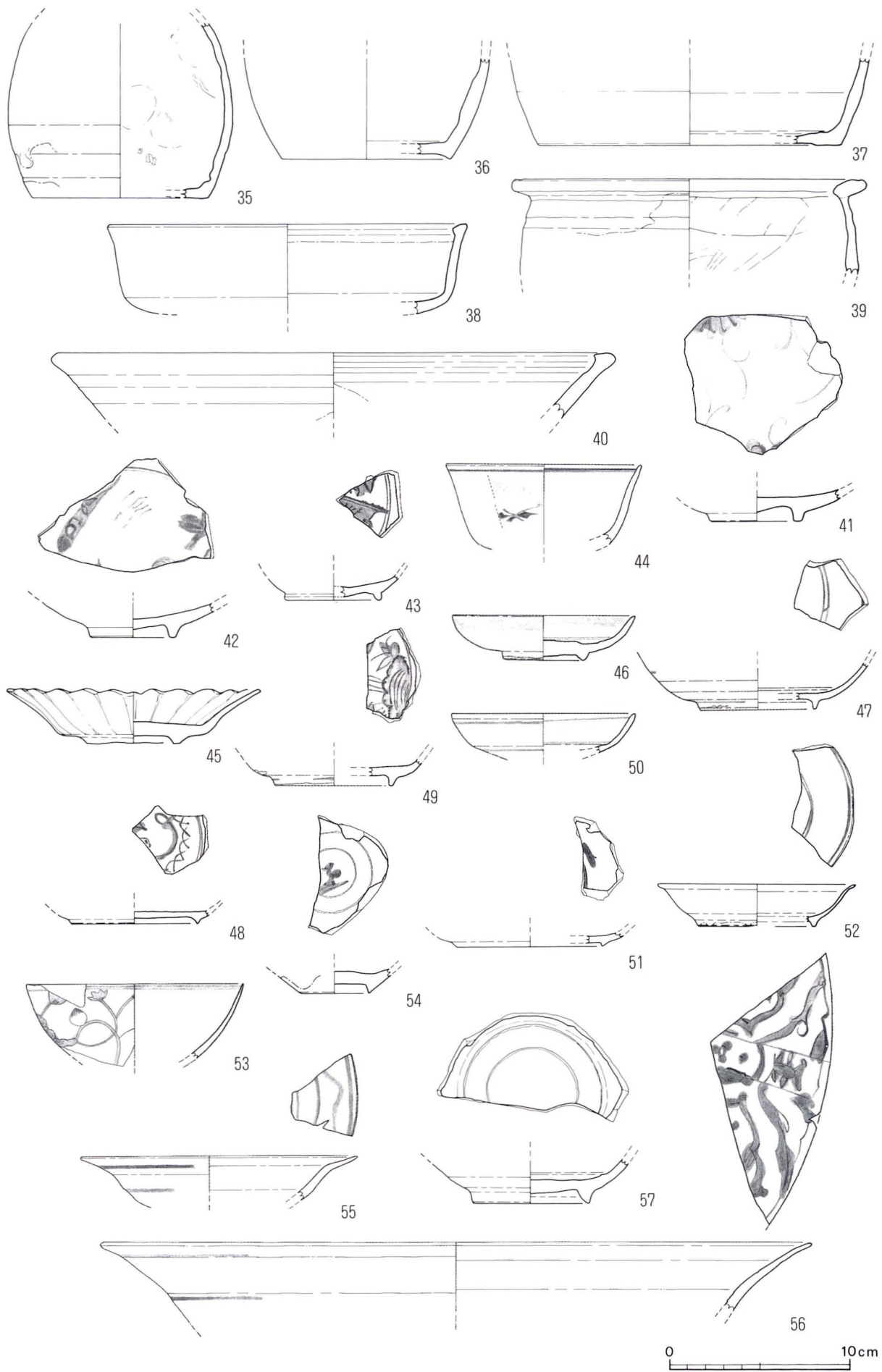
11、12は備前で、11は壺・甕である。底部内面には明確なナデ跡が残る。12は播鉢で、口縁部は上方に細くなり、断面は三角形を呈する。

13~40までは肥前系陶器である。13~15は底部内面に胎土目が、17~19は砂目が残る。16は被熱している。14は3個の胎土目で、24の碗も3個の胎土目が残る。20、23は藁灰釉が施され、20は岸岳窯の製品である。26の高台には砂が付着している。28~31は灰釉小坏である。32の鉢は口縁部を折り返して玉縁状にしている。33、34の鉢は鉄絵が施され、33は草文と思われる。33は内面に僅かな沈線がある。35~37は袋物で、35の体部と低部の境に砂が付着する。37の内外面は光沢のある釉が施される。38は火入れと思われ、口縁部が内側に肥厚する。39は口縁部以外に施釉されている。40は播鉢の口縁部と思われる。鉄釉が施され、内側に鋭く肥厚する。41~45は肥前系磁器である。



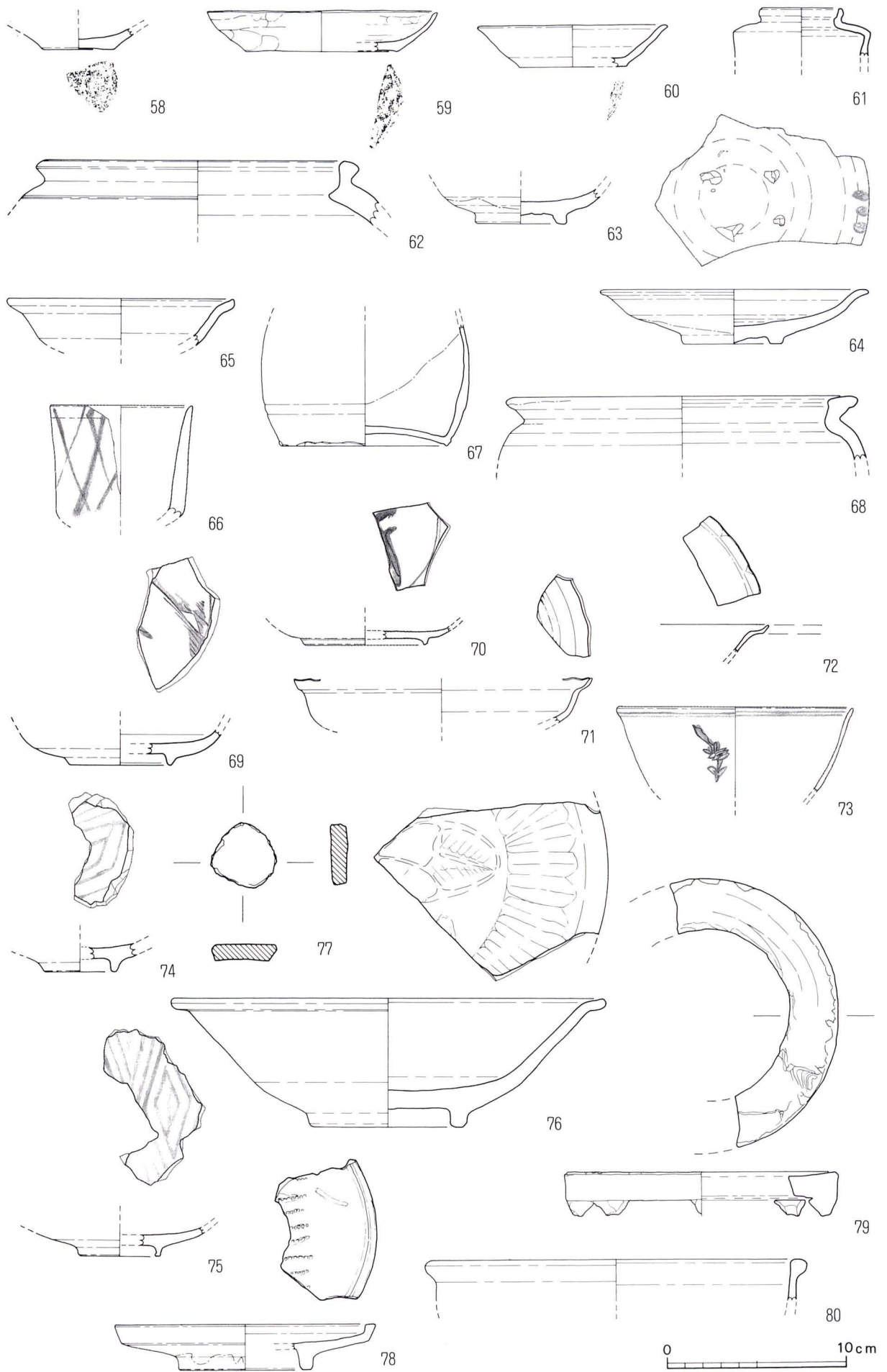


第21图 竹田地区出土遺物実測図① (S=1/3)



第22图 竹田地区出土遺物実測図② (S=1/3)





第23图 竹田地区出土遺物実測図③ (S=1/3)

45は型打ちである。

46～56は青花である。46～52は皿である。46、50の底部内面は円形に釉剥ぎされている。51、52の高台には砂が付着し、52の高台の一部は無釉である。53は外面に草文が細い線で描かれている碗である。54は碁笥底の小坏で、底部内面に円形の釉剥ぎがある。55はツバ皿で、内面には波状の線が描かれている。56は大皿である。

57は中国製の白磁で、内面が円形に釉が剥ぎ取られている。胎土は陶胎である。

#### 【I区3T】

58～60は土師器皿で、58底部糸切りで、体部と底部の境には明瞭なアクセントがある。59は指圧痕が明瞭である。

61～62は備前で、61の小壺は外反する口縁部で、しっかりした肩を持つ。62は短い口縁部で、内側が少し凹んでいる。

63～66・68・77は肥前系陶器で、64の皿には4個の胎土目がある。口縁部に3箇所の鉄絵が施されている。66は直口する碗で、外面には網の文様がある。77は肥前系陶器で造られた円盤状加工品である。径3.2cmを測る。

69は肥前系磁器皿で、底部内面には山水が描かれている。

67は褐釉陶器で器壁は薄く、チョコレート色を呈する。

70～73は青花である。71、72は口縁部が外反した後立ち上がり、さらに波状の口縁部を持つ。73は精製の碗で、口縁部に回線及び外面に僅かに文様が描かれている。

74～76は中国製青磁である。74、75は底部内面に幾何学文がある。釉は薄い緑色で、厚く施され、亀裂が多くはいる。76は大型の鉢で、内面に蓮弁のような葉が描かれている。被熱し黄褐色に変色している。78～80はI区から表採した石見焼である。

78は短い口縁部を持ち、内面には播り目がある。79は径15.2cmの円形のトチンである。粘土を貼り付けた足が5箇所に復元できる。80は口

縁部が外側に肥厚する鉢で、内外面に釉が施される。

#### 【I区第2面】

81は土師器皿で、内面には煤が付着している。

82、83は瀬戸美濃であり、82の灰釉皿は底部に印花文が施されている。83は折縁皿である。

84～88は肥前系陶器である。87は灰釉溝縁皿で、内面に砂目がある。88は大皿で、内面に胎土目がある。

89～91は青花皿である。89は内湾する口縁部を持ち、内面に草花文が細く描かれている。高台内は無釉である。90は内面を円形に釉を剥ぎ取り、剥ぎ取られた1箇所に目跡状の痕跡がある。91は高台に砂が付着し、底部内面に建物が描かれている。

92は内湾する小型の青磁碗で、口縁部外面に波状文が描かれている。

#### 【I区第3面】

調査面積も少なく、出土遺物も少ない。

93は土師器皿で、底部は糸切りである。94は瓦質土器で、外面に巴文が圧印されている。

95、96は青花で、95の小坏は直口の口縁部を持ち、器壁は薄い。96の皿は内面に獅子文、底部外面に「福」が描かれる。

#### 【I区第4面】

出土遺物は極端に少なくなる。

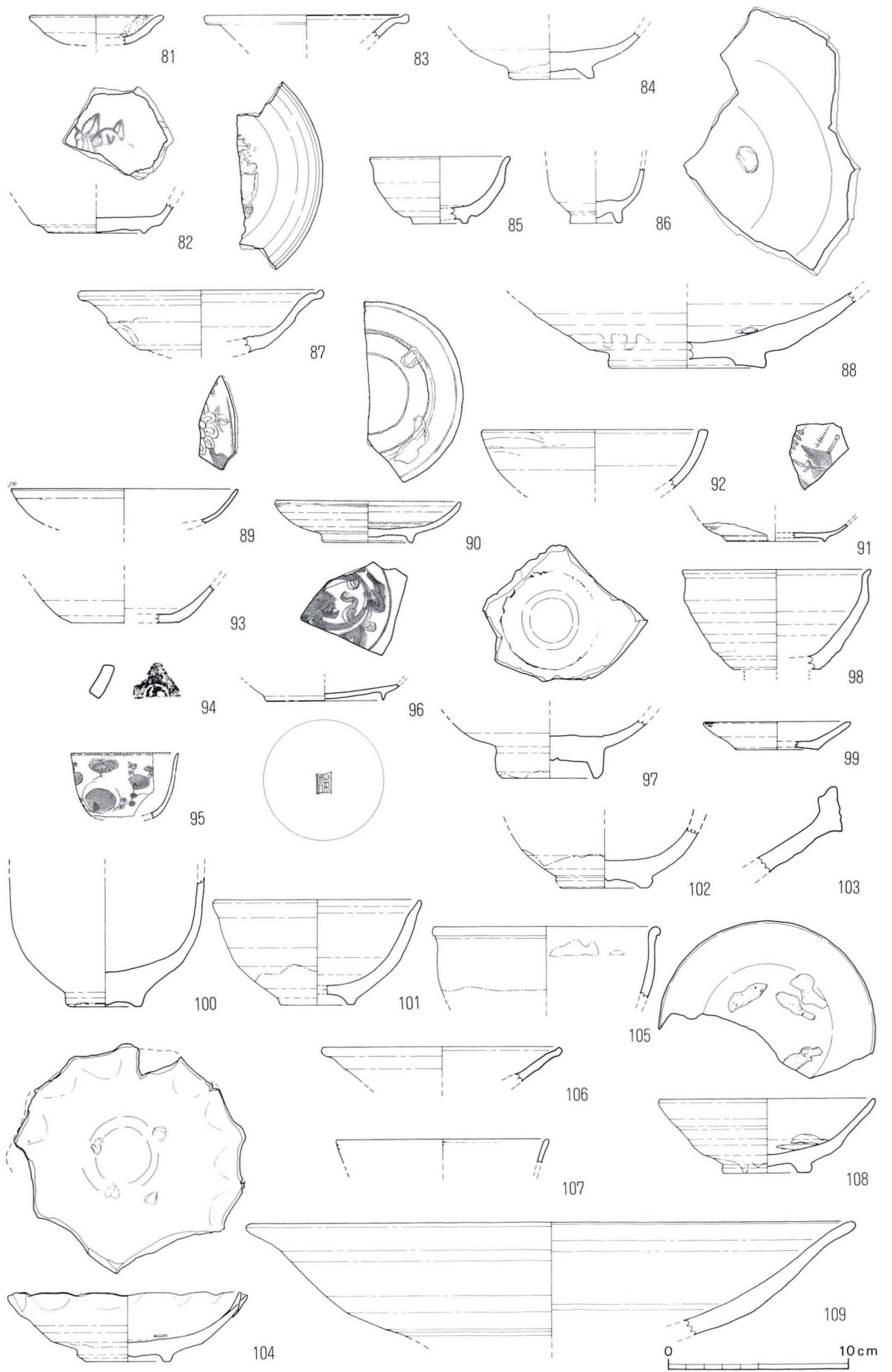
97は中国製青磁である。被熱しており、淡灰褐色を呈する。底部内面には円形にひびが入っている。高台内は無釉である。98は瀬戸美濃の鉄釉碗である。口縁部はくびれ、外反している。

#### 【I区遺構に伴う遺物】

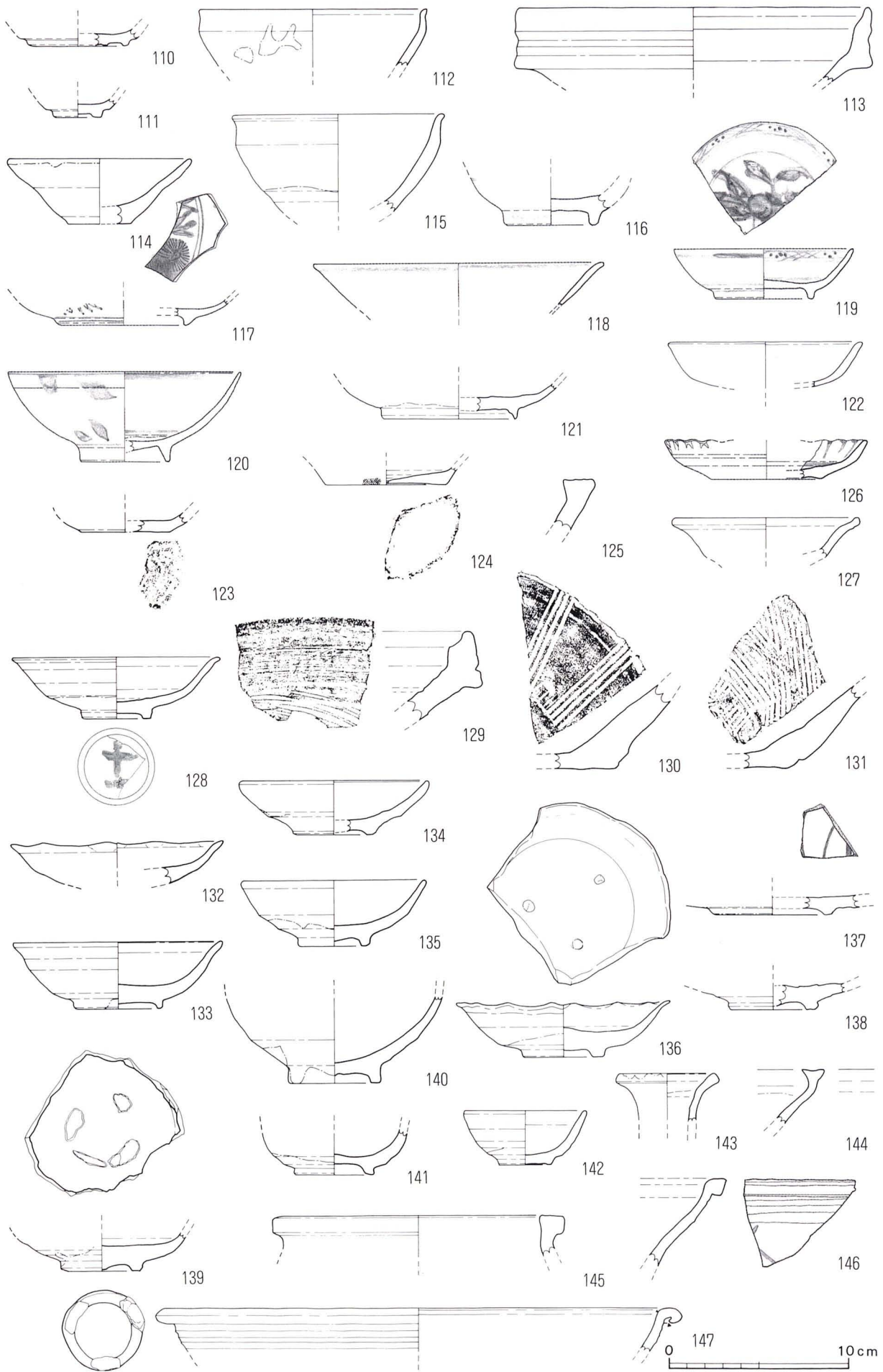
99はP8から出土した土師器皿である。底部は糸切りで、直線的に外反し、黒色付着物がある。

100～102はSD08から出土した。100、102は灰釉碗である。100は直口した口縁部をもち、被熱している。101は藁灰釉碗で、口縁部が僅かに外反する。底部は厚く、削り出しである。102は削り出しの底部を持ち、体部下半以下は



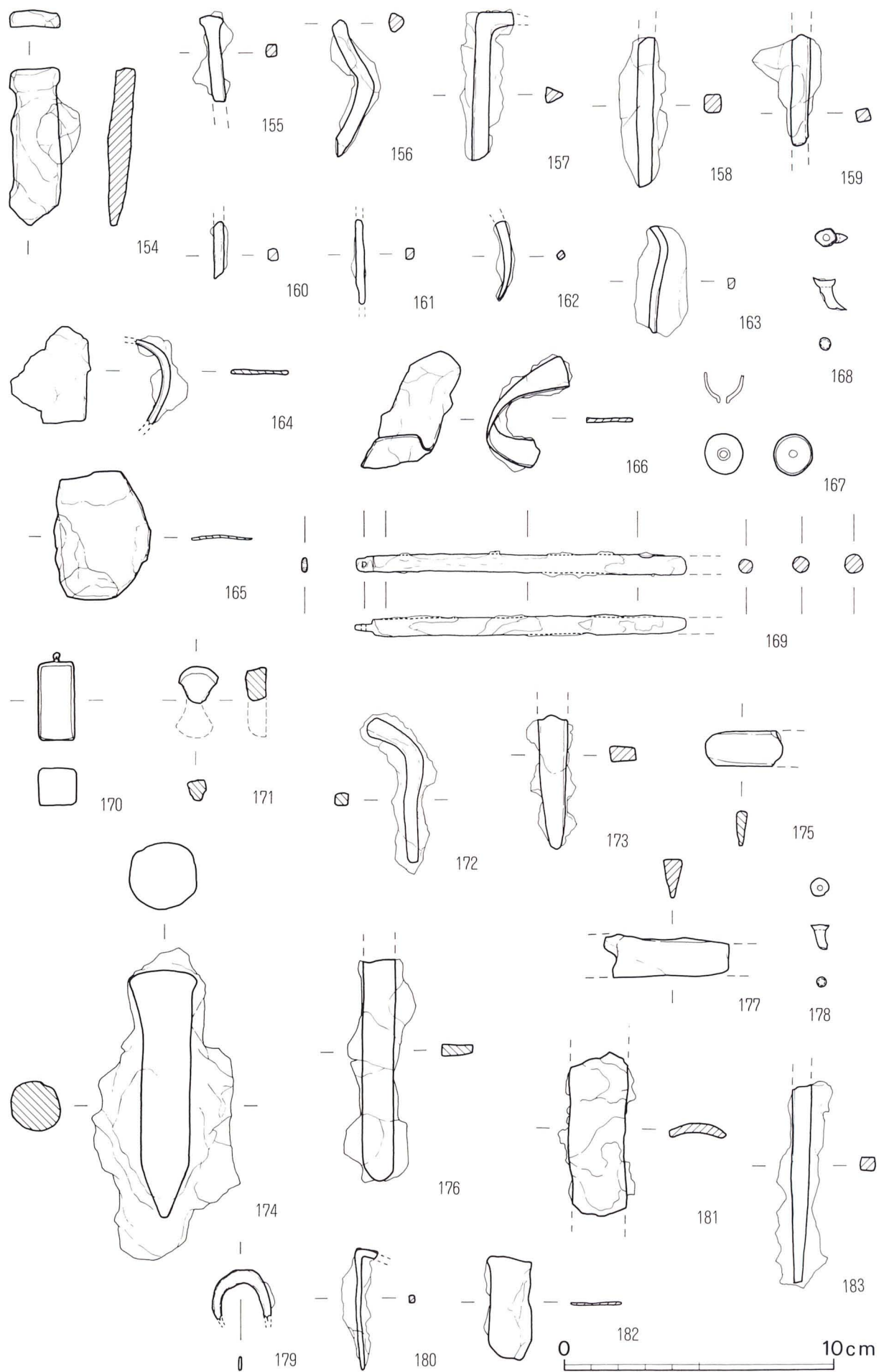


第24图 竹田地区出土遺物実測図④ (S=1/3)

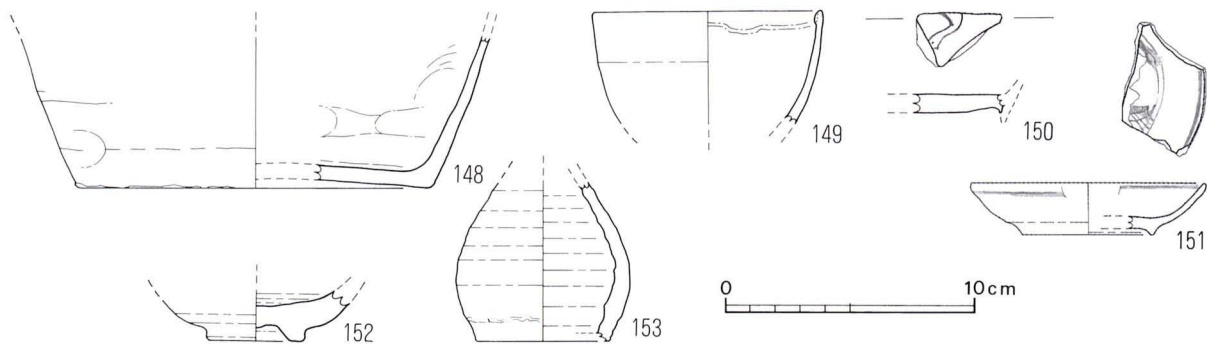


第25图 竹田地区出土遺物実測図⑤ (S=1/3)





第26图 竹田地区出土遺物実測図⑥ (S=1/2)



第27図 竹田地区出土遺物実測図⑦ (S = 1/3)

露胎である。

103、104はS K 24から出土した。103は片口を伴う備前播鉢であり、口縁部には段を有する。口縁部には5条の縦の沈線が入る。104は底部内面に4箇所の胎土目を持つ。体部から口縁部にかけて僅かに屈曲し、波状口縁である。

105、106の肥前系陶器はS K 19から出土した。105は灰釉の鉢あるいは碗である。106は口縁部が僅かに溝状に窪み、溝縁皿である。内面は一部釉がかからないところがある。

107はS K 22から出土した青花碗である。口縁部の内外面に2条の回線が施される。

108、109はS K 01から出土した肥前系陶器である。108はやや深い皿で、底部内面に砂目がある。109は大皿で、口縁部は緩やかに外反する。

【Ⅱ区】(第25図)

110～112は瀬戸美濃である。110は灰釉皿である。111は鉄釉の小碗の底部で、釉は全面にかかる。112は鉄釉碗で、口縁部が僅かに屈曲する。

113は備前播鉢で、口縁部には明確な段はない。

114は肥前系の灰釉皿である。深く、直線的に口縁部に至る。115は肥前系鉄釉碗である。

116は肥前系磁器碗であり、厚い高台を持つ。

117～120は青花である。117は器壁が薄く、コバルトも鮮明である。118は陶胎である。119は口縁部内面に四方襷文、底部に草文が施されている。120は陶胎の碗で、内面には回線が表

現されている。底部内外面は無釉である。

121は中国製白磁皿で、底部内面は円形釉剥ぎされている。高台は無釉で、段を有する。

【Ⅲ区】(第25図・第27図)

122～124は土師器皿である。122は体部から底部にかけて丸みを持ち、口縁部の方が厚みがある。122、123は底部糸切りである。124は黒色付着物がある。

125は瓦質土器で、播目を持つ。口縁部は内側に肥厚し、断面三角形を呈する。

126～128は瀬戸美濃の灰釉皿で、126は底部内面は無釉で、口縁部は輪花になる。127は口縁部を僅かに上方に摘み上げている。128はやや深みのある皿で、口縁部は僅かに外反している。幅のある高台をもち、高台内には「十一」と思われる墨書が残る。

129～131は備前播鉢である。129は厚みのある口縁部を持ち、明確な段がある。内面には斜め方向の播目が確認できる。130は4本1単位の播り目があり、内面は摩滅している。131は他の備前とはやや趣が違い、淡褐色で、播目が複雑に交差している。

132～148は肥前系陶器である。132～138は皿。132、136は波状口縁を持ち、体部と底部の境は僅かにアクセントがある。132の口縁部には黒色付着物がある。133の高台は無釉である。136の底部内面には3個の胎土目がある。137は平らな底部を持ち、鉄絵が描かれる。138、139には砂目があり、139には4個ある。143は藁灰釉の袋物の口縁部である。144は播鉢の口



縁部で、口縁部には鉄釉が施されている。146、147は鉢の口縁部で、146は断面方形、147は折り返した口縁部を持つ。148の袋物は上げ底で、青黄色釉がかかる。

149は肥前系磁器碗で、外面から内面上方にかけて緑釉、他は灰白釉が施される。

150は陶胎の青花皿である。底部内面には鳥が線刻され、その中をコバルトが埋められている。他は白色の釉がかかる。151の青花皿は僅かに内湾し、低い高台を持つ。

152の肥前系磁器は高台は露胎で、釉内に茶褐色の斑点が多い。

153が藁灰釉がかかった袋物で、底部付近は露胎である。

## ②金属製品

竹田地区からは多くの鉄製品が出土している。しかし、小片が多く、元の形態を窺うことができる資料が少ない。遺物の整理検討やX線撮影を行っていない資料もあり、限られた範囲ではあるが今回はできる限り実測した。

### 【I区第1面】(第26図)

154～166は鉄製品である。154はタガネと思われる、断面は扁平で、先端がやや細くなっている。頂部は幅0.7cmと広く、長方形を呈する。155、156、158～163は釘の可能性ある。155は頂部1.0cmとやや広がり、断面方形である。161、162は先端付近の破片と思われる。164～166は用途は不明である。164、166は幅1.7cmの板状の鉄板を曲げている。

167～171は銅製品である。167、168はキセルの雁首部である。167は径1.5cmを測る。168は径0.4cmを測る接合部であるが、残存状態は悪い。169は残存長12cmを測り、断面円形の棒状製品である。一方は欠損し形状は不明で、片方は扁平に加工され、径0.3cmの円形の穴が開く。重さを量る天秤の竿の可能性ある。170、171は重りで、170は直方体で、一辺が1.3cm、長さ3.2cm、重量38.9gである。頂部には吊り手が

付き、径0.1cmの穴が付く。171は蘭型分銅で、半分破損している。残存長1.4cm、重さ6.2cm、厚さ0.8cmを測る。

### 【I区第2面】(第26図)

172～174は鉄製品である。172は釘と思われ、断面方形を呈し、屈曲している。173はタガネあるいはノミ状工具と思われる。幅0.9cmを測り、断面は長方形を呈し、先端は細くなる。174はタガネと思われ、完形品である。断面円形を呈し、頂部はやや広がる。先端に向け先細る。176もタガネと思われる。断面は1.2×0.6cmの長方形である。

175、177は小柄で、177は棟幅0.6cmの断面三角形を呈する。178はキセルの雁首部である。径0.4cmを測る接合部であるが、残存状態は悪い。

### 【I区第3面】(第26図・第28図)

179～184は鉄製品である。179は扁平な断面でU字形を呈する。189は断面方形で、曲がっている。181は中央部が反る長方形の製品で、両端は破損している。182は大変薄く、厚さ0.1cmを測る。183は断面方形の釘と思われる。やや大きいので、ノミ状工具の可能性もある。184はS X 13の周辺から出土した。残存長31cmを測り、断面は0.6×0.5cmの方形である。片方に円環が造り出され、円環に別の素材が付いている。

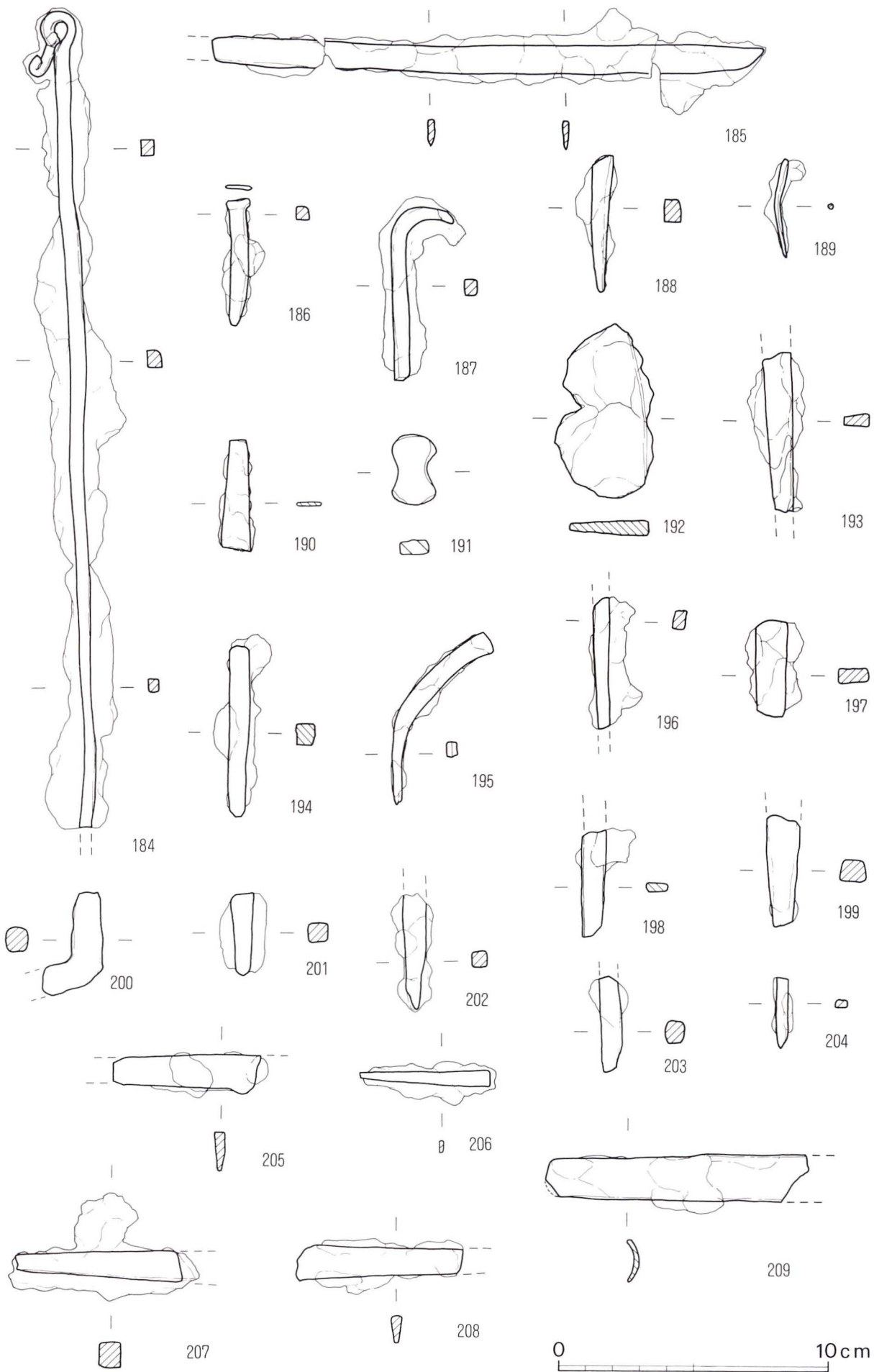
### 【I区遺構に伴うもの】(第28図)

185～189は鉄製品である。185は刀子で、残存長16.3cm、棟幅0.3cmを測る。186、188、189は断面方形の釘と思われる。186は頂部も残存していた。187は断面方形でL字状に曲がっている。

190は小柄で、薄く、厚さ0.2cmである。191は蘭型分銅で、長さ1.3cm、厚さ0.2cm、重さ1.1gを測る。

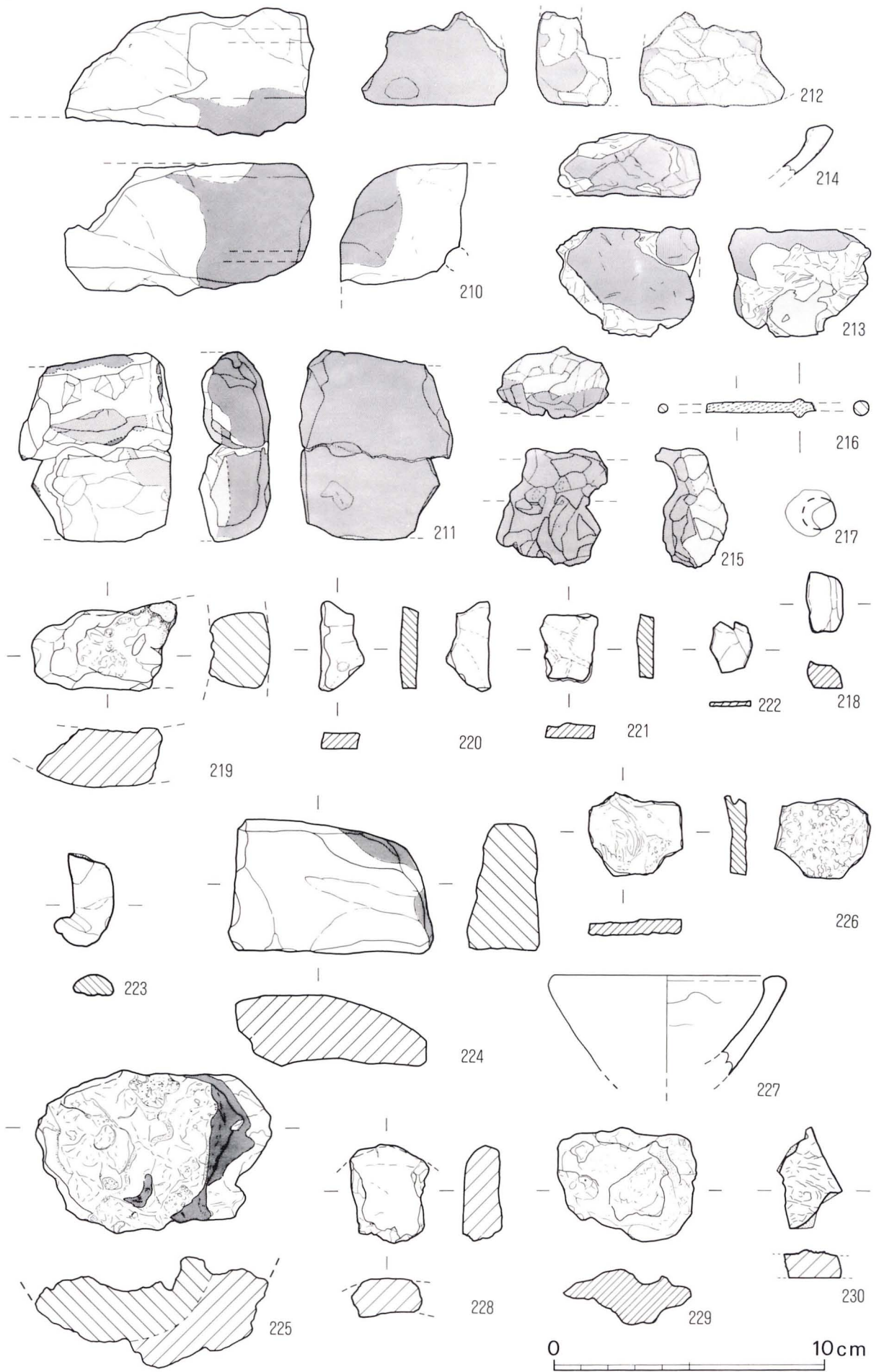
### 【III区】(第28図)

192～209は鉄製品である。192は片方がやや細くなる板状製品である。193は断面台形を呈

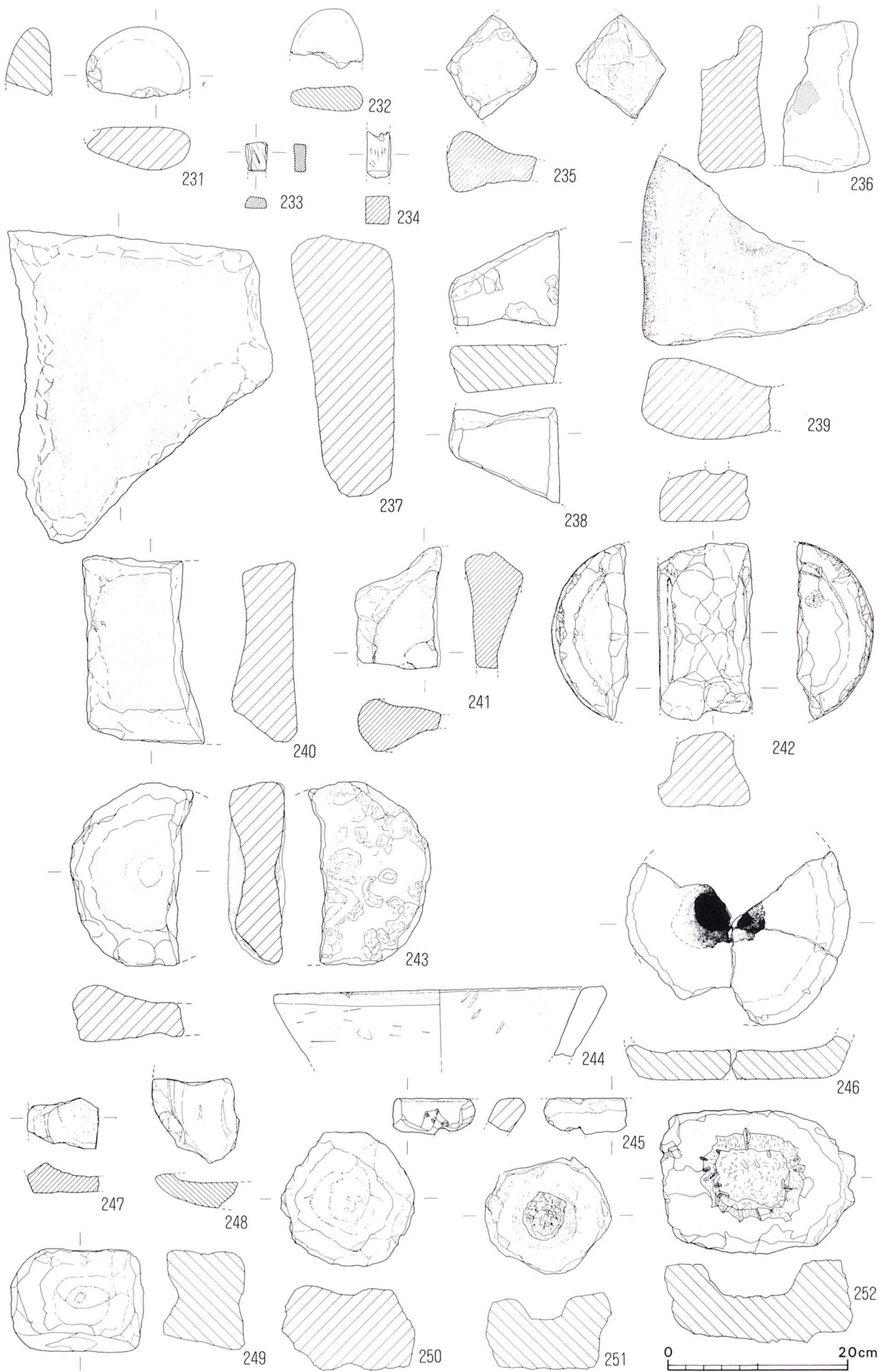


第28图 竹田地区出土遺物実測図⑧ (S=1/2)



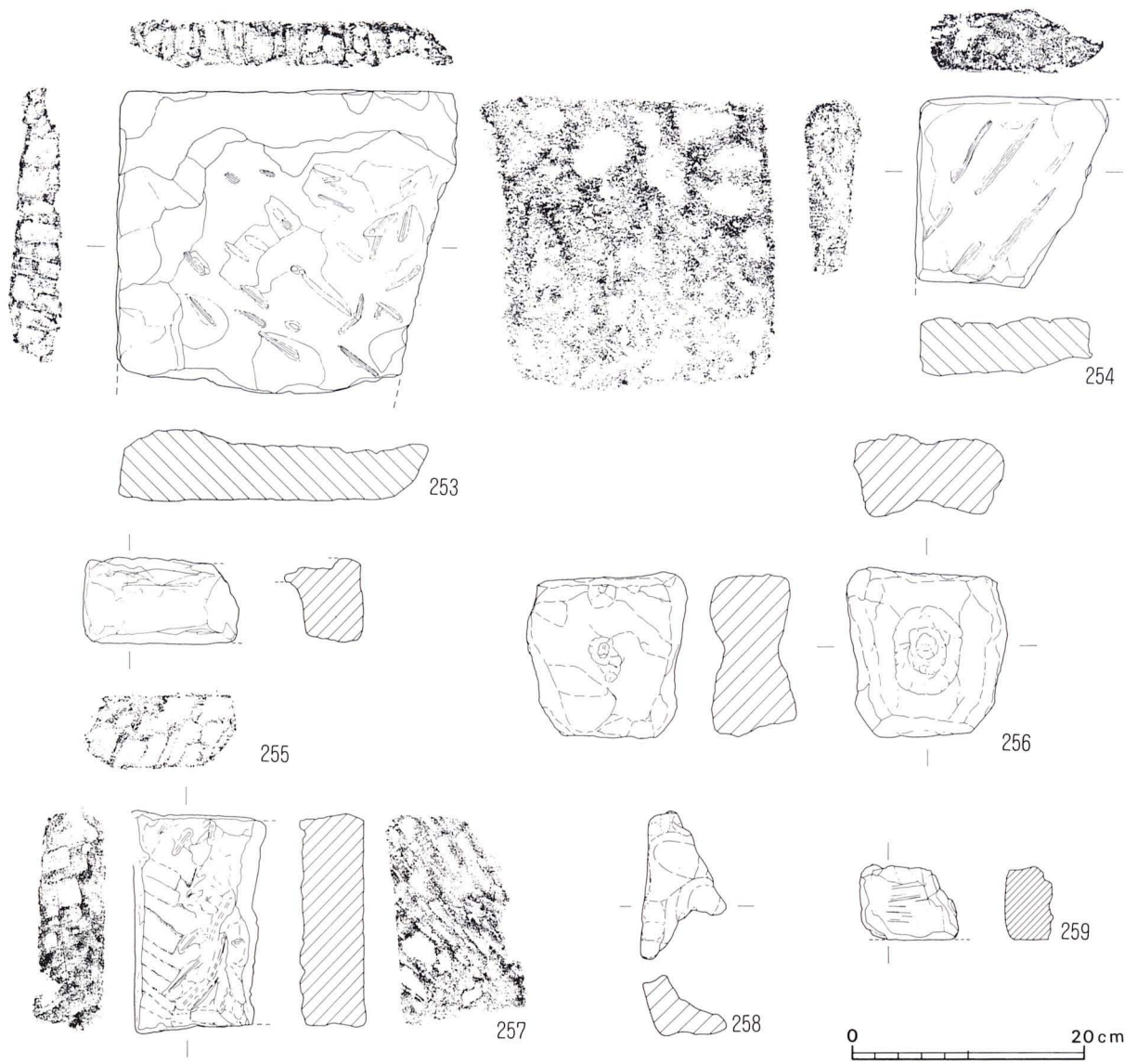


第29图 竹田地区出土遗物实测图⑨ (S=1/2)

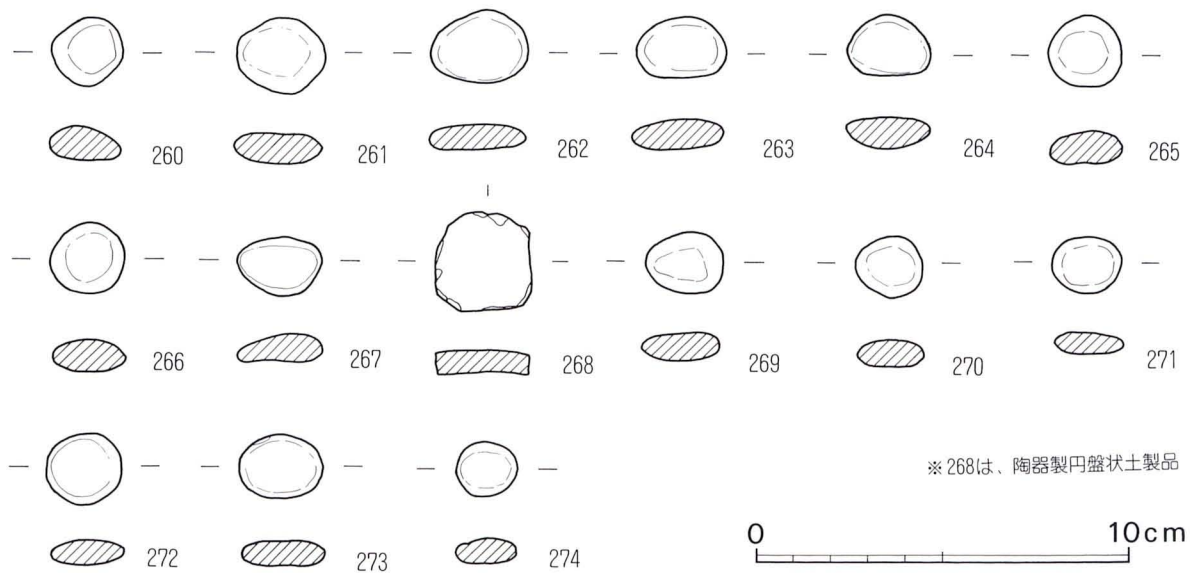


第30图 竹田地区石製品実測图① (S = 1/6)





第31図 竹田地区石製品実測図② (S = 1/6)



第32図 竹田地区基石・円盤状土製品実測図 (S = 1/2)

し、やや大型で、ノミ状工具の可能性もある。194～199、201～204、206は釘の可能性がありますが、199や203はノミ状工具の可能性もある。204は釘の先端部分である。

205は小柄である。柄の幅は1.5cmを測る。207は1.0×0.9cmの断面方形で、ノミ状工具の可能性もある。208は小柄で、棟幅0.5cmを測る。

209は断面U字形の薄い板状製品である。残存長は9.6cm、幅1.7cmを測る。

### ③土製品・カラミ・鉱石・ガラス製品

#### 【I区第1面】(第29図)

210～212は羽口である。すべて断面は方形であり、中央には円形の通風孔が開く。どれも残存状況は悪く、211の一辺の長さは6.9cmである。210は先端付近の破片で、外側は被熱している。213は方形の土製品である。厚さ2.2cmを測り、やや湾曲している。

214はルツボの口縁部の破片である。内側に肥厚し、炭化物が付着している。

215は炉壁と考えられる破片である。216はSK10付近から出土したガラス製品である。両端が破損しているが、1箇所やや厚くなっている。断面は円形で、厚さは最大で0.6cm、細い場所で0.3cmを測る。表面には螺旋状の文様があり、棒状のガラスを捻りながら作った跡と思われる。

217は径1.2cmの円形の金属である。分析の結果、「白目」の可能性もある。218、219は金属鉛である。219は外側が湾曲しており、金属鉛を生産したときの痕跡と思われる。

220～223はカラミである。竹田地区では少量であるが、板状のカラミが出土しており、幾つかの形状をしている。220、221は板状で、厚さ0.6cmとやや厚い。222は板状であるが、厚さ0.2cmと大変薄い。223は板状であるが、厚さ0.8cmを測り、流動して長方形に固まったと思われる。表面は滑らかである。

#### 【I区第2面】(第29図)

224は長方形の土製品である。幅4.9cm、長

さ7.5cm、厚さ2.6cmを測り、下方が厚くなる。湾曲し、内側は被熱している。225は炉壁にカラミがくっついた状態で出土した。カラミの底部は湾曲し、長径6.4cm、短径5.0cm、厚さ2.0cmを測り、半球状を呈する。226は板状のカラミで、厚さ0.5cmを測る。表面には皺状が残る、反対側には細かい凸凹である。凸凹の方が地面に付いた跡で、皺状の方は地面にとみられる。(鳥越俊行氏による)

227はルツボである。口径8.8cmを測り、口縁部が内側に肥厚する。内側の表面には金属分や被熱した跡が残る。

#### 【I区第3面】(第29図)

228は板状土製品である。残存状況は悪いが、湾曲した断面である。内側は被熱している。

#### 【III区】(第29図)

229は長径5.1cm、短径3.2cm、厚さ2.0cmの半球状を呈する。230は板状のカラミで、厚さ1.1cmを測る。片面は皺が残る。

### ④石製品

#### 【I区】(第30図・第31図)

231、232は擦石で、両方片側が欠損している。扁平な石を使用し、表面全体に使用痕がある。233、234は砥石である。233は4面使用し、234は3面使用されている。

235～240は「要石」である。一方あるいは二方が使用され、窪んでいる。材質は安山岩が多い。236は中央が凹み、表面に金属分が付着する。237は2面の土間に埋められていたもので、厚さ11cmを測り、片面が窪んでいる。241～243は凝灰岩の白で、241、243は両面加工され、中央部が薄くなっている。242は回転臼で円形を呈する。径20.7cm、厚さ10.0cmを測り、上面には幅2.5cmの縁が付く。壁面には円形の穴が穿たれ、取っ手を差し込む穴と思われる。

244～248は凝灰岩の石鉢である。244、245の口縁部は端部が平坦で厚さは2.9cmを測る。246は底部の破片で、中央部に被熱し黒く変色している。249～252は窪み石である。249は立



方体の二方向が僅かに窪んでいる。250の平面形は円形あるいは方形であり、二方向窪んでいる。251、252は表採資料であり、時期は不明である。251はいびつな円形をし、片方に深さ2.2cm、径6.5cmの円形の穴が穿たれている。穴の表面は摩滅している。252は長さ21.2cm、幅15.6cm、厚さ5.0cmの直方体の石材の一面に長さ11.2cm、幅9.0cm、深さ3.5cmの穴を穿っている。穴の壁面には幅2.3cmのノミ痕が観察される。石材は石英安山岩である。

253～255はS D 08から出土した凝灰岩製品である。253は幅25.7cm、長さ28.7cm、厚さ6.1cm、を測り、一番外側には幅5～6cmの縁が付いていた。表面には幅0.6cmの刺突痕、幅0.5cmのノミ痕がある。254は厚さ5.5cmの板状石製品である。表面には幅0.8cmの刺突痕、壁面には幅0.5cmのノミ痕がある。255はL字状の石製品で、表面には幅2.0cmのノミ痕が残る。

259は凝灰岩製の用途不明品である。現存の2面には擦痕が残る。

【Ⅲ区】(第31図)

256の窪み石は両面が凹み、片方は径13.9cm、深さ2.2cmの範囲で窪んでいる。257は幅18.85cm、厚さ5.5cmを測る板状の凝灰岩製品である。表面には幅2.0cmのノミ痕が残る。258は石鉢の破片である。凝灰岩製である。

その他、各地区から14点の小石が出土している(第32図)。260～273はやや扁平で、丸みをもつ。多くは灰色系を呈であるが、緑灰色や黄褐色を呈する個体もある。直径は最大2.6cm、最小1.7cm、平均2.1cm、厚さは最大0.9cm、最小0.6cm、平均0.8cm、重さは最大5.3g、最小2.3g、平均4.1gである。用途は不明であるが、基石として使用されたものも含まれる可能性がある。

268は円盤状土製品である。

表6 竹田地区出土遺物観察表(陶磁器)

挿図 番号	実測 番号	区別	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調	成形・調整・文様	備考
						口径	器高	底径			
1	217	I区	NW区No110	土師器	皿	(7.4)			(外)暗灰色 (内)黒褐色	油痕	灯明皿
2	170	I区	北トレンチ	土師器	皿	(7.7)	1.9		黒褐色(煤状)	油痕	反転復元
3	201	I区	NW区49	土師器	皿	(10.7)			淡肌色		反転復元
4	148	I区	表土中	土師器	皿	(8.3)	1.7	(4.7)	明肌色	底部左回りの糸切り	反転復元
5	205	I区	NE区第1面No17	土師器	香炉			7.5	黄褐色		反転復元
6	7	I区	北トレンチ	瀬戸・美濃	灰釉皿	(11.0)	2.3	(6.4)	淡緑色		反転復元 折縁皿・ 大窯4段階前半
7	69	I区	NW区第1面No105	瀬戸・美濃	灰釉皿	9.2	2.0	3.6	釉：淡緑色	底部見込み無釉	反転復元
8	28	I区	NW区拡張部第1面	瀬戸・美濃	鉄釉碗			4.2	明黄白色土		
9	172	I区	北トレンチ第2面 下造成土中	瀬戸・美濃	鉄釉碗	(11.0)			黒褐色		反転復元
10	84	I区	SW区	瀬戸・美濃	鉄釉碗	(12.0)			釉：黒茶褐色		反転復元
11	19	I区	NW区拡張部第1面 No7. 第1面No33	備前系陶器	壺・甕				(外)赤紫色 (内)茶褐色		反転復元
12	131	I区	No108	備前系陶器	播鉢	(25.4)			(外)黒灰色 (内)赤茶褐色		反転復元
13	79	I区	NW区第1面No3	肥前系陶器	灰釉皿			4.6	茶褐色	砂目・削り高台	
14	89	I区	NE区第1面No19	肥前系陶器	灰釉皿			4.9	(外)赤褐色 (内)緑灰色	胎土目	
15	44	I区	北トレンチ	肥前系陶器	灰釉皿	(12.0)	3.0	4.8	釉：淡緑灰色	胎土目・削り高台	反転復元
16	27	I区	NW区第1面No57	肥前系陶器	灰釉碗			(3.8)	淡白色		反転復元
17	77	I区	38	肥前系陶器	灰釉皿			(5.0)	白灰色	砂目	反転復元 1610～1630年代
18	17	I区	NE区No2	肥前系陶器	灰釉皿	(12.4)	3.3	(4.2)	釉：淡緑色	溝縁皿・削り高台 砂目	反転復元
19	20	I区	NW区第1面No3	肥前系陶器	灰釉皿			(4.8)	淡緑灰色	砂目	反転復元
20	269	I区	141	肥前系陶器	藁灰釉碗			(4.0)	黄灰色		反転復元 岸岳
21	22	I区	NE区第1面No72	肥前系陶器	灰釉碗			(4.2)	内面：淡緑茶色		反転復元
22	75	I区	367. 449	肥前系陶器	碗	(12.7)			釉：灰茶褐色	断面漆付着	反転復元
23	110	I区	NE区No28	肥前系陶器	藁灰釉碗			4.4	釉：灰白色	三日月高台	反転復元 1590～1600年代
24	100	I区	北トレンチNo50	肥前系陶器	灰釉碗			4.1	釉：濃灰色	胎土目	反転復元
25	96	I区	廢土中	肥前系陶器	灰釉碗	(11.4)	6.2	4.2	釉：淡緑色		反転復元
26	181	I区	463	肥前系陶器	碗				釉：淡緑色	砂目	反転復元

挿図 番号	実測 番号	区別	出土地点	種別	器種	法量 (cm)			色調	成形・調整・文様	備考
						口径	器高	底径			
27	21	I区	NW区第1面No70	肥前系陶器	灰釉碗			(4.5)	(外)淡黄色 (内)灰白色	三日月高台	反転復元
28	112	I区	236	肥前系陶器	灰釉小坏			4.0	(外)淡茶褐色 (内)灰釉		1600~1610年
29	134	I区	NW区西壁 セクション図No2	肥前系陶器	灰釉小坏	(7.6)	3.3	4.2	緑灰色	底部左回り糸切	反転復元
30	132	I区	廃土中	肥前系陶器	灰釉小坏	(6.6)	3.2	(3.6)	釉:暗緑色	削り高台	反転復元
31	95	I区	NE区第1面No34	肥前系陶器	灰釉小坏	(6.9)	4.1	(3.4)	薄灰色		反転復元
32	182	I区	No100	肥前系陶器	鉢	(12.1)			釉:淡灰緑色		反転復元
33	68	I区	NW区第1面下No5	肥前系陶器	灰釉大皿				施釉:淡灰茶褐色	絵唐津(草文)	
34	141	I区	SE区表土	肥前系陶器	大皿			(10.0)	(外)緑灰色 (内)濃茶褐色	絵唐津・胎土目	反転復元
35	146	I区	NE区第1面No10	肥前系陶器	鉄釉袋物			(9.6)	(外)黒褐色 (内)黄灰色	(外)鉄釉・あて木痕	反転復元
36	23	I区	NW区第1面No5	肥前系陶器	鉄釉袋物			(9.3)	外面:茶褐色		反転復元
37	149	I区	458	肥前系陶器	鉄釉袋物			(16.6)	施釉:緑灰色		反転復元
38	6	I区	NE3.7	肥前系陶器	灰釉火入	(19.2)			淡灰緑色・淡茶褐色		反転復元 小物成1 号窯に類似品
39	143	I区	NE区	肥前系陶器	灰釉壺	(19.8)			黒褐色		反転復元
40	81	I区	西第7トレンチ 上手内第1層	肥前系陶器	播鉢	(34.0)			茶褐色		反転復元
41	90	I区	NE区422	肥前系磁器	皿			5.1	釉:透明釉	高台に砂付着	反転復元
42	94	I区	473	肥前系磁器	皿			(4.7)	釉:透明釉	高台に砂付着 砂目	
43	122	I区	125	肥前系磁器	皿			(5.4)	釉:透明釉	染付	反転復元
44	124	I区	表土	肥前系磁器	碗	(10.4)			釉:淡灰白色	染付	反転復元
45	78	I区	北トレンチ 北斜面造成土中	肥前系磁器	皿	(14.0)	3.0	(5.0)	白灰色 釉:透明釉	菊花文・型押し成形・ 砂目	反転復元 1630~40年代
46	72	I区	NE区第1面No15	青花	皿	(10.2)	2.5	(4.3)	釉:淡青灰色	1~2条の界線	反転復元
47	80	I区	NE424	青花	皿			(6.4)	青白色		反転復元
48	125	I区	NE区397	青花	皿			(7.0)	釉:透明釉	高台に砂付着	反転復元
49	82	I区	中央土手トレンチ	青花	皿			(6.4)	乳白色	高台に砂付着	反転復元
50	144	I区	北トレンチ第2面下 造成土中	青花	皿	(10.2)			釉:灰白色 染付:コバルト	蛇の目積み痕(釉剥 ぎ痕)	反転復元・陶胎
51	183	I区	NW区北壁セクシ ョン図 No1	青花	皿			(7.8)	釉:透明釉	高台付近砂付着	反転復元
52	133	I区	地下北斜面造成土中	青花	皿	(11.0)	2.3	(6.5)	釉:透明釉		反転復元
53	129	I区	266	青花	碗	(12.0)			釉:透明釉		反転復元
54	119	I区	北トレンチ北斜面 造成土中	青花	小坏			(3.9)	釉:透明釉	蛇の目釉剥ぎ	反転復元
55	208	I区	東トレンチ南第1層 表土	青花	皿	(15.3)			淡灰色		反転復元
56	138	I区	北トレンチ北斜面 造成土中	青花	大皿	(40.0)			釉:透明釉		反転復元
57	142	I区	北トレンチ	白磁	皿			6.4	釉:乳白色の長石釉	(内)蛇ノ目積み痕 砂付着・削り高台	反転復元
58	207	I区	第3トレンチ廃土中	土師器	皿			(4.0)		底部糸切り	反転復元
59	169	I区	第3トレンチ拡張 第1層	土師器	皿	(12.8)	2.2	(8.4)	濃灰黒色	糸切り・京都系 指圧痕	反転復元
60	187	I区	第3トレンチ第1層	土師器	皿	(10.4)	2.3	(6.0)	淡肌色	底部糸切り	反転復元
61	15	I区	第3トレンチ第1層 表土	備前系陶器	小壺	(4.4)			(外)茶褐色 (内)明茶褐色		反転復元
62	215	I区	第3トレンチ廃土中	備前系陶器	壺	(18.0)			茶褐色		反転復元
63	9	I区	第3トレンチ石列8	肥前系陶器	灰釉皿			(5.0)	釉:淡緑灰色	削り高台	反転復元 1590~1630年
64	14	I区	第3トレンチ第1層 表土	肥前系陶器	灰釉皿	(15.0)	3.0	5.5	オリーブ色	胎土目・削り高台	反転復元
65	152	I区	第3トレンチ石列2	肥前系陶器	灰釉皿	(12.5)			釉:淡緑灰色	溝縁皿	反転復元
66	123	I区	第3トレンチ第2層 No21	肥前系陶器	灰釉碗	(8.0)			濃灰色	絵唐津	反転復元
67	8	I区	第3トレンチNo51	褐釉陶器	瓶(袋)			(9.1)	釉:(外)濃緑灰褐色 (内)チョコレート色	一部タタキ目 底部内面付着物	反転復元 1590~1600年
68	214	I区	第3トレンチ第1層 表土	肥前系陶器	壺	(18.5)			(外)緑灰色 (内)茶褐色	口縁に重ね積み痕	反転復元
69	91	I区	第3トレンチ第1層 表土	肥前系磁器	皿			(5.6)	(外)淡白色 (内)染付		反転復元
70	121	I区	第3トレンチ廃土中	青花	皿			(7.0)	釉:透明釉	高台付近砂付着	反転復元
71	229	I区	第3トレンチNo29	青花	皿	(14.6)			釉:透明釉		反転復元
72	126	I区	第3トレンチ第1遺 構面No14	青花	皿	(12.2)			淡黄白色		反転復元
73	74	I区	第3トレンチ 土間~表土の間	青花	碗	(15.0)			釉:透明釉	2条の界線	反転復元



挿図 番号	実測 番号	区別	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調	成形・調整・文様	備考
						口径	器高	底径			
74	199	I区	第3トレンチ第1層 表土	青磁	皿			(4.0)	淡青緑色		反転復元
75	198	I区	第3トレンチ第1遺 構面No.9	青磁	皿			(4.6)	淡青緑色	砂目	反転復元
76	43	I区	第3東トレンチNo.1	青磁	大皿	(24.2)	7.1	(8.4)	釉:(外)淡黄茶褐色 (内)青緑色	内側文様	反転復元
77	270	I区	第3トレンチ第1層 表土	陶器	円盤状加工 品の可能性				(表)茶褐色 (裏)淡茶褐色		最大径3.5cm 最大厚0.95cm
78	109	I区	第3トレンチ廃土中	石見焼	灰釉卸皿	(16.5)	2.5	(7.4)	明灰黄	卸目痕(現存7列)	反転復元
79	130	I区	西段井戸横表土中	陶製	足付き輪ト チン	外径 (15.2)	2.4	内径 (9.7)		外径:15.2 内径:9.7 足と本体別物(足7本)	
80	188	I区	表採	石見焼	鉢	(10.3)					反転復元
81	185	I区	NW区第2面No.61	土師器	皿	(7.2)				すず付着	反転復元
82	111	I区	NE区第2面上	瀬戸・美濃	灰釉皿			(5.4)	明黄色	印花文	反転復元 1580~1610頃
83	263	I区	NW区第3面下No.76	瀬戸・美濃	灰釉皿	(11.2)			緑黄色		反転復元 折縁皿
84	99	I区	NW区第2面No.73	肥前系陶器	灰釉皿			4.2	濃灰色	削り高台	反転復元
85	118	I区	NE区第2面	肥前系陶器	灰釉小坏	(7.6)	3.2	(3.0)	明緑色	削り高台	反転復元
86	135	I区	NW区第2面	肥前系陶器	灰釉小坏			2.9			反転復元
87	88	I区	NW区第2面No.40	肥前系陶器	灰釉皿	(13.4)			緑灰色	砂目	反転復元
88	83	I区	NW区第2面No.22	肥前系陶器	灰釉大皿			(8.4)	緑灰色	胎土目・削り高台	反転復元
89	136	I区	西トレンチ第2面上	青花	皿	(12.6)			釉:透明釉		反転復元
90	29	I区	NW区第2面No.136	青花	皿	(10.4)	2.3	(5.0)	釉:乳白色	蛇の目釉剥ぎ	反転復元
91	139	I区	N区第2面粘土	青花	皿			(5.5)	釉:透明釉	底部砂目	反転復元
92	120	I区	北トレンチ北斜面 造成土中	青磁	碗	(12.6)			淡灰緑色	波状紋	反転復元 16C第3四半期
93	266	I区	NW区第3面下黄褐色 粘土層No.2	土師器	皿			(5.9)	淡灰肌色	糸切り痕・すず付着	反転復元
94	267	I区	NW区第3面下黄褐色 粘土層No.1	瓦質土器	用途不明				灰色	三巴の刻文	
95	171	I区	NW区第3面No.102	青花	小坏	(4.0)			釉:透明釉		反転復元
96	85	I区	NW区第3面下No.59	青花	皿			(6.7)	釉:透明釉	龍底:福	反転復元
97	268	I区	NW区第4面No.1	青磁	碗			5.2	灰白色	被熱・円状割れ目	反転復元
98	108	I区	NW区第4面No.4	瀬戸・美濃	鉄釉碗	(10.4)			黒褐色		反転復元
99	186	I区	ピット8-①	土師器	皿	(8.0)	1.6	(4.6)	淡肌色	糸切り・すず付着	反転復元
100	12	I区	第3トレンチ SD08 No.6	肥前系陶器	碗			(4.0)	明灰緑色	被熱	反転復元 1610~30年
101	11	I区	第3トレンチ SD08 No.7	肥前系陶器	藁灰釉碗	(11.3)	5.8	(4.2)	灰色施釉(地肌赤褐色)	削り高台	反転復元
102	10	I区	第3トレンチ SD08 No.1	肥前系陶器	灰釉碗			(4.9)	釉:淡緑灰色	削り高台	反転復元 1590~1630年
103	67	I区	NW区-SK24 No.3	備前系陶器	播鉢				赤褐色	外面3条の沈線 4条の縦線・片口	
104	42	I区	NW区-SK24 No.2	肥前系陶器	灰釉皿	長13.2 短12.4	高3.8 底3.6	4.7	緑灰色	胎土目 指圧で輪花文様	反転復元
105	65	I区	NW区-SK19 No.14	肥前系陶器	灰釉鉢	(12.1)			施釉:淡緑灰色 無釉:茶褐色		反転復元
106	66	I区	NW区-SK19 No.8	肥前系陶器	灰釉皿	(12.9)			施釉:淡灰緑色	溝縁皿	反転復元
107	64	I区	NW区-SK22 No.3	青花	碗	(11.8)				口縁漆付着 2条の界線	反転復元
108	140	I区	SK01-第2層	肥前系陶器	灰釉皿	(11.8)	4.1	4.8	釉:灰色	砂目・削り高台	反転復元
109	116	I区	SK01-第2層	肥前系陶器	灰釉大皿	(32.0)			黄灰色		反転復元
110	117	II区	北トレンチ第1面上	瀬戸・美濃	灰釉皿			(5.2)	明黄色	重ね積み釉剥ぎ 胎土目	反転復元 17C前半
111	200	II区	廃土中	瀬戸・美濃	鉄釉小碗			(2.6)	黒褐色		反転復元
112	103	II区	第3遺構面No.13	瀬戸・美濃	鉄釉碗	(12.5)			施釉:淡黄褐色		反転復元
113	104	II区	第2遺構面No.6	備前系陶器	播鉢	(19.4)			茶褐色		反転復元
114	102	II区	SK25 No.1・2	肥前系陶器	灰釉皿	(10.0)	3.6	(3.4)	施釉:淡灰緑色		反転復元 1610~1630年
115	13	II区	No.11	肥前系陶器	鉄釉碗	(11.5)			釉:緑灰茶色~濃緑 灰茶色		反転復元 唐津天目
116	93	II区	表採	肥前系磁器	碗			(4.4)	白灰色	染付・高台に砂付着	
117	151	II区	トレンチ廃土中	青花	皿			(7.2)	釉:透明釉		反転復元
118	101	II区	第1遺構面No.9	青花	皿	(16.2)			施釉:淡青灰色	1条の界線	反転復元 陶胎
119	16	II区		青花	皿	(10.0)	2.8	(5.4)	釉:灰白色 染付:淡青色	割れ口に漆痕	反転復元 16C末
120	145	II区	第2遺構面No.4	青花	碗	(13.2)	5.0	(5.0)	灰茶褐色	外面鉄絵	反転復元 陶胎
121	105	II区	第2遺構面No.8	中国製白磁	皿			(6.4)	施釉:淡灰色	釉剥ぎ	反転復元 陶胎
122	204	III区	S区第1面No.25	土師器	皿	(10.8)			黄褐色	京都系	反転復元
123	192	III区	S区第1面	土師器	皿			(7.4)			反転復元

挿図 番号	実測 番号	区別	出土地点	種別	器種	法量 (cm)			色調	成形・調整・文様	備考
						口径	器高	底径			
124	179	Ⅲ区	S区No38	土師器	皿			(6.7)	黒褐色	回転糸切り 内面煤と油痕	反転復元 灯明皿
125	56	Ⅲ区	N I区第1層No2	瓦質土器	搦鉢				濃灰色	3条の凹線	
126	76	Ⅲ区	N区No12	瀬戸・美濃	灰釉皿	(11.2)	2.2	(6.0)		折縁皿	反転復元 17C前後
127	202	Ⅲ区	S区第1面No2	瀬戸・美濃	灰釉皿	(10.2)			黄灰色		反転復元 灯明皿
128	73	Ⅲ区	S区第2層No8	瀬戸・美濃	灰釉皿	(11.4)	3.4	(3.8)	施釉：緑灰色	高台内墨書跡・二次 焼成・胎土目・削り 高台	反転復元 1580～1610頃
129	48	Ⅲ区	N区No7	備前系陶器	搦鉢				暗赤褐色		
130	47	Ⅲ区	S区No37	備前系陶器	搦鉢				暗赤褐色		
131	49	Ⅲ区	N区1層(表土)	備前系陶器	搦鉢				淡黄褐色		
132	53	Ⅲ区	S区No111	肥前系陶器	灰釉皿	(11.8)			釉：緑灰色	波状口縁	反転復元
133	98	Ⅲ区	W区第1面No1	肥前系陶器	灰釉皿	(11.4)	3.7	5.0	釉：淡灰色	削り高台	反転復元
134	147	Ⅲ区	S区第3層No50	肥前系陶器	灰釉皿	(10.3)	3.0	(4.4)	釉：淡灰色	胎土目	
135	71	Ⅲ区	S区第2層No75 W区第1面No2	肥前系陶器	灰釉皿	(10.3)	3.65	(2.0)	釉：灰緑色	三日月高台	反転復元
136	52	Ⅲ区	C区No2	肥前系陶器	灰釉皿	(11.8)	3.1	(4.6)	黄灰色	波状口縁	反転復元
137	58	Ⅲ区	N I区第1層No18	肥前系陶器	皿			(6.6)	釉：灰色	絵唐津・削り高台	反転復元
138	137	Ⅲ区	E区第1面No1	肥前系陶器	灰釉皿			(4.7)	緑灰色	砂目	反転復元
139	50	Ⅲ区	トレンチ焼土中	肥前系陶器	灰釉皿			4.2	濃緑色	砂目	反転復元
140	51	Ⅲ区	N I区第3層No82	肥前系陶器	灰釉碗			(5.2)	釉：灰褐色	削り出し高台	反転復元
141	55	Ⅲ区	N I区第1層No7	肥前系陶器	灰釉碗			(4.2)	施釉：濃緑色	削り高台	反転復元
142	97	Ⅲ区	S区No101	肥前系陶器	灰釉小坏	(6.7)	3.0	2.9	緑灰色	底部糸切り	反転復元
143	115	Ⅲ区	第2層129	肥前系陶器	薬灰釉瓶	5.7			黒褐色		反転復元
144	57	Ⅲ区	トレンチ中央部1層	肥前系陶器	搦鉢				暗赤褐色	口縁部鉄釉	
145	164	Ⅲ区	N区表土(1層)	肥前系陶器	壺	(16.2)			茶褐色		反転復元
146	106	Ⅲ区	S区第3面No61	肥前系陶器	鉢	(12.7)			緑灰色	部分文様?	
147	189	Ⅲ区	第2層No73	肥前系陶器	鉢	(28.4)			(外)灰白色 (内)緑茶褐色		反転復元
148	45	Ⅲ区	No23	肥前系陶器	薬灰釉瓶			(14.0)	濃灰黒色		反転復元
149	46	Ⅲ区	N I区第1層No5	肥前系磁器	灰釉碗	(9.1)			(外)緑灰色 (内)緑灰色・灰白色		反転復元
150	180	Ⅲ区	S区第1～第2層	青花	皿				黄茶色		
151	59	Ⅲ区	S区No55	青花	皿	(9.4)	2.1	(5.3)	釉：透明釉		反転復元
152	128	Ⅲ区	S区-SD15 No159	肥前系陶器	灰釉碗			(3.8)	青灰色～緑灰色	内面灰釉	反転復元
153	127	Ⅲ区	E区-SD15-3-第4層 No23	肥前系陶器	薬灰釉瓶			(5.3)	乳白色	外面薬灰釉	反転復元

表7 竹田地区出土遺物観察表(金属・土・ガラス製品、製錬関連)

挿図 番号	実測 番号	区別	出土地点	種別	器種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	1辺 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
154	253	I区	NE 430	鉄製品	タガネ	5.7	0.9					最大頭部径0.7cm
155	233	I区	NE区4959?	鉄製品	角釘	3.2	0.4×0.3					頭部1cm
156	238	I区	NW区第1面No78	鉄製品	釘	5.3	0.6×0.7					
157	225	I区	NW区第2層下	鉄製品	カスガイ	5.3	0.6					
158	262	I区	NE区第1面No31	鉄製品	角釘	5.4	0.6×0.7					
159	230	I区	NW区第1面No11	鉄製品	角釘	4	0.6×0.4					
160	249	I区	NE区278	鉄製品	角釘	2.1	0.4×0.3					
161	248	Ⅲ区	N I区第2層No43	鉄製品	角釘	3.1	0.3×0.35					
162	261	I区	NW区第1面No104	鉄製品	角釘	2.4	0.3×0.4					
163	197	I区	SX 01-第2層	鉄製品	角釘	3.8	0.2×0.4					
164	191	I区	NE区第1面No26-②	鉄製品	用途不明	3.1	1.7					板状
165	173	I区	NW区第1面No60	鉄製品	用途不明		4.6×3.2					板状
166	190	I区	NE区第1面No26-①	鉄製品	用途不明	7.5	1.7					板状
167	33	I区	第3トレンチNo32	金属製品	煙管							火皿径1.5cm
168	32	I区	NE区検出面	金属製品	煙管							接合部径0.4cm
169	25	I区	第3トレンチSK12	金属製品	竿秤	12	0.7				22.5	径0.3cm
170	4	I区	第3トレンチ表土 第1層	銅製品	錘	3.2		1.3		0.3	38.9	直方体で通し孔あり
171	3	I区	第3トレンチ西拡張 区1	金属製品	分銅	1.4	1.5	0.8			6.2	繭型
172	163	I区	NW区第2面No43	鉄製品	角釘	6.2	0.5×0.5					



挿入 番号	実測 番号	区別	出土地点	種別	器種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	1辺 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g?)	備考
173	232	I区	NW区第2面ズリ内	鉄製品	タガネ?	4.9	0.9	0.4				ノミ状工具?
174	161	I区	NW区第2面下No134	鉄製品	タガネ	9.0		2.5				頭部径2.5cm 径1.8cm
175	276	I区	NW区第2面下No139	銅製品	小柄	2.8	1.3	0.4			4.4	
176	195	I区	NW区第2面No29	鉄製品	タガネ	8.2	1.2	0.6			33.2	ノミ状工具?
177	162	I区	NW区第2面No25	金属製品	小柄	3.6	1.6	0.8			7.3	棟幅0.6cm
178	34	I区	NW区第2面No100	金属製品	煙管	0.9					0.3	キセル雁首径0.7cm
179	227	I区	NW区第3面No9	鉄製品	用途不明	1.8	0.5	0.1				半円状
180	239	I区	NW区第3面No39	鉄製品	角釘	4.6	0.3×0.2					
181	231	I区	NW区第3面No48	鉄製品	用途不明	6.1	0.4	0.3				半円状
182	247	I区	NW区第3面構築土No52	鉄製品	用途不明	3.8	1.6	0.1				板状
183	256	I区	NW区第3面下No68	鉄製品	角釘	7.4	0.6×0.5					
184	218	I区	NW区第3面No19	鉄製品	火箸	31.0	0.6×0.5					円環
185	178	I区	NW区第2面下 SK19-②	金属製品	小柄	20.3	1.2	0.3×0.2				棟幅0.3cm
186	237	I区	NE区第3面-SX09- 第5層No12	鉄製品	角釘	4.7	0.5×0.6					頭部0.9cm
187	194	I区	SE区SX01-第2層	鉄製品	角釘	7.8	0.6×0.5					
188	243	I区	NW区-SX13近く (炭層)	鉄製品	角釘	5.0	0.6×0.7					
189	254	I区	NW区-SX09- No14-6層	鉄製品	角釘	3.7	0.2×0.2					
190	175	I区	NW区-SK15-①	金属製品	小柄	4.0	1.1	0.1~0.2			3.6	
191	5	I区	NW区-SK20	銅製品	分銅	1.3	0.8	0.2			1.1	繭型
192	196	III区	NI区第2層No72	鉄製品	用途不明		5.4×2.4	0.6~0.3				板状
193	226	III区	W区第2面No17	鉄製品	小柄?	5.8	0.9	0.5~0.3			12.2	ノミ状工具?
194	193	III区	N区No23	鉄製品	角釘	6.3	0.8×0.7					一部欠損
195	245	III区	S区第1面No31	鉄製品	角釘	6.8	0.4×0.5					
196	255	III区	S区No35	鉄製品	角釘	4.9	0.5×0.7					
197	228	III区	S区No53	鉄製品	用途不明	3.6	1.1×0.5	0.5				板状
198	166	III区	W区No12	金属製品	小柄	3.9	0.9	0.3			5.1	
199	257	III区	W区第1層No5	鉄製品	タガネ	4.1	1×0.8					ノミ状工具?
200	240	III区	S区第2層No88	鉄製品	用途不明	3.8	6×0.8		0.7			角形
201	244	III区	S区No49	鉄製品	角釘	2.8	0.6×0.7					
202	259	I区	SE区表土	鉄製品	角釘	4.3	0.5×0.6					上部欠損
203	258	III区	SI区表土	鉄製品	角釘	3.4	0.8×0.7					
204	250	III区	第2層No144	鉄製品	角釘	2.7	0.3×0.2					
205	167	III区	S区第3層No62	金属製品	小柄	5.3	1.5	0.4~0.2			13.9	
206	176	III区	S区No97	金属製品	小柄	4.8	0.4	0.2			5.7	
207	174	III区	第2層No66	鉄製品	ノミ状工具	6.2	0.9×0.8					
208	165	III区	W区第2面No16	金属製品	小柄	4.1	1.2	0.4~0.2			13.3	棟幅0.5cm
209	246	III区	S区-SD15 No155	鉄製品	用途不明	9.6	1.7	0.2				半円状
210	159	I区	NE区第1面下No8	土製品	羽口	9.2		4.0	6	0.8	163	被熱
211	252	I区	NW区第1面No96 第2面No38	土製品	羽口		6.9	2.6			75.0	表面全体に被熱
212	242	I区	第3トレンチ16	土製品	羽口		5.4	3.4			36.1	
213	264	I区	NE区317	土製品	ネコ?	5.0		2.2			37.0	
214	63	I区	NW区第3面上No89	土師器	ルツボ							炭化物付着
215	265	I区	NE区238	土製品	炉壁		4.4	2.3			27.0	
216	54	I区	NE区496	ガラス製品	簪?	4.0	最大幅0.6 最小幅0.3				1.3	螺旋状の文様
217	24	I区	NE区No497	白目			1.2	1.2			5.4	
218	70	I区	第2層-第3トレンチ	鉛		2.2	1.3×0.9				14.3	
219	18	I区	NW区-SK15	鉛			4.9×2.8	2.0			102.6	表面に炭酸鉛
220	86	I区	第1面No35	カラミ			3.2×1.2	0.6~0.5			6.2	板状
221	87	I区	廃土中	カラミ			2×2.4	0.5~0.4			6.3	表面長方形の結晶板状
222	275	I区	NW区第2面下SK20 (ズリ溜)	カラミ			1.8×1.5	0.1			0.9	
223	60	I区	NE区No197	カラミ			3.4×2	0.8			1.8	濃灰青色
224	206	I区	NE区第2面No104	障壁	ネコ	7.5	4.9	2.6				(内)被熱
225	272	I区	NW区第2面下No1	土製品	炉壁		径(炉)5.8 (カ)6.4	(炉)2.2 (カ)2.0			155.9	炉壁上部カラミ全体付着
226	92	I区	NW区第2面 SX09 No2	カラミ			3.3×3	0.8~0.4			198	板状
227	62	I区	NW区第2面No117	土師器	ルツボ							内面二次焼成 口径8.8cm
228	251	I区	NW区第3面No12	障壁	ネコ	3.5		1.35			12.2	
229	278	III区	S区第2層No129	カラミ				2.0~0.2		5.1×3.2	36.9	
230	61	III区	NI区第1層No1	カラミ			3.7×2.2	1.1			41.7	板状

表 8 竹田地区石製品観察表

挿図 番号	実測 番号	区別	出土地点	種別	器種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備考
231	1	I区	東土手第1層	石製品	擦石	11.4	7.9	5.0	530		使用痕
232	220	I区	NE区第1面No53	石製品	擦石		8.1	2.7	192		使用痕・被熱
233	236	I区	第3トレンチ 北壁土手第2層	石製品	砥石	3.1	2.4	1.3	13.5		
234	210	I区	第3トレンチ廃土中	石製品	砥石	4.8	2.6	3.0	7.8		使用痕
235	40	I区	NW区-SK24図No4	石製品	要石	11.5	9.8	6.5	575		
236	212	I区	NW区-SK22 No1	石製品	要石	16.2	9.5	7.3	1,600		金属分付着
237	38	I区	NW区-SK23	石製品	要石	37.2	27.0	11.0	14,600	安山岩	
238	2	I区	SK05-2	石製品	要石	12.15	10.55	5.3	880	安山岩	
239	30	I区	NE区第1面	石製品	要石	24.5	20.4	8.0	5,000	安山岩	
240	211	I区	下層確認トレンチNo1	石製品	要石	20.0	10.5	7.0	2,500	安山岩	
241	274	I区	NW区-S5	石製品	石臼	13.1	9.05	6.2	905		
242	114	I区	S-1	石製品	石臼	19.4	7.4	10.0	1,760		直径20.7cm
243	209	I区	NE区ビット-33内	石製品	石臼	20.0	13.5	6.3	2,090		直径20cm・工具痕
244	31	I区	NW区ビット26-2	石製品	石鉢			2.9	660	緑色凝 灰岩	口径(36cm)
245	279	I区	NE区第1面No24	石製品	石鉢		9.1	2.9	220	緑色凝 灰岩	
246	241	I区	NW区第1面図No47	石製品	石鉢			3.3	1,660		底径18.7cm・被熱
247	216	I区	NW区第3面No27	石製品	石鉢			3.3	126		底径(15.8cm)
248	277	I区	NW区第1面-S2	石製品	石鉢			2.0	243		削り、鑿痕 口径(28cm)
249	203	I区	NW区第2面図No1	石製品	窪み石	16.5	11.0	8.9	2,000		完形
250	113	I区	NW区第1面図No48	石製品	窪み石	16.6	16.5	9.2	2,250		マンガン付着・完形
251	37	I区	表採	石製品	窪み石	13.9	12.6	8.05	1,830		深さ2.2cm・径6.5cm 完形
252	39	I区	表採	石製品	窪み石	21.2 (凹)11.2	15.6 (凹)9.0	5.0	2,800	安山岩	(凹)深さ3.5cm ノミ痕幅0.5cm 完形
253	150	I区	第3トレンチ SD08-5-3	石製品	用途不明	28.7	25.7	6.1	5,200		縁5~6cm 刺突・ノミ痕幅0.5cm
254	160	I区	第3トレンチ SD08-S4	石製品	用途不明	16.0	16.4	5.5	1,670		(表面)幅0.8cm刺突痕 (側面)幅2cmノミ痕
255	168	I区	第3トレンチ SD08 S-1	石製品	用途不明	13.4	7.4	6.5	690		ノミ痕幅0.5cm
256	260	III区	廃土中	石製品	窪み石	13.9	13.5	7.3	2,000		径13.9cm・深さ2.2cm 完形
257	41	III区	NI区第1層No8	石製品	用途不明	18.9	11.5	5.5	1,680		表面2cmノミ痕
258	107	III区	S区第1面No9	石製品	石鉢?		7.4	2.5	220		
259	184	I区	第3トレンチ SD08-S2	石製品	用途不明	8.2	6.1	4.2	256	凝灰岩	擦痕

表 9 石見銀山遺跡基石・円盤状土製品集計表

※268は、陶器円盤状土製品

挿図 番号	実測 番号	区別	出土地点	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	色調
260	154	I区	NW区第2面下	2.0	0.8	4.0	黒色
261	157	I区	NW区第2面下No124	2.4	0.8	6.0	白灰色
262	213	I区	SE区379	2.6	0.7	5.3	緑灰色
263	219	I区	第3トレンチ拡張部第2層	2.4	0.8	5.0	黄褐色
264	223	I区	SE区385	2.3	0.9	4.8	緑灰色
265	224	I区	NE区403	2.0	0.85	4.5	灰色
266	235	I区	廃土中	2.0	0.85	4.5	黄灰色
267	273	I区	第3トレンチ土間から表土の間	2.3	0.7	3.6	黒色
268	271	I区	西側表採	2.1	0.7	6.8	淡黄緑色
269	153	III区	NE区No5	2.1	0.8	4.0	黒色
270	155	III区	NI区第1層No14	1.8	0.7	3.2	白黄色
271	156	III区	N区No28	1.9	0.6	2.5	暗緑色
272	158	III区	S区No115-第2層	2.0	0.6	3.8	緑灰色
273	222	III区	S区No91	2.3	0.7	4.0	灰色
274	234	III区	S区No40	1.7	0.7	2.3	灰色
平均値				2.1	0.8	4.1	



## 第5章 まとめと課題

今次の報告としては、於紅ヶ谷地区、竹田地区について述べてきた。於紅ヶ谷地区は平成12年度の概報において概括しているため、本概報では竹田地区の遺構・遺物と今後の課題についてのみ以下に詳述する。

### 第1節 竹田地区の遺構

#### (1) 土坑

竹田地区からはユリカスが堆積した土坑を8基確認した。大きく分けて方形と円形がある。方形に関してはS K01は北側に石積みを伴ない、S K05は北側に大きな石を1個置いている他は素掘の土坑である。

S K01については石積みがある北側はズリの堆積した土坑(S K10)を壊しており、壁面の強化と考えられる。S K05は石を置いて土を充填している。この用途は不明である。埋土は基本的にはユリカスである。しかし、ユリカス単層のものとは幾つかの土層が分かれるものがある。

S K01は中間にマンガン分を多く含んだ層があり、その上下にユリカスが堆積している。これらはユリカスが堆積した状況が異なっていることを表しており、類例をまとめて検討する必要がある。

円形のS K16はユリカスが堆積していたが、それを除去すると、壁面が被熱しており、当初からユリカスを堆積させるために掘られてた土坑ではない可能性がある。床面もすり鉢状のものや平坦なものがあり形態は多様である。S D10もユリカスが堆積していたが、その表面は被熱している。この原因も解明する必要がある。

#### (2) 炉跡

竹田1区第4遺構面のS X14は方形炉であり、科学分析の結果、灰吹き炉の可能性が高い。しかし、形状が同じ方形でも幾つかの違い

を指摘できる。まず、構築している粘土である。S X14は水簸しているような均質で、混じりけのない黄色粘土を使用し、S X13はややピンクかった白色粒子を含む粘土である。また、S X14は床や壁面も黄色粘土を使っているがS X13の床には粘土がない。S X13には鉄器片や土師質土器を含むがS X14にはない。

詳細は不明であるが、同様の方形の炉跡としては、石銀千畳敷S B01 S X03(16C代か 一辺38cm)、石銀藤田S B01 S X11(16Cか 一辺50cm)、石銀藤田S B02 S X03(17世紀前半30×50cm)が知られる。

また、第2面S X08や第3面S X12も方形である。これらに関しても今後、科学分析を行い、炉の性格を明らかにする必要がある。

### 第2節 出土遺物

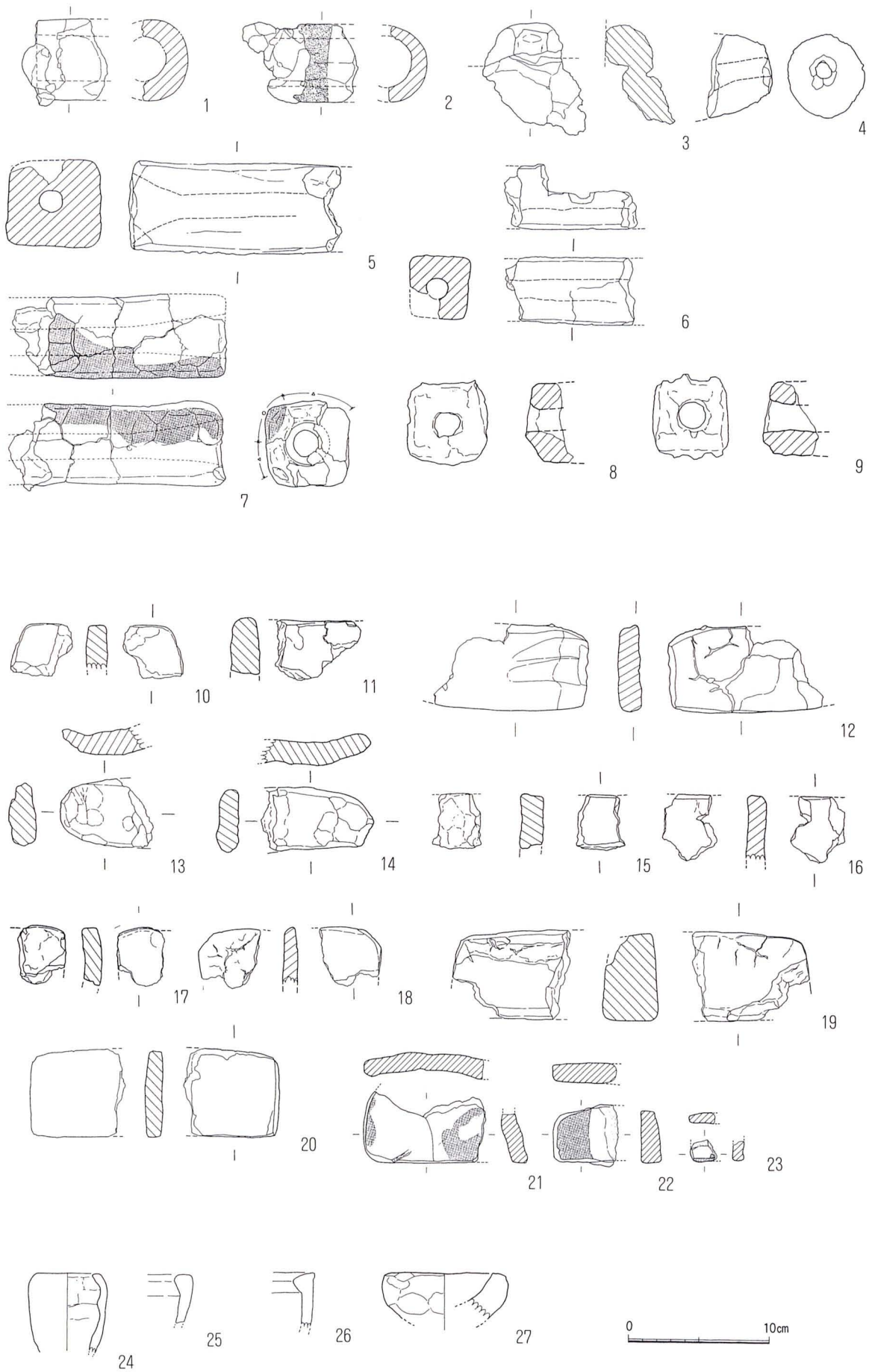
#### (1) 製錬関連土製品

竹田地区を含め、今までの石見銀山遺跡での調査において製錬関連土製品が出土している。出土点数はかなりあるが、小片であったり、報告されている点数は意外と少ない。(第33・34図、表10)

形態・用途的に大きく4種類に分け報告されている。①羽口(第33図1～9)、②板状土製品(第33図10～23・第34図3～9)、③ルツボ(第33図24～27)、④炉壁(第34図1～2)である。

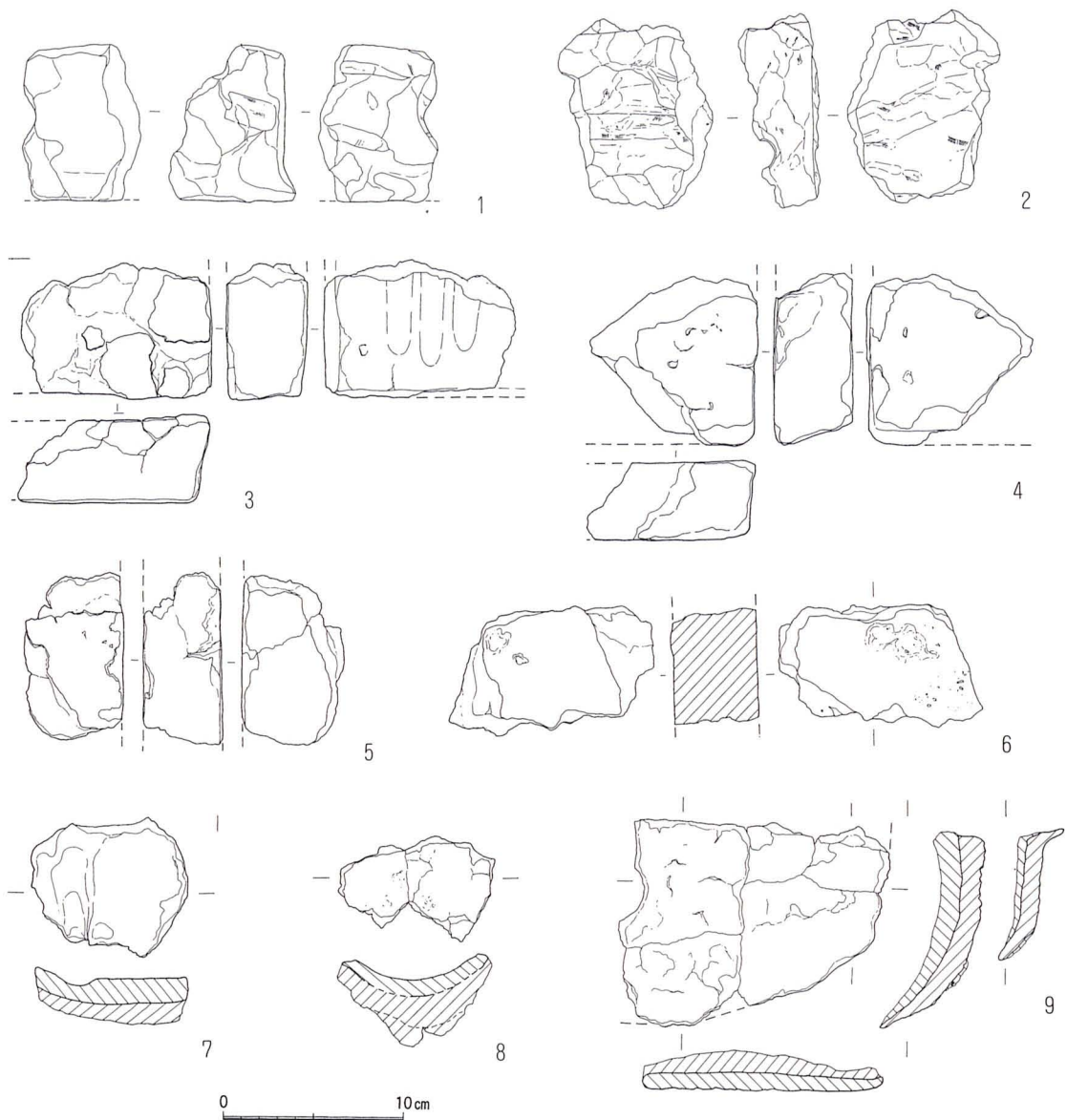
羽口は吹子の送風管の先端に付き、羽口先端は炉内に置かれる。石見銀山遺跡からは大きく分けて断面円形の羽口と断面方形の羽口が出土している。さらに、断面方形の羽口は大小の大きさがある。断面方形のものは、全体に直方体で、円形の通風穴が開いている。先端に金属分が残存する物がある。完形はなく、すべて破損している。

石銀藤田地区S B05からは大小の羽口が出土



第33図 石見銀山遺跡製錬関係土製品実測図① (S = 1/4)





第34図 石見銀山遺跡製錬関係土製品実測図② (S=1/4)

しており、小は断面の厚さが最大で4.8 cm、通風穴の径が1.5 cm前後を測る。大は断面の厚さが6.7 cm、通風穴の径が1.8 cmを測り、吹子の木呂竹との接合部分がほぼ完全に残る。円形の羽口は石銀藤田S B01から出土し、直径5.5 cm、通風孔の径が1.3 cmを測る。竹田地区から出土した羽口は大型の断面方形の羽口のみであった。

石見銀山の鉱山技術書や絵巻には断面方形の直方体の羽口しか記載が無く、円形の羽口の用途や使用上の差は不明であり、自然科学的調査も今後必要である。

羽口は送風装置の先端だけでなく、炉内の鉱石の溶解とともに溶け出し、造滓剤としての役割を果たす。羽口の製作は専門職人によって行

われ、江戸時代後期の技術書には羽口原料の粘土は「荻峠」周辺で採取されたと記載されている。(『山中家文書』)

板状土製品はほとんど破片で出土し、大小に分けられる。A類は幅5 cm、厚さ1.3 cmを測り、扁平で、方形を基本にしているが、角は丸みを持つ。断面は台形をし、幅が厚い方を下にするすわりがよい。僅かに湾曲して内側は被熱し、金属分が付着したもの、ガラス質になっている個体がある。B類は小さく、於紅ヶ谷地区で出土し、厚さ0.8 cmを測り、形態はA類に似る。

これらの土製品は、用途は明確ではない。しかし、石見銀山の技術書(『山中家文書』)や絵巻の中に、炉の周辺に置かれた湾曲した板状の

土製品が書かれ、「火除ねことも言」と添え書きされているものに該当すると一般的に考えられている。今後、付着している金属成分の科学調査などの検討が必要である。

ルツボは大別して3種類ある。A類は千畳敷から出土しており(24)、口縁部から体部にかけての破片であり、器壁が薄く、直線的に伸びるものである。B類は口縁部が内側に肥厚し、器壁は厚い(25、26)。C類は口径に対し器高さが低く単純な口縁部を持つもので、石銀藤田地区や竹田地区のもので、トリベの可能性もある(27)。一部の個体には内面に金属分が付着している。

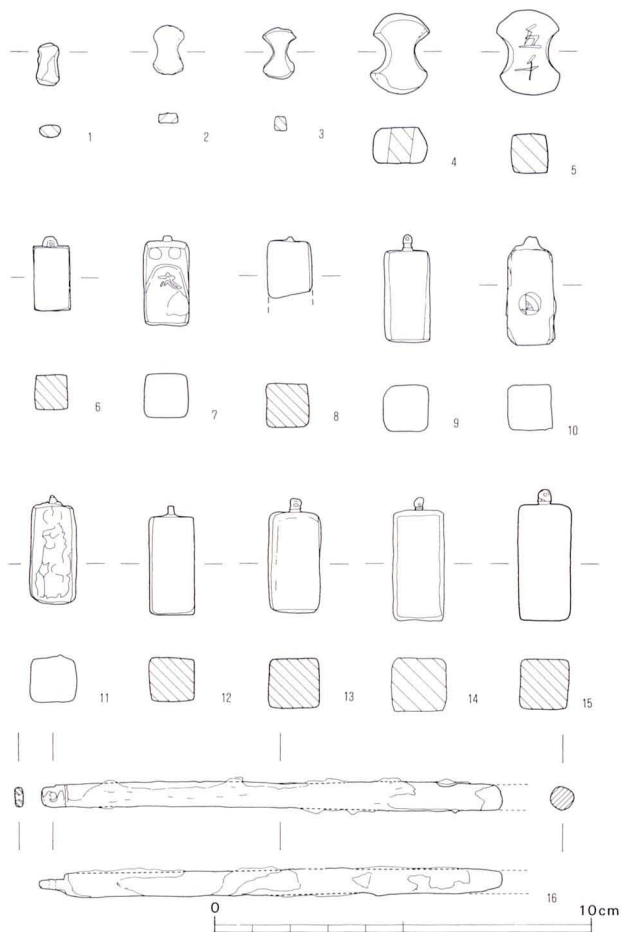
炉壁については破片数が少なく現状では炉の上部構造を復原するには至らない。

## (2) 計量器

石見銀山遺跡からは計量器と考えられる遺物として、繭型分銅6点、直方体の錘が10点、竿1点出土している。(第35図)。腐蝕が進んでいるが、現状での法量は表12である。錘が11点と多く、藤田地区から8点(錘6点、分銅2点)出土していることが注目される。竹田地区からは錘の周辺から竿と考えられる棒状青銅製品が出土している。全長は不明であるが、長さ12cmで折れて、先端は平坦に加工され円形の穴が開けられている。断面形は円形である。大阪府堺環濠遺跡のS K T 39 S B 301やS K T 202の資料に類似し、天秤の竿の可能性もある。石銀藤田地区や竹田地区は遺構や遺物から採掘から製錬作業まで一貫して行われたと考えられ、これら計量器は各地区で秤が使用されたことを示しており、試吹きや灰吹き炉で得た銀の重量を測定したり、添加物を計測することに使用された可能性がある。使用方法の確認や成分分析や製作技術の解明など今後の課題である。

### 参考文献

岩田重雄「堺環濠都市遺跡出土の計量器」『堺市文化財調査報告第51集』1990  
 宮田佐知子「国内出土の権衡資料」『大阪市文化財



第35図 石見銀山遺跡計量関係遺物実測図 (S=1/2)

論集』1994

堺市教育委員会『堺環濠都市遺跡調査概要報告S K T 39地点』1991

堺市教育委員会『堺市文化財調査報告第49集S K T 202地点』1989

松江市教育委員会『史跡松江城上御殿跡発掘調査報告書』1987

広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査団『富田川河床遺跡発掘調査報告』1977

鳥根県教育委員会『富田川河床遺跡発掘調査報告書』1983

鳥根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査報告I』1999

## (3) 陶磁器からみた竹田地区の時期

日本製陶磁器としては中世土師器、瀬戸美濃、肥前系陶磁器、備前、石見焼が、輸入陶磁器としては青花、白磁、青磁が確認される。瀬戸美濃は大窯3後半から4前半と考えられる。



志野は大阪城跡の調査結果によると豊臣後期(1598~1615)から出現する。備前播鉢(129)は斜め方向の擦り目があり、近世I期(16世紀第2四半期から17世紀第1四半期)と思われる。次に遺構面毎に見てみたい。第1面は肥前系陶磁器が出土しており肥前系陶器皿を見ると胎土目より砂目の方が多い。また、肥前系磁器も出土しており、第1面は肥前系磁器が出現した後の時代である。実測はしていないが3Tからは1640年代の波佐見の青磁鉢や17世紀中頃から後半の武雄周辺の刷毛目鉢が出土している。3Tはやや新しい様相があるが、この時期まで竹田I区は使用されていた。

第2面は肥前系磁器は出土していない。しかし、肥前系陶器(87)のように僅かに砂目の灰釉皿が出土しており、17世紀前半と考えられる。第3面は調査区が狭いという課題があるが、肥前系陶磁器は出土していない。青花の割合が増える。現状では16世紀末と考えておきたい。第4面に関しては出土陶磁器が2点と少なく、今後の課題である。

#### (4) 竹田地区出土の陶磁器の様相(表11)

今回出土した陶磁器は表採した石見焼15点を含め、1718点である。<sup>(注6)</sup>

第1遺構面では土師器45点、瀬戸美濃18点、肥前系陶器580点、肥前系磁器292点、備前31点、信楽5点、瓦質陶器1点、青花131点、中国製白磁2点、中国製青磁8点、褐釉陶器3点、不明陶磁器53点である。

第2遺構面では土師器22点、瀬戸美濃7点、肥前系陶器60点、備前2点、青花19点、中国製白磁3点、中国製青磁1点である。

第3遺構面では土師器18点、瀬戸美濃2点、瓦質陶器1点、青花8点、中国製白磁1点である。第4遺構面では瀬戸美濃1点、中国製青磁1点である。

石見焼及び不明陶器を除いた出土遺物の割合は竹田地区全体では土師器・瓦質土器8.47%、瀬戸美濃2.44%、備前・信楽2.98%、肥前系

陶器52.16%、肥前系磁器18.71%、青花13.53%、青花以外の輸入陶磁器1.71%である。詳細に見るとI区第1遺構面で、土師器・瓦質土器4.11%、瀬戸美濃1.61%、備前・信楽3.22%、肥前系陶器52.06%、肥前系磁器26.12%、青花11.72%、青花以外の輸入陶磁器1.16%、第2遺構面では、土師器19.30%、瀬戸美濃6.14%、備前1.75%、肥前系陶器52.63%、青花16.67%、青花以外の輸入陶磁器3.51%、第3遺構面で、土師器・瓦質土器63.33%、瀬戸美濃6.67%、青花26.67%、青花以外の輸入陶磁器3.33%である。

II区は瀬戸美濃6.98%、備前2.32%、肥前系陶器41.86%、肥前系磁器11.63%、青花27.91%、青花以外の輸入陶磁器9.3%、III区では土師器・瓦質土器15.57%、瀬戸美濃2.7%、備前・信楽2.99%、肥前系陶器58.68%、肥前系磁器2.99%、青花15.57%、青花以外の輸入陶磁器1.5%である。(第11表)

石見銀山遺跡から出土する肥前系陶器は灰釉が最も多い。その他に鉄釉や肥前系陶器の初期の段階に多いとされる藁灰釉の製品も少ないが存在する。<sup>(注7)</sup>今回、山瀬窯のものや岸岳窯の製品を確認することができた。<sup>(注8)</sup>ただし、出土した層位は肥前系磁器を伴う遺構面である。

第1遺構面からは江戸時代初めの上野・高取系陶器も出土しており、今後、肥前系陶器の流通について検討することが可能になろう。

(注6) 1999年に出土した遺物については一部しか整理が終了しておらず、出土総数は増える。

(注7) 佐賀県有田町立歴史民俗資料館村上伸之氏の御教示による。

(注8) 佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏の御教示による。

#### 参考文献

藤澤良裕「瀬戸美濃大窯の編年」『瀬戸市史陶磁史篇4』1993

森毅「秀吉期城郭出土の土器・陶磁器」『土器・陶磁器からみた織豊期城郭』1999

乗岡実「備前焼播鉢の編年について」『第3回近世備前焼研究会資料』2000

目次謙一「石見銀山遺跡の出土銭貨について」『出土銭貨』第15号 2001

### 第3節 竹田地区調査のまとめと課題

谷間に石垣を伴う平坦面が階段状に連なる景観が多い石見銀山の中で、石銀藤田地区と竹田地区は平坦面も広く、開放感がある。今までの調査と同様、その開発が戦国期に遡る可能性が指摘されていた。平成11～13年度に実施した調査は狭い範囲を対象にしたものであったが以下のような成果を挙げることができた。

#### 【Ⅰ区】

調査は途中であるが、少なくとも4面の遺構面を確認した。南側の地山部分では遺構の重複が激しく、どの遺構面に伴うか確定できなかったが、北側の盛土部分では最上層の第1遺構面は17世紀中頃までの遺物が出現する。被熱土壌やその周辺からの発泡したカラミ、ユリカス堆積土坑、石鉢などを確認した。

第2遺構面からはズリが堆積した土坑や炉跡、酸化マンガン鉱石、ユリカス堆積土坑などを確認した。第2遺構面からは肥前系磁器は出土しないが、肥前系陶器の溝縁皿が出土しており、17世紀前半ごろと思われる。

第3遺構面はわずかな整地層を挟んで下層に位置する。方形炉跡を確認し、その周辺には炭化物が多数散布していた。周囲からは先端に円環をもつ断面方形の棒状鉄製品を始め多くの鉄製品や無文銭が発見された。棒状鉄製品は石銀藤田地区の鉄鍋に伴う火箸と形状は類似する。

第4遺構面もわずかな整地層を挟んでおり、頻繁に盛土整地を行っている。平成11年度の下層確認トレンチで発見された方形炉跡は骨片の存在や科学分析の結果、灰吹炉の可能性が高く、鉄鍋や絵巻や文献にある円形炉だけでなく形態が発掘調査で発見されたことの意義は高い。方形炉でどのように灰吹きを行っていたかなど新たな課題が出てきた。第4面遺構面は肥前系陶器を含まない時期であり、16世紀末以前と考えられる。

#### 【Ⅱ区】

調査範囲が狭いが、第1遺構面からは集石遺構やピットが検出された。出土した遺物から17

世紀中頃と考えられる。第2遺構面からは溝やピットが確認された。第3遺構面は明瞭な遺構が確認されず、遺構面として良いか判断できないが、検出面は堅く、今後の課題とする。

#### 【Ⅲ区】

第1遺構面からは被熱土壌や炭化物散布、溝、ピット等が検出された。遺物としても陶磁器以外に羽口、カラミ、鉄製品があり、Ⅰ区同様、製錬作業を行っていたことが分かった。時期は出土遺物から17世紀中頃であり、Ⅰ～Ⅲ区までほぼ同時期に廃絶していることが判明した。

以上の調査結果を要約すると下記のとおりである。

①平坦面の土地利用の変遷が明らかになった。

竹田地区は地山削平だけでなく、大規模な盛土により平坦面を造りだしている。Ⅰ区の大造成は2 m以上の盛土を伴い、16世紀後半に行われた。大造成以外にも随時、小規模な盛土による整地も行っていた。Ⅱ区やⅢ区においても盛土により遺構面は造られていたことが部分的な掘り下げから推定される。

②16世紀後半から17世紀中頃の製錬技術が明らかになった。

石見銀山遺跡では発見例が少なかった方形炉を確認し、科学調査との連携により、灰吹炉の可能性が高いことがわかった。また、製錬の過程で使用する鉛や酸化マンガンなどが始めて確認でき、物証として提示できた。

③竹田地区の地形改変と画期が明らかになった。

竹田地区の調査区では17世紀中頃以降の遺物は出土せず、急速に平坦面の使用がなくなったと考えられる。現在の竹田地区の景観（平坦面が多数存在する）は、17世紀中頃以前の景観が良好に残っていることが分かった。

今後の課題としては、今回明らかにし得なかった、製錬の作業空間復元をはじめ、消費地としての遺物の検討、多数存在する竹田地区の平坦面利用の実態などがある。



表10 石見銀山遺跡製錬関連土製品観察表

番号	地区名	遺構面等	挿図番号	種別	備考
1	栃畑谷	Ⅱ区SB02からSD03周辺	22-85	羽口	
2	栃畑谷	Ⅱ区SB02からSD04周辺	22-86	羽口	
3	栃畑谷	Ⅱ区SB02からSD05周辺	22-87	羽口	
4	藤田	SB01・第3遺構面SX07	39-6	羽口	16C末～17C初
5	藤田	SB05	65-17	羽口	
6	藤田	SB05・SX02	65-16	羽口	
7	於紅ヶ谷	B3b	26-76	羽口	16C末～17C前半
8	千畳敷	SB02・SX01	29-13	羽口	17C前半
9	千畳敷	SB02・SX01	29-12	羽口	17C前半
10	藤田	SB02	53-27	障壁	17C～18C前半
11	藤田	SB01・第3遺構面SX07	39-7	障壁	16C末～17C初
12	藤田	坑口前トレンチ	41-18	障壁	
13	藤田	SB06・SX01周辺	66-12	障壁	17C前半
14	藤田	SB06・SX01周辺	66-13	障壁	17C前半
15	藤田	SB08	70-21	障壁	17C後～18C
16	藤田	SB08	71-10	障壁	17C後～18C
17	藤田	SB10	75-17	障壁	17C～18C前半
18	藤田	SB10	75-18	障壁	17C～18C前半
19	藤田	SB10	75-19	障壁	17C～18C前半
20	藤田	SB10	75-20	障壁	17C～18C前半
21	於紅ヶ谷	C2c	26-73	障壁	16C末～17C前半
22	於紅ヶ谷	C3c	26-74	障壁	16C末～17C前半
23	於紅ヶ谷	C2c	26-75	障壁	16C末～17C前半
24	千畳敷		31-15	埧塙	17C前半
25	千畳敷		31-16	埧塙	17C前半
26	千畳敷		31-17	埧塙	17C前半
27	藤田		82-15	埧塙	
1	栃畑谷	上層製錬遺構	27-133	障壁(炉壁)	
2	栃畑谷	Ⅱ区SK02	27-134	障壁(炉壁)	
3	出土谷	Ⅱ区SX04	39-1	炉壁	18世紀後半
4	出土谷	Ⅱ区SX04	39-2	炉壁	18世紀後半
5	出土谷	Ⅱ区SX04	39-3	炉壁	18世紀後半
6	出土谷	Ⅱ区SX04	39-4	炉壁	18世紀後半
7	出土谷	Ⅱ区SX04	39-5	炉壁	18世紀後半
8	出土谷	Ⅱ区SX04	39-6	炉壁	18世紀後半
9	出土谷	Ⅱ区SX04	39-7	炉壁	18世紀後半

表11 竹田地区遺物集計表

種別	I区1面	%	I区2面	%	I区3面	%	I区4面	%	Ⅱ区	%	Ⅲ区	%	合計	%
土師器・瓦質土器	46	4.11	22	19.30	19	63.33	0		0		52	15.57	139	8.47
瀬戸美濃	18	1.61	7	6.14	2	6.67	1	50	3	6.98	9	2.70	40	2.44
備前・信楽	36	3.22	2	1.75	0		0		1	2.32	10	2.99	49	2.98
肥前系陶器	582	52.06	60	52.63	0		0		18	41.86	196	58.68	856	52.16
肥前系磁器	292	26.12	0		0		0		5	11.63	10	2.99	307	18.71
青花	131	11.72	19	16.67	8	26.67	0		12	27.91	52	15.57	222	13.53
青花以外	13	1.16	4	3.51	1	3.33	1	50	4	9.30	5	1.50	28	1.71
小計	1118	100	114	100	30	100	2	100	43	100	334	100	1641	100
不明・石見焼	70		0		0		0		1		6		77	
合計	1188		114		30		2		44		340		1718	

表12 石見銀山遺跡計量関係遺物観察表

第35図 番号	出土地区名	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	文献	挿図番号
1	藤田	分銅	1.2					1999	82-8
2	竹田Ⅰ区2面	分銅	1.3		0.2	1.1		本報告書	
3	山吹城跡下屋敷5T	分銅	2.1			14		1999	13-3
4	栃畑谷Ⅰ区1T	分銅	1.35		0.9	1.32		2000	9-23
5	藤田	分銅	2.2			40.48	「5匁」	1999	82-7
6	栃畑谷Ⅱ区	錘	2.0	2.0	0.9	11.37		2000	21-84
7	藤田	錘	2.35	1.1	1.1	22.92	「大」、円形の刻印	1999	82-6
8	藤田	錘	1.6	1.1	1.1			1999	82-5
9	藤田	錘	2.85	1.2	1.2	25.84		1999	82-4
10	宮ノ前2区	錘	2.9	1.2	1.2	22.8	扇の刻印	未報告	
11	宮ノ前0区	錘	2.9	1.25	1.25	31		未報告	
12	藤田	錘	2.9	1.1	1.1	27.94		1999	82-2
13	藤田	錘	3.1	1.3	1.3	35.8		1999	82-3
14	竹田Ⅰ区3T	錘	3.2	1.3	1.3	38.9		本報告書	
15	藤田	錘	3.1	1.3	1.3	40.48		1999	82-1
16	竹田Ⅰ区3T	竿	12.0					本報告書	
	竹田Ⅰ区3T	分銅	1.4		0.8	6.2		本報告書	第28図191
	富田川河床遺跡	錘	2.25	1.2	1.2	28.81	「慶長」「卯年」「雲」	1983	15-5
	富田川河床遺跡	皿						1977	12-4
	松江城	錘	2.5	1.4	1.4	3.5		1989	14-3

法量は各報告書から転載

島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要10』2000

島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査報告』1999

島根県教育委員会『富田川河床遺跡発掘調査報告書』1983

広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査団『富田川河床遺跡発掘調査報告』1977

松江市教育委員会『史跡松江城上御殿跡発掘調査報告書』1989



表13 竹田地区石造物一覽表

挿図 番号	実測 番号	型式	部位	規模 cm 幅×高さ	年紀銘	銘 文	備 考
1	14	A		26×87		(右面) 在 (正面) 此 (左面) 中	オオバタ石
2	9	A		(25・5) × (85・5)			福光石
3	12	B		22 × (99)	寛永十年 ^一六三三<	(正面) 于時寛永十年	福光石
4	10	B		20 × 70・5			オオバタ石
5	8	C	相輪	21・5 × (71)			福光石
6	5	C	相輪	24・2 × (65)			福光石
7	2	C	相輪・笠	(40) × (69・5)			福光石
8	13	C	相輪	14 × (36・5)		(正面) 火	福光石
9	11	C	笠	(45) × (28・5)			福光石
10	3	C	笠	(36) × (23・5)			福光石
11	6	C	笠	44 × 24・5			福光石
12	7	C	笠	(38) × (23・5)			福光石
13	1	C	笠	(47) × (15)			福光石
14	4	C	基礎	33 × 29・5	慶長七年 ^一六〇二<	(正面) 于時慶長七年 究竟一乗 □晴譽妙休善女 □彼屋 施主敬白	福光石

型式凡例

A、一石宝篋印塔 B、一石五輪塔 C、組合せ宝篋印塔